

Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition

■主催: **JEITA** 一般社団法人電子情報技術産業協会

■お問い合わせ: 一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル

電話: (03) 6212-5231 FAX: (03) 6212-5225 E-mail: contact2013@inter-bee.com

Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition

International Broadcast Equipment Exhibition Inter BEE

REVIEW 2012

REVIEW 2012

音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト

Inter BEE online
www.inter-bee.com

Inter BEE 2012

International Broadcast Equipment Exhibition

Inter BEE 2012(第48回)2012国際放送機器展は、平成24年11月14日(水)から11月16日(金)までの3日間、千葉市・幕張メッセにおいて、5省庁・団体の後援、30団体の協力により開催した。

本年より、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟に加え、新たに総務省、経済産業省、一般社団法人電波産業会の後援を得るとともに、協力団体についても6団体増加し、関係官庁・団体の一層の支援、協力を得て開催した。

今回で48回を迎えるInter BEEは過去最多の出展者が集い、プロフェッショナル向けの音と映像と通信の最新技術が紹介され、4K、8Kなどの超高精細映像技術、セカンドスクリーンやスマートテレビなどの新しいメディアの可能性、V-Low、ホワイトスペースなどの電波の有効活用、デジタルサイネージやプロジェクションマッピングなどの新たなビジネスモデル等、国内外の様々な企業・団体がメディア産業の今とこれからの指し示す開催となった。

展示と共にメッセージを発信するコンファレンスでは、昨年に引き続き開催したInter BEE Content Forumやチュートリアル・セッション、民放技術報告会に加え、今回新たにCross Media Theaterを設置し、『V-Lowセッション』、『IPDCフォーラムシンポジウム』、『Asia Contents Forum』、『Pre Visualization(プリビズ)セッション』など、国内外のトップクリエイターや第一線で活躍するプロフェッショナルがメディアとコンテンツの多様性と可能性を訴求した。



Exhibitors

過去最多の出展者が参加

世界の放送技術を牽引する企業が一堂に集結。デジタル化の先にある次のビジネスに向けて多くのテクノロジーが披露され、放送ビジネスの新しい可能性を提案した。

出展者：**871**社(過去最多)

海外出展者：**491**社(過去最多)

Trading Visitors

幅広い分野からの ビジネスユーザが来場

展示領域の拡大に合わせ、従来の来場者層に加え新しい来場者層も参加、新たなテクノロジーを求め出展者との交流が行われた。プレス取材も多く、国内外に広く紹介された。

来場者：**31,857**名

報道関係者：**343**名

International

世界が目にする最先端技術

4K / 8Kの技術革新は海外からも注目度が高く、ワンセグ放送やIPデータ放送など日本で発展してきた次世代の放送技術は新興国にも拡がりを見せ始めた。

海外出展者：**35**ヶ国・地域

海外来場者：**35**ヶ国・地域



Exhibition Category

Professional Audio

心に響く音は テクノロジーで再現される

デジタル・オーディオ・ワークステーションと IP テクノロジーを多くの来場者が体感。さまざまな現場に応じた使い勝手の良い機材や小型軽量化、コストダウンなどニーズに応じた新製品が展示された。

■プロオーディオ機器

マイクロホン、レコーダ、デジタル オーディオ ワークステーション(DAW)、コンソール、ミキサ、マスタリング機器・システム、音声圧縮・伝送技術、各種コンバータ、エフェクタ(ハード、プラグイン)、アンプ、プロセッサ、イコライザ、インターフェース、スピーカ、プレーヤ、オーディオメータ、ラウドネス関連機器、音響設計・制御・施工、設備音響(映画、商業施設)、PA システム、ライブサウンドシステム、プロフェッショナル用電子楽器、PC オーディオシステム、ヘッドホン、ヘッドセット、インターカム、伝送ケーブル、アクセサリ、電源、ラック、ケース、バッグ、その他周辺機器

Production & Post-Production

創造はさらなる価値を 求めて進化する

最も注目を集めた4K 映像制作技術、個性的な技術が際立つカメラ。汎用性の高い撮影から編集、送出までの一気通貫したワークフローに注目が集まった。

■プロダクション関連

撮像装置(HDTV システム、スタジオカメラ、VTR 一体型カメラ、カムコーダ、4Kカメラ、デジタルシネマカメラ、3Dカメラ、クレーンカメラ、レンズ、その他周辺機器)、記録装置(ビデオサーバー、ファイルサーバーシステム、DVD システム、BD システム、VTR、メモ리카ード、メモリーデバイス、光ディスク、ビデオテープ、データ圧縮技術、その他周辺機器)、表示装置(映像モニタ、マルチディスプレイ、プロジェクタ、LCD・PDP・LED・有機EL ディスプレイ、プロンプタ、その他周辺機器)

■ポストプロダクション関連

編集・制作装置(編集機、スイッチャ、ルーティングスイッチャ、ノンリニア編集システム、VFX、カラーコレクション、ペイントシステム、字幕・サブタイトル制作システム、タイトル制作システム、キャラクタージェネレータ、合成システム&ソフトウェア、メディアコンバータ、各種エンコーダ、その他関連ソフトウェア・周辺機器)、マルチメディアシステム(CG制作システム、アニメーション制作システム、バーチャルスタジオシステム、モーションキャプチャ、ソフトウェア&システム、その他関連ソフトウェア・周辺機器)、制作管理システム(コンテンツマネジメントシステム、システム統合技術、データベース技術、ストレージ機器、アーカイブシステム、その他関連ソフトウェア・周辺機器)

Professional Lighting

光で表現し コミュニケーションする

LED 照明システムの拡張によって、最新の照明システムが集結。舞台芸術やエンターテインメントを追求した映像と音響とのコラボレーションを可能にするソリューションが紹介された。

■プロライティング機器

スタジオ照明機器・設備、舞台照明機器・設備、テレビ照明機器・設備、映画照明機器・設備、写真スタジオ用照明機器・設備、調光システム、調光卓、コントローラ、ディマー、無線遠隔操作装置、特殊効果(エフェクト)機器、サーチライト、大型エフェクト、映像投影機器(プロジェクタ)、プロジェクションマッピング、LED 機器、ストロボ、照明パト昇降装置、配線機器、ケーブル、その他周辺機器

Distribution & Delivery

情報は多様な手段で 伝えられる

注目を集めた 4K コンテンツの配信技術。その他にも、様々なデータ伝送サービスや導入事例など、次のビジネスにつながる提案が行われた。

■送出・送信システム関連

送出システム(自動番組送出システム(TV、ラジオ)、自動 CM 送出システム(TV、ラジオ)、サーバシステム、IT ソリューション(ブロードバンドシステム)、ファイルシステム(オーディオ)、ファイルシステム(ビデオ)、グラフィックライブラリーシステム、フィルム&テレシネ、グラフィックスシステム、外部情報対応システム(天気、株、交通情報等)、その他周辺機器)、中継システム(基地局設備、FPU、SNG、中継車、車載用関連システム・周辺機器、連絡用無線機、緊急報道システム、その他周辺機器)、送信システム(地上デジタルテレビ放送、ワンセグ放送、ホワートスペース、エリアワンセグ、V-High 帯、V-Low 帯、マルチメディア放送、ラジオ放送、FM 放送、衛星放送(BS、CS 放送)、CATV、映像配信ネットワーク、CDN、伝送ケーブル、ワイヤレスシステム、光ファイバ、その他周辺機器)

■放送機器関連製品

電源装置(無停電電源装置、定電圧・定電流電源装置、車載用電源、バッテリー、バッテリー充電器、その他周辺機器)、測定・変換機器(試験信号発生器、測定器、信号変換器、その他周辺機器)、各種特機・周辺製品(キャビネット、ラック、ペダスタル、三脚、雲台、クレーン、ステディカム、ファニチャ、運搬用ケース、その他周辺機器)、放送機器設計・開発・製造(開発言語、半導体、部品、設計、製造、スタジオシステム設計、施工、メンテナンス、技術派遣)

Cross Media

メディアの次世代技術が集まる

テレビとスマートフォン/タブレット端末を連携させ、新たな放送ビジネスの可能性を示したセカンドスクリーン。2012 年より、CG・VFXプロダクションが出展、クリエイターの参加も増加した。

■IPTV/ ネット配信

映像圧縮技術、映像編集・管理システム、映像配信システム・サービス、データ放送システム、ビデオオンデマンドシステム、インターネット放送、ソフトウェア、その他関連技術・製品・サービス

■Mobile TV

モバイル端末向け映像編集システム、モバイル向け映像配信システム、モバイルコンテンツ・アプリケーション、モバイル端末機器、ワイヤレスシステム、Wi-Fi・WiMAX、LTE、その他関連技術・製品・サービス

■Digital Cinema

デジタルシネマ用撮影システム、デジタルシネマ用編集システム、デジタルシネマ配信システム、デジタルシネマサーバ、映写システム、オンデマンドサービス&コンテンツ、その他関連技術・製品・サービス

■Digital Signage

デジタルサイネージ編集・管理システム、受像システム、映像コンテンツ配信システム、通信ネットワークサービス、広告メディアサービス、その他関連技術・製品・サービス

■3D Image

3D 映像制作システム、3D 映像編集システム、3D 映像受像機・端末・システム、3D 上映システム、3D コンテンツ、その他関連技術・製品・サービス

■次世代映像技術

4K ディスプレイ、8K ディスプレイ、裸眼 3D 映像、モーションセンサシステム、インタラクティブシステム、バーチャルリアリティ、AR、パノラマ映像、高精細監視映像システム、高精細医療映像システム、その他関連技術・製品・サービス

■Digital Contents

実写、アニメーション、コンピュータグラフィックス、その他関連技術・製品・サービス

Forum & Symposium

最新動向を伝え、 多彩なニーズに応える

最先端技術を駆使した事例紹介や、次世代放送技術の紹介、海外の業界動向に加え、新しいエンターテインメントを生み出す国内外のクリエイターも登壇し、幅広い分野のユーザに対してビジネスのヒントを提供した。

■コンファレンス

Inter BEE Content Forum、Inter BEE チュートリアル・セッション
Asia Contents Forum、Cross Media Theater

■同時開催

民放技術報告会

開催概要

■名 称

(第48回)2012年国際放送機器展
International Broadcast Equipment Exhibition 2012
(略称: Inter BEE 2012)

■会 期

2012年11月14日(水)~16日(金) [3日間]

■開場時間

11月14日(水) 午前10時~午後5時30分
11月15日(木) 午前10時~午後5時30分
11月16日(金) 午前10時~午後5時

■会 場

幕張メッセ/展示ホール4~8・国際会議場

■入 場

無料(全来場者登録入場制)

■主 催

一般社団法人電子情報技術産業協会 (JEITA)

■後 援

総務省
経済産業省 (建制順)
日本放送協会 (NHK)
一般社団法人日本民間放送連盟 (JBA)
一般社団法人電波産業会 (ARIB) (順不同)

■協 力

IPDC フォーラム、一般社団法人衛星放送協会、映像産業振興機構、公益社団法人映像文化製作者連盟、一般社団法人カメラ映像機器工業会、公益社団法人劇場演出空間技術協会、3D コンソーシアム、全国舞台テレビ照明事業協同組合、超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム、特定非営利活動法人デジタルシネマ・コンソーシアム、一般財団法人デジタルコンテンツ協会、デジタルサイネージコンソーシアム、一般社団法人デジタルメディア協会、特定ラジオマイク利用者連盟、一般社団法人日本アド・コンテンツ制作社連盟、協同組合日本映画撮影監督協会、一般社団法人日本映画テレビ技術協会、協同組合日本映画テレビ照明協会、一般社団法人日本映画テレビプロデューサー協会、一般社団法人日本オーディオ協会、社団法人日本音楽スタジオ協会、一般社団法人日本ケーブルテレビ連盟、社団法人日本CATV技術協会、公益社団法人日本照明家協会、一般社団法人日本動画協会、日本舞台音響家協会、日本舞台音響事業協同組合、一般社団法人日本ポストプロダクション協会、VFX-JAPAN、一般社団法人モバイルブロードバンド協会 (50音順)

■海外パートナー



■運 営

一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)
〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル
電話: (03) 6212-5231 FAX: (03) 6212-5225



Table of Contents

Topics

Guest Interview 1 06
DOUBLE NEGATIVE SINGAPORE ソウイー・クランリー氏
Guest Interview 2 12
SET 会長 オリンピオ・ホセ・フランコ氏
Guest Interview 3 14
サンパウロ大学 マロセロ・ズッフオ教授
Guest Interview 4 16
TOKYO STATION VISION プロジェクトチーム
Guest Interview 5 22
映像・技術交流会

Exhibition Report

Ceremony Report 24
Opening Ceremony
Reception Party
News Center Pick up 28
パナソニック (株)
(株) 朋栄
富士フイルム (株) 光学デバイス事業部
ヤマハ (株)
Exhibit Map 44
展示会場図
Exhibitor List 48
出展者一覧
Online Magazine Headline 50
Inter BEE online 掲載記事 (展示会レポート) サマリー

Forum Report

News Center Pick up 76
Sound Designer デニス・バクスター氏
NASA ロドニー・グラブス氏
Programs 84
プログラム一覧

Results

Visitor Profile 94
来場者アンケート実施結果
Exhibitor Profile 97
出展者アンケート実施結果
Publication and Promotion 98
来場者誘致プロモーション活動報告

圧倒的なVFXで成長と拡大を続ける、 気鋭プロダクションの信念。

DOUBLE NEGATIVE SINGAPORE CG Supervisor
ゾウイー・克蘭リー氏

インタビュー
Asia Contents Forum ディレクター
結城 崇史



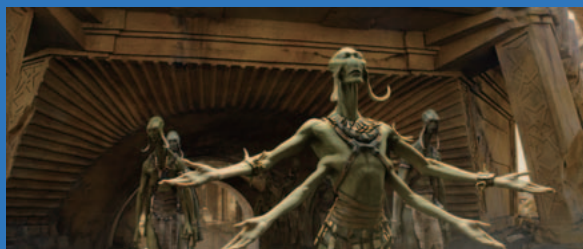


細部と人材へのこだわりが、クオリティの高い映像につながる

『ハリー・ポッターと死の秘宝』『アイアンマン2』『ダーク・ナイト ライジング』など、ハリウッド大作映画のVFXを数多く手がけるDouble Negative。実写と見まがうばかりの精緻かつフォトリアリスティックなVFXを得意とし、『インセプション』でアカデミー賞視覚効果賞を受賞するなど、非常に高い評価を得ているプロダクションだ。

14年前、30人のスタッフで設立された同社だが、今では1000人を超える規模に成長。2009年にはシンガポールに進出し、現在も大作映画を10本以上同時に抱えて仕事をするなど、ますますその勢いを増している。

彼らの成長の理由はなんなのか、またなぜシンガポールへ進出したのか。Double NegativeでCGスーパーバイザーを務めるゾウイー・クランリー氏に話を伺った。



Double Negativeが設立されたのは1998年。CGプロダクションが多く集まるロンドンのSOHO地区で、ポストプロダクションとして生まれた。中心となったのは、マシュー・ホーベン（CEO）と当時別のスタジオで働いていたアレックス・ホープ（MD）。彼らの目的は映画のVFXを手がけることで、最初に携わった仕事は、映画『ピッチブラック』だった。

以後順調に業績を伸ばしていったが、大きなターニングポイントは『ハリー・ポッター』だったという。ロンドンのVFX業界自体を活性化させ、それがDouble Negativeを大きく成長させることにもつながっていった。事実、2005年当時150人だったスタッフも、現在1000人を越える規模になっている。さらに2009年にはアジアに進出し、シンガポールにオフィス構えた。Double NegativeのクリエイティブディレクターであるNathan McGuinness（元 Asylum VFXのリーダー）に率いられたDouble Negative Singaporeは『ボーン・レガシー』『トータル・リコール』『レ・ミゼラブル』『Cuban Fury』のような大規模プロジェクトでロンドンオフィスとシームレスに協力している。

Double Negativeの躍進を支えたものは2つあるとゾウイー氏は言う。

「1つはクオリティです。マッチムーブ、モデリング、テクスチャ、ライトなど、私たちはどれをとっても世界トップクラスです。これはアーティストの目……不十分なカットに気づいたら直す、という考え方に支えられています。リアルな映像だと感じてもらうには、例えば目の小さな点や、どのようにビルが爆発するかなど、細かい微妙なディテールに気を配ることが肝心なんです」

それがクオリティにつながり、ひいてはスタジオの評価になっていく。

また、テクニカルとR&Dに力を注いでおり、自社でソフトウェア開発を行って

るのも強さの1つだ。MayaとRenderManを中心としたパイプラインを組んでいるが、ライティングとシェーディングのシステムは独自のもの。流体シミュレータも自社で開発している。

「もう1つは、人材。才能、経験のあるアーティストは重要です。ですから、プロジェクト単位ではなく、長く会社で働いてほしいんです。実際、10年以上働いている人も少なくありません。もちろん未経験者も歓迎しています。キャリアプログラムを組むなど、才能を育てる場も設けているんです」

こうして、人と技術の両面をフォローすることで、他社にはまねのできない精緻な映像が生まれている。



優秀なアーティストを育てれば 会社は成長する

現在、CGスーパーバイザーを務めるゾウイー氏だが、彼女も大学卒業後に入社し、ジュニアレベルからキャリアを重ねてきた1人だ。

「アートと数学と科学、それからコンピューティングが好きだったんです。それらを全てできるのがVFXだと思っていたんですが、当時そんなコースを持つ大学はありませんでした。ボーンマス大学には定評のあるコンピュータアニメーション&ビジュアライゼーションのコースがありましたので、完璧な選択肢でした」

大学の授業を受ける中で知ったのが、Double Negative だった。ボーンマス大学は映像業界とのつながりが深い学校で、業界関係者が講師などを行っていたためだ。そして、経験者採用ばかりの中、新卒にもチャンスを与えていたのがエン

トリーのきっかけになった。

2005年に入社し、テクニカルアシスタント、レンダーアシスタント、マッチムーバーといった基礎的なパートに従事し、テクニカルディレクター、ライティングリーダー、シーケンスリーダー、シーケンススーパーバイザーを経て現職に。常に新しいものにチャレンジし、勉強してきたという。

「Double Negativeで最初に与えられた役割はレンダーアシスタントとしてレンダーファームに携われたことですが、これは非常に良い経験でした。デイシフト/ナイトシフトで大変でしたけど、映画VFX業界のCGのバックボーンをよく知ることが出来ました。また、さまざまなパートを経験し、様々な映画に携わり、異なる部署で仕事することで、基礎を身に付けることも出来ましたし、今一緒に働いているVFXスーパーバイザーとも早い段階から知り合えました」

Double Negativeの強みは「アーティストを大事にする」というところだ。情熱と才能のある者を育て、出来るだけ長く会社にいてもらうように環境を整える。トレーニングクラスを開催したり、上級のバディが支援する仕組みなどもある。そうすることで、Double Negativeにしかなできない映像を次々と生み出していくことが出来るのだという。

同時にこれは、ジェネラリストを育てることもつながっている。これも会社を成長させるのに大きく寄与している。

「優秀なアーティストを雇っていただくも、モデラーしかできなければ、プロジェクトの初期にしか関わられません。テクスチャもライティングも出来れば、長期的に仕事に関われますよね。もちろん、スペシャリストも在籍していますが、会社の規模を頻繁に拡大縮小せずに安定して拡大していけるのは、ジェネラリストが多いからなんです」

よりエキサイティングな市場と 人材の獲得を狙って

優秀な人材を育てつつ拡大を続けるDouble Negativeが次に目を付けたのがアジアへの進出、シンガポールだった。そこには3つの目標があった。「ロンドン以外への拡大」「アジアマーケットへの参入」「新しいアーティストの発掘」だ。

VFXは場所に依存しない産業であるため、どこで仕事をして構わないという部分がある。

また、これから経済拡大が期待されるアジアに拠点を持つことも大きい。

そして一番Double Negativeらしい理由が、人材へのアプローチだ。アジアならではの文化的背景を持つアーティストが集まることによって、新たな発想の映像が生まれ、また既存の社員の刺激にもなる、といったものだ。

「ハリウッドは、アイデアをいかに表現していくかといった部分に多様性、新しい発想を求めています。文化の違いがある面々が膝を突き合わせることで、面白い発想や、様々なアプローチを行うことが出来るんです。私はロンドンからシンガポールに移って11ヶ月ですが、シンガポールの方を含め、アジア地域から本当に素晴らしい方が集まってくれています。私が今まで考えもしなかった形で見えていますし、ディテールへのこだわりは抜きんでいると思いますね」

アーティストは作るものが第一、という姿勢のため、第一言語が英語でなくても採用を行っている。最終的に目指すも

のが出来上がればいいので、コミュニケーションの手段はどとでもなる、という大胆な考え方だ。

「どこかの国が優先されることはないですね。完全に公平にやっています。そして最低でも30~40か国の方がいますので、オフィスの中はとてにぎやかですよ(笑)」

現在のシンガポールオフィスのスタッフは約170人。ゾウイー氏がDouble Negativeに入社したころの人数とほぼ一緒だ。彼女がシンガポールに移った理由は「自分の経験をみなと分かち合いたかったから」だという。

「Double Negativeに入社して間もない頃には、才能にあふれたチームの先輩方から学ぶ機会を得ました。今ではここシンガポールで私が若いアーティスト達に指導することを楽しんでます。ここシンガポールで新しい才能を育て、他の才能あるアーティストや上司から学び続けるのは刺激的な経験です。シンガポールオフィスは活気にあふれ、実りの多い作業環境であり、今は私たちにとって知識ベースを広げ、成長させ続けることができるエキサイティングな時と言えます」



日本とブラジルの放送産業をより強固にする 新たな協力関係 Inter BEE × SET Broadcast and Cable



SET 会長
オリビオ・ホセ・フランコ氏

日本エレクトロニクスショー協会 (JESA) は、ブラジルのテレビ技術に関する学会「SOCIEDADE BRASILEIRA DE ENGENHARIA DE TELEVISAO」(SET) と、ブラジルの放送・通信機器の展示会「SET Broadcast and Cable」の運営会社「Certame Display Montagens e Locação de Equip. S/C Ltda」のとの間で、互いの展示会、Inter BEE、SET における協力関係を結んだ。

今後、3者は互いに展示会・学会の情報を提供し、それぞれの国の業界関係者向けの告知をサポートする。具体的には、各国語に情報を翻訳しプレスリリース、広告などを互いに作成するほか、ブースの交換などを行う。

Inter BEE 2012 会期初日の11月14日、Inter BEE 会場となった幕張メッセの国際会議場特別室において調印が行われ、来日した SET 会長のオリビオ・ホセ・フランコ氏と、日本エレクトロニクスショー協会の大山 高 理事・事務局長との間で調印が交わされた。



■「ISDB-T で築いた 20年にわたる両国の信頼関係」

今回の調印のために来日した SET 会長のオリビオ・ホセ・フランコ氏は、今回の提携について、次のように話す。

「今回、初めて Inter BEE を拝見しました。会場では、日本や海外の知り合いともお会いでき、大変うれしく思っております。Inter BEE が国際的な展示会であることを改めて認識しました」

ブラジルのテレビ技術学会 SET は 2012 年で創設 24 年になる。非営利の組織だが、学術分野からの参加以外にも、テレビ局、メーカなども会員として参加しており、ブラジル国内で年間 5 回の会議を開催するほか、米国でも会議を行うなど、活発な活動をしている。国際的な交流も積極的で、米国の NAB、欧州の IBC のセッションへも頻りに参加している。



日本との交流も長く、過去 20 年以上にわたり地上デジタル放送の標準化に関する情報交換を日本のメーカ、技術者・研究者と交わしてきた。長期間にわたる密接な情報交流を経て、ブラジルの地上デジタル方式の基になる技術として、日本の地上デジタル放送方式である ISDB-T が採用されている。最近では 2010 年から、日本とブラジルの放送・通信の技術者・研究者により「ブラジル・日本デジタル放送推進シンポジウム」(主催: サンパウロ大学) が毎年開催されており、SET 会長(当時)のリリアナ・ナコネチニ氏が昨年講演を行った。

■「放送市場で、より近い関係を構築へ」

今回の 3 社の協力について、フランコ氏は次のように語り、期待をにじませた。

「両国の関係強化は、大変緊密になっております。これまで 20 年にわたり、規格化についてのたくさんの情報交換・情報共有が行われてきました。日本からたくさんのことを学ばせていただきました。今回の覚え書きの取り交わしによって、さらに機会が広がると感じています。効果は早く出るのではないかと期待しています」

「昨年、日本大使館、日本領事館とともに、ブラジルでの展示会へ日本からの企業の参加を呼びかけたところ、多くの企業から反響をもらいました。ブラジルにおけるマーケティングやプロモーションについての基本的な質問もあり、多くの企業がブラジル市場に関心を持ってきていることがわかりました」

女子美術大学 大学院教授の為ヶ谷秀一氏は「ブラジル・日本デジタル放送推進シンポジウム」に 2010 年から運営委員(ステアリング・コミッティー)のメンバーとして参加し、日本の放送技術を紹介するとともに、日本からのシンポジウム招待講演者のまとも役でもある。今回の提携の意義について、為ヶ谷氏は、次のように評価する。

「ブラジルは、地理的には大変遠い国であるため、移動や輸送に負担がかかると思われる。これまで、放送・通信関係ではあまり強いつながりがあまりありませんでした。しかし、ブラジルのデジタル放送の規格に日本の ISDB-T を採用していただいて以来、日本の関連企業も頻りにブラジルへ行き、展示会などに参加したり、ビジネスを行うようになり、非常に近い国になったというのが私の印象です」

「すでに何社かの日本のメーカがブラジルで活躍しており、SET の展示会でも日本の企業が大きな役割を果たしていると思います。今年は、日本パビリオンができましたが、そういう形でもいろいろなつながりができると思います。今後、SET とのコラボレーションによって、両国の産業界がより近づくものと期待しています」

■「次世代の放送技術開発には、 両者の知恵と時間が必要」

フランコ氏はまた、展示会場での日本メーカの技術にも関心を示した。来る 2014 年の FITA ワールドカップ・ブラジル大会や、2016 年のリオデジャネイロ オリンピックなどで新たなメディアを

導入する可能性について言及し、日本からの企業の参加を促した。

「ブラジルではこの 10 年間成長を続けております。ただし、現状ではまだ、インフラの問題を解決しなければなりません。通信もまだ整備が不十分、道路網、空港の整備などたくさんやらねばならない。乗り越えなければいけないこともたくさんありますが、同時に機会もたくさんあると考えています」

「日本は、本当にたくさんの先進技術を持っていると思います。オーディオもそうですし、ビデオもそうですが、撮影・録音関係の周辺機材についても、高精度のものがあると感じました。4K やスーパーハイビジョンの技術も関心があります。近い将来という点で、必ず、確実にその方向に進んでいることは間違いないと思います」

「ワールドカップやオリンピックと言った大きなイベントでは、そうした新しい技術を適用していく機会があるかもしれません。そのためにも、技術に加え、経済的な妥当性や、権利処理、ビジネスの構造なども含めて考えねばならず、そのためにも、より緊密に話しあう必要があると思います」

「やはり投資の金額を考えると、徐々に一步一步、時間をかけながら進んでいくと思うのです。国際的な規格の標準化や、さまざまな定義が必要であり、デモやセミナーによる告知、学会や説明会などの会合を経て、10 年といった時間を経て進化していくことになるでしょう」

「将来技術はそうした手続きが必要ですが、まずは、今の日本の技術・製品で、私たちの展示会に参加してもらいたいです。参加していただくことで、いろいろなクライアントやカスタマーに会うチャンスができます。会場で会うことができれば、さまざまなアイデア交換ができます。ぜひ日本の中小企業のみならずにも参加していただきたいと思います」



4K・8K に喝采 「次世代の放送技術開発を日本と」

日本で生まれた地上デジタルテレビ方式「ISDB-T」をベースにした放送方式は、現在、世界12ヶ国で採用されている。最初に採用したブラジル連邦共和国において、方式決定とブラジルによる拡張であるISDB-Tbの方式設計に重要な役割を果たしたのが、サンパウロ大学のマルセロ・ズッフオ教授だ。同教授は、次世代のデジタル放送技術のために両国間の研究者の交流を促進するべく「白日DTV推進シンポジウム」を2010年から開催している。

ズッフオ教授にとって、Inter BEEへの参加は、訪日の際に最も楽しみにしているイベントである。今年も、関係者との打合せや講演をこなす中、精力的にフロアを歩く姿が見られた。



ブラジル サンパウロ大学
マルセロ・ズッフオ教授

■ワールドカップとオリンピックを機に地デジ普及を

ブラジルは、2013年にFIFAコンフェデレーションズカップ、2014年にFIFAワールドカップ、そして2016年にオリンピックを開催する。これらの大イベントを地デジ放送普及のきっかけとしたいのはもちろん、ズッフオ教授をはじめとした研究者達はここで新しい技術のお披露目を行いたいと考えている。

「4Kは関連製品が増え、市場形成に取りかかる直前との印象を受けた。8Kの片鱗も至る所で感じることができた」とズッフオ教授はInter BEEでの4K/8Kの進展に目を見張っていた。2大サッカーイベントやオリンピックにおいて、ブラジルと日本が共同で、これらの技術を活用したコンテンツ制作に取り組むことを期待したいという。「8Kを推進してきたNHK放送技術研究所と関連するメーカーの皆さんに敬意を表したい。今年も訪問できてよかった」と日本の取り組みに賛辞を送った。

■災害時の情報提供手段としてIPデータ放送に注目

南米地域は多様な自然災害があり、放送は民間防衛の観点からも非常に重要な役割を担っている、とズッフオ教授は言う。「ブラジルでは先般、洪水で多くの犠牲者が出ました。チリは2010年の地震で津波の被害を受けています。これらの災害時に、重要なメッセージを一齐に伝えられるのは放送です」と、放送による情報の伝達の重要性を語っている。Inter BEEで展示があったIPデータ放送は、「通信と放送の世界をつなぐもの」として特に注目し、放送コンテンツをより豊かにするばかりか、人々の安全を守る情報を流すにも使える新たなプラットフォーム、として注目している。「ブロードバンドが発達途上の新興国では、デジタル放送によりIPパケットに乗せた情報を流すのが効率的でしょう」と、利用のあり方にまで思いを巡らせていた。

「間もなく、タブレットが非常に廉価に手に入る時代が来るでしょう。ワンセグとIPデータ放送をタブレットで受信できれば、デジタルテレビを買えない階層にもデジタル放送を届けることができます」と、新興国での普及の道筋を見据えていた。

■「Inter BEEは出会い・再会の場」

ズッフオ教授がInter BEEを欠かさず訪れるもう一つの理由は、「出会い」にあるという。「Inter BEEは、新たなイノベーションが目に見える形で溢れる展示会であり、それに触れるだけで刺激になります。更に、ここには世界中の私の友人がやってくるので、ちょうどよい再会の場です」とのことだ。他の展示会のように大きすぎず、マーケティングにも走りすぎでない。放送とコンテンツの将来を見るのに最も適したイベントがInter BEEだという。「日本とブラジルのテレビジョン技術の学会は、互いに友好関係を結んでいます。次世代の放送技術のために、両国がより深い協力関係になることを期待します」と語り、ズッフオ教授は深夜のフライトでブラジルへ戻っていった。

日常を劇場へ。



株式会社ビクス
プロデューサー
諏澤 大助 氏

株式会社エス・シー・アライアンス
メディアエンターテイメント社
ETC PIGI JAPON DIV.
内田 照久 氏

株式会社 NHK エンタープライズ
事業本部 企画開発センター
チーフプロデューサー
森内 大輔 氏



未踏のプロジェクトに挑みたい。 しかし、現場は工事中……

東京駅の赤レンガ駅舎は、日本銀行本店をはじめ多くの建築物を手がけた、辰野金吾によって作られた建物。98年前に建てられた歴史ある建造物だが、戦中の空襲により一部が焼失するなどし、暫定的な修復をされたまま21世紀まで運用されてきた。

それが、JR東日本の進める駅再開発の一環で、駅舎を建造当時の姿に復元するプロジェクトが始められた。

長年の工事を終え、2012年の10月に開業することを知った森内氏は、JR東日本に対して、記念事業としてのプロジェクションマッピングイベントを提案した。2011年の4月のことだった。

「歴史ある建物の復元ですから、これはもう千載一遇のチャンスです。駅舎の再生と発展のプロモーションとして、プロジェクションマッピングを行うことに面白さや可能性を感じたんです」

話は順調に進み、実行のタイミングは駅舎復元完成直後の9月終わりだと決められた。というのも、10月になると開業を迎え、駅舎内に設けられた東京ステーションホテルの営業が始まるため。ホテルの窓に明かりが灯っていると、プロジェクションマップを行う際に不都合となるからだ。そのため完成直後・開業直前、というギリギリの時期になった。

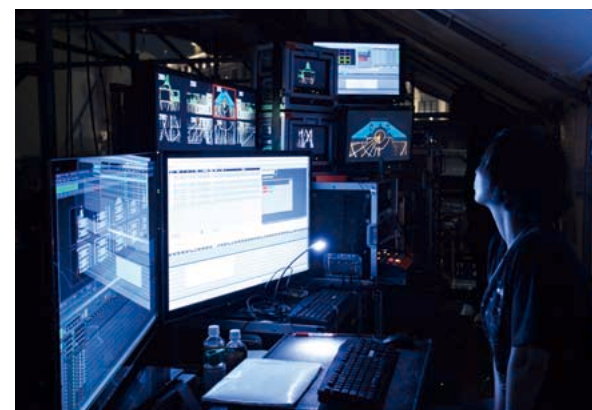
ところがこのタイミングが問題の1つにもなった。完成直後にイベントを行うということは、準備は工事中に行わなければならない。プロジェクションマッピングと一口に言っても単にプロジェクタを置けばいいというわけではない。数十台にも及ぶプロジェクタをどこにどのように配置するか、映像として成立させるためには非常に細かい問題をクリアしなければならない。工事を行っている現場の中、プロジェクタを設置する場所を探したり、また実際に設置してテストを行ったり、観客から一番映像が美しく見える場所・ビューポイントの設定も探らなければならない。なにより建物自体が完成していないので、ぎりぎりまで細か

い絞り込みができなかった。「テストを7月の雨の中、行いました。駅舎は濃い色のレンガということもあり、投影する映像には照度がかなり必要だというのが分かりました。35000ルーメンのプロジェクタを使ったんですが、正直、好ましい結果ではなくて、やっぴいなかな、と思いました」とテクニカルの内田氏。

投影面に100ルクスの照度は作りたいが、そのためには、台数を重ねて投影する必要があった。また、構内のスペース的な都合もあり、プロジェクタの場所は投影面から77mの地点に置かなければならなかったため、その照度を得るために何台重ねればいいのか、また駅舎全体をカバーするために何台プロジェクタが要るのかなどを計算しなければならない。

16:9で投影できる機材の数、4:3の機材の数、現実的に用意できるプロジェクタの数など物理的にクリアしなければいけない課題も山積した。

結局、上下2段の10分割で投影し、20000ルーメンのプロジェクタを46台用意するなどして、ようやくベースが固まった。

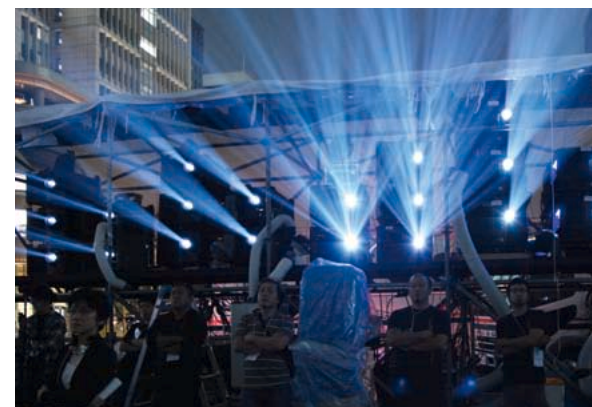


創建当時によみがえった東京駅舎を 巨大スクリーンに。

2007年からスタートした、東京駅丸の内側周辺の駅再開発「Tokyo Station City」。その目玉ともいえる、東京駅赤レンガ駅舎の保存・復元工事の完成を記念して、9月22・23日の両日、『TOKYO STATION VISON』と題したイベントが行われた。復元された赤レンガ駅舎を丸ごとスクリーンとした、大規模なプロジェクションマッピングだ。

プロジェクションマッピングとは、建造物等をスクリーンと見立てて映像を投影、視覚トリックなどを駆使して、あたかも建物自体がダイナミックに動いているように見せるなどの工夫を凝らした映写のことだ。このイベントでも、駅舎そのものが本当に躍動しているかのようだったり、あるいは抒情的に描かれた映像が投影されるなど、多くの観客と話題を集めた。しかし、それらは誰も想像もしなかったような苦労の上に成り立っていた……。

「Asia Contents Forum 特別セッション」では、このプロジェクトのプロデューサー兼総合演出である森内大輔氏をはじめ、テクニカルディレクターを務めた内田照久氏、ディレクターを務めた諏澤大助氏の3氏が、プロジェクトのコンセプトや技術面のほか、プロジェクションマッピングの今後の展望について熱く語った。





復原中の建物を スクリーンにする苦勞

プロジェクションマッピングでは、スクリーンとなる建造物に合わせて映像を制作しなければならない。そのため、一番大事なのはまず、フォーマットを定めることなのだと言った森内氏は言う。

今回のプロジェクトでは、設計図を元にCGで作った東京駅舎をアタリに映像を制作しているが、1/200の模型を使って投影実験なども行っている。アニメーションの場合、画面で見ているものと立体に投影されたものでは印象などが大きく変わるためだ。模型で空間を把握しながら行わなければ良い映像にならない。

しかし、そこにもさまざまな問題があった。図面と実物の東京駅舎が明らかと違っていて苦勞をしたという。

「本来なら図面を基にするのではなく、建物の3Dスキャンをすべきです。けれど、駅舎自体、工事中だからそれができませんでした。結局、図面を元に映像を

作り、最終的な書き出しのときに微調整しつつ、現場でも調整するという形を採りました」(諏澤氏)

また色の調整にも苦勞があった。駅舎は、黒い色の屋根、濃い赤のレンガ壁、レンガの目地の白、窓枠、窓にかかったカーテンの白、といった具合に黒、白、赤が入り乱れていた。

「赤いレンガと白い目地のおかげで、縮々に見えてしまい、立体感を損ねてしまうんです。カラーコレクトの補正プログラムを組むためのチームも作りました」(森内氏)

「具体的には色のマスクを作る作業です。赤の部分はより明るく、白の部分は暗く。これらをAfterEffectsで行っています」(諏澤氏)

また、投影することで色が転ぶ問題や、CGのディテールが細かいと逆に不自然に見えてしまうなどの問題も本番2週間前に発覚。

「4K近いサイズで29.97fpsのフレームレートで映像を作っていて、それが作り直しになるわけです。クリエイターの方が、興奮めして帰ってしまう、なんてこともありました」(諏澤氏)

どのような映像にすべきか プロジェクトの意義とは

さまざまな苦難を乗り越えて準備されてきた、『TOKYO STATION VISON』。そこで表現される映像のほうにも、さまざまな思いが込められた。

当初森内氏は、日本の中心となるターミナル駅ということで、国鉄～JRの歴史を紐解くような映像……名列車や駅周辺の発達の様相などを構想していた。しかし、JR東日本と打ち合わせを重ねていく中で、「世代を越えて多くの人に注目されることになる」という話から、誰もが楽しめるもの、プロジェクションマッピングとはどういうものが分かるエンタテイメントを目指すこととした。

“利用する人によってさまざまな顔を



見せる東京駅」という存在から、5人の映像作家に自由に映像を持ち寄ってもらうことにした。その際、「時空を超える旅」というテーマのみをお願いした。

作家自体の選定は森内氏と諏澤氏が、「その人のカラーを出せる人」「演出だけではなく自分で映像制作も行え、臨機応変に対応できる人」を基準に選出。西郡勲氏(SMALT)、長添雅嗣氏(N・E・W)、TAKCOM(P.I.C.S.)、志賀匠氏(caviar)、針生悠伺氏(P.I.C.S.)に依頼した。

そうして持ち寄られた5人のアイデアを元に、森内氏が全体的な演出を行い、5つの作品が完成したが、そこで完了ではない。さらにそこから、5作品を1つの連続した映像にしていく、という大事な仕事があった。

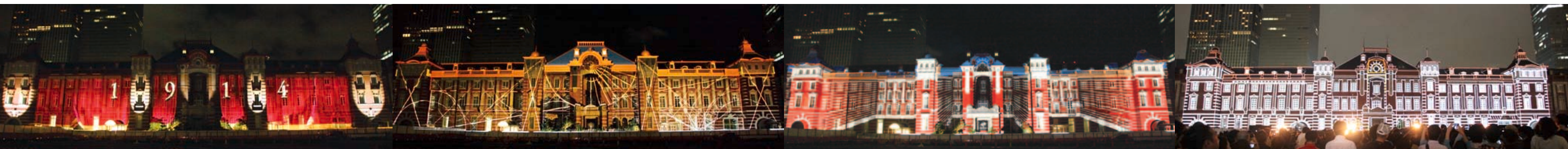
「イベントですから、やはり盛り上げが必要ですね。デバイスの中で見る映像と違うんです。空間的に体験するものですから、舞台に近いと思います。ミュージカルを参考に、出る、はける、転換、起承転結といったような流れを考えました。これは音楽の部分でも行っています」

5作品を1つにまとめ上げるには、さらに音楽の力が必要、と考えた森内氏。映画『モテキ』をはじめ、映画音楽の作曲家として活躍している岩崎太整氏に音楽監督を依頼。こうして、効果音まで含めた、空間での映像・『TOKYO STATION VISON』は完成した。

プロジェクトを振り返って森内氏は語る。

「プロジェクションマッピングと一言にし

ても、とても難しいものだと思うんです。ギミックだけに目が行くものになってしまうと、単なる見世物でしかなくなってしまふんですね。自分としては、テクノロジーと文化の融合に注目したいですね。歴史的建造物や地域文化とプロジェクションマッピングを合わせることで、地域に親しみと再発見を与えたい。再ブランディングを行って地域活性につなげられるようなことをこれからもしていきたいですね」





垣根を越えた映像制作のプロ同士が交流 「映像・技術交流会」

デジタル技術革新の中、コミュニティで問題解決へ

■幅広い意見をとりあげて情報交換

Inter BEE 2012での初の試みとして、映像制作のプロによるコミュニティ「映像・技術交流会」に休憩スペースを提供し、「技術・交流カフェ」を設けた。

「映像・技術交流会」は、急速に進歩・変化する映像制作の技術に関して、現場の経験や知識を共有しようという集まり。メンバーは60人を超える。

昨年の設立以来、これまでに6回の会合を実施している。また、SNSを通じて、リアルタイムにテーマの提案や情報交流を活発に行っている。これまでに扱った主なテーマは、4K、Thunderbolt、カラーコレクションなど。特定の製品などについての情報交換や、検証会なども行って来た。参加者は、ポストプロのエディターやカラーリスト、撮影や照明の技術者、CG、VFXのアーティストなど多彩。メーカーが主催する内覧会や特定のツールのユーザ会と異なり、さまざまな立場やユーザが集まるので、幅広い意見を交換できる点が特徴だ。

映像・技術交流会の創設メンバーの一人、モーションワークスVFXアーティストの石河慎一氏は、「撮影現場とポストプロの関係がもっと密接になれば」と、SNSを通じてそうしたコミュニケーションが活発になり、2011年の7月に、約20人が集まり、映像・技術交流会第1回目の会合が開催されたという。

「日頃から抱えている技術の問題点をあげ、解決策を皆で練ったりと大変有益な会合となりました。会合は現在に至るまで6回ほ

ど続いています。皆で自由に発言し、皆で動き、盛り上げていこうという主旨を持っています」という。

■「情報クローズの時代は終わった」

やはり創設メンバーの一人で、サイボウズによるSNSを構築したのが白組のシステム部部長を務めている鈴木勝氏だ。鈴木氏は、白組で、設備管理やライセンス管理などシステム周りを担当しており、現在では撮影から仕上げまで一連のワークフローのトータル的なシステム管理を行っている。

「映像・技術交流会は、CGプロダクションだろうがポストプロだろうが、皆が意見を交換し合って問題点を解決し、お互いに力を合わせてクオリティーの高い無駄のない全体ワークフローを構築しようではないか、ということが主旨となります。それぞれ特化された役割があり、その点を寄せ合ってコラボすべきなのです。情報をクローズする時代は終わっています。もう情報を共有することに恐れはありません」と鈴木氏は話す。

SNSサイトには、技術にまつわるさまざまなカテゴリーがあり、それぞれに多数の書き込みがあり非常に活発だという。「疑問に思ったことを書き込むと、想像以上にレスポンスが返ってきます。アイデアの泉というようなイメージでしょうか。今まで自分で隠し持っているスキルと思っていたことでも、実はほかのクリエイターも知っていた、あるいは自分が知らないほかの方法がまだまだたくさんあったなど、新たな発見も多いですね。情報を共有して皆で



制作現場のプロが多彩なテーマのセッションで講演

お互いを高め合っていくべきでしょう。皆の意見をまとめて、それをソフトウェアメーカーに持ち込むこともありだと思います」

Inter BEE 2012でのブース展開について「コミュニケーションの面白さというものを伝えたいと思いました。こうした機会に、地方の方々にも参加して頂き、地方にもこのようなムーブメントがおこれば日本全体としてますます面白くなっていくでしょう」と期待をにじませた。

■プリビズ、Finishing、グレーディングなど 多彩なテーマ

セッションは、3日にわたり、次のようなスケジュールで開催された。

★「日本におけるプリビズ事例紹介とハリウッドレポート」

映画制作におけるプリビズ活用事例を紹介。一般に知られているCGムービーによるシミュレーションではなく、リアルタイムで撮影シーンのチェックを行なうリアルタイムプリビズ手法について、ACW DEEP代表/プリビズスーパーバイザーの山口聡氏が講演した。

★「スモールプロダクションにおけるFinishing環境」

小規模プロダクションにおいて、リスクを回避しつつ作業を効率化し、クオリティーの高い作品の創造を維持するためのノウハウを披露。オンラインエディターから見たツールの優位性、Adobe After Effectsユーザから見たツール選び、AEやCGなどと組み合わせ

せ、Autodesk SmokeをハブとしたXMLの立ち上げからフィニッシュまでのワークフローを紹介した。

講演は、IMAGICA 永田町スタジオで主にCMやPVをflame / smokeを使って合成、編集をした後、2007年からフリーランスを経て、2012年にスタジオ「khaki」を設立した水野正毅氏と、IMAGICA プラスを経て、現在、CG、コンポジット、編集等、Finishing工程全般の分野で広く活動している稲葉氏が担当。

★「グレーディングワークフロー入門」

インターセプター 映像制作部部長の田巻源太氏と、デジタルエッグのカラーリスト 平川裕美子氏を迎え、Blackmagic Cinema Cameraで撮影した素材を用い、DaVinci Resolve 9とFinal Cut Pro Xとのラウンドトリップでグレーディングの楽しさと柔軟性を紹介した。

★「Thunderbolt有効活用のご提案」

ウインクツール エディター / システム管理担当の小林正樹氏が、ストレージ関連製品を中心にThunderbolt製品を紹介。ビデオデバイスから、拡張シャーシによるSSDでの運用など各社取り揃え、話題のThunderbolt製品のDASとしての活用法や運用上のTipsなどを説明した。

★「モニターキャリブレーション報告会」

マーザ・アニメーションプラネットの杉田直弥氏と、テクノマックス ビデオセンター 編集技術部・エディターの富田一弘氏が、マーザ・アニメーションプラネットで行われたモニターキャリブレーションの検証と自社での使用事例を報告した。



Inter BEE 2012が開催 過去最多の871社が出展 3万人の来場者へ

Inter BEE 2012の初日11月14日。開場の午前10時を前に、幕張メッセ展示ホール入り口の中央エントランスにおいて、開会式が開催された。開会式には、総務省、経済産業省、一般社団法人電波産業会、IABMを来賓として迎え、主催の電子情報技術産業協会（JEITA）の湛（たたえ）理事より、2012年のInter BEEの概要とともに、開催の意義が説明された。また、今年から後援となった総務省、経済産業省から来賓の挨拶があり、日本の経済状況の現状におけるInter BEEへの期待の言葉が添えられた。その後、2012年国際放送機器展実行委員会、座間隆司委員長の開会宣言に続いて、主催者、来賓によりテープカットが行われ、Inter BEE 2012が華々しく開会した。

「メディアの多様化に対応したアジア 最大級の放送機器展」

冒頭、主催者である一般社団法人電子情報技術産業協会（JEITA）の湛久徳理事が挨拶に立ち、今年48回目を迎えるInter BEEは、出展企業数が過去最高の871社、うち海外から35カ国地域から491社の出展があったことなどを紹介。「Inter BEEは米国のNAB、欧州のIBCと並び、世界トップレベルの映像、放送機器、音響機器、照明機器などが一堂に会するアジア最大級の放送機器展」。

「本日から開催3日間で、3万人を越える広範なユーザのみなさまをお迎える。出展のみなさま、来場のみなさまにとって、今回のInter BEEが、情報交流やビジネス創出の場として、その役割を果たし、一年に一度の機会を効果的に活用され、十分な成果が得られますことを期待する」と述べた。



テープカット登壇者(左から)
座間 隆司 氏
2012年国際放送機器展実行委員会 委員長
ジョン・アイヴ 氏
Director of Business Development & Technology, IABM
中山 亨 氏
経済産業省 審議官
(商務情報政策局・クリエイティブ産業担当)
南 俊行 氏
総務省 官房審議官(情報流通行政局担当)
松井 房樹 氏
一般社団法人電波産業会 常務理事
湛 久徳 氏
一般社団法人電子情報技術産業協会 理事

■総務省 官房審議官（情報流通行政局担当）
南 俊行 氏

「デジタルを活かした新たな サービスを」



続いて、来賓として開会式に参加した、総務省 官房審議官 南俊行氏と、経済産業省 審議官の中山亨氏が祝辞を述べた。

南氏は、Inter BEEについて「世界最先端の放送機器・映像・音響機器が一堂に会して、新しい技術と技術が会うことによって、さまざまな情報交流を通じて新しいビジネスチャンスが生まれる絶好の機会と期待している」と述べた。さらに「また、ポスト地デジの本命が何になるのかということに関し、一人一人の目でぜひ、確かめていただきたい」として、「ポスト地デジ」というキーワードを掲げた。放送のデジタル化の意義について「デジタルの良さ・特徴を活かした新しいサービス、特に通信と放送の連携をしたサービスを一日も早く、国民のみなさまにお届けできるような環境整備に力を傾けていきたい」とし、「デジタル化による新サービス創出の環境整備」が放送のデジタル化の次なる課題であると示した。

南氏はまた、総務省が発足した「放送サービスの高度化に関する検討会」（座長・須藤修東大学院教授）に言及し、「日本のお家芸でもある、高精細化、いわゆる4K/8K、スーパーハイビジョンの実施をどうするかという問題とテレビの高機能化と呼ばれるスマートTV、の実用化のルールをどう決めていくのか、たぶん、この二つの流れはお互いに高めあうことによって、新しい刺激を産んでいくということだろうと考えている。一日も早く、実現に向けたロードマップをつくりあげたい」と抱負を語った。

最後に、「まだ気が早すぎるのではないと思われるむきもあるかもしれないが、この分野の変化・進化のスピードはものすごいものがある。ポスト地デジの10年先を見極めた上で、今から、アクションをとっていかねば手遅れになる」と危機感を示し、「関係者の知恵を拝借しながら、きちんと道筋を立てていきたい」と括った。

経産省審議官の中山氏は冒頭、Inter BEEを「国内外の市場へ向けて、世界最高水準の日本の放送技術、機器をとりまく技術を発信していく大変良い機会」と位置づけ、「大いに活用して新しいビジネスが生まれていくことを期待している」と述べた。

続いて、日本のテレビなどの電機業界について、「家電エコポイ

■経済産業省 審議官(商務情報政策局・クリエイティブ産業担当)
中山 亨 氏

「放送と通信の融合で 多様な楽しみ方を」



ントや地デジ移行の買い換え需要などの反動」や「歴史的な水準にある円高」などの影響もあり、「とりわけテレビ関連の企業はみな、非常に厳しい経営状況、経済状況にある」としながら、「ただ、その中にある、日本のものづくり、製造業のみならず、コンテンツ、デザイン、感性というものは、さまざまなものを含めた日本のものづくりは決して損なわれていないし、依然として世界最高水準だと信じ、信頼している」と日本のものづくりに対する期待感をにじませた。

中山氏はまた、10月に開催したCEATEC会場での体験を引き合いに次のように話した。「4Kのように新しい高精細なディスプレイを見て、きれいだと感動するとともに、一刻も早くこの美しさを十分に活かしたコンテンツを家でも楽しみたいと思った。それと同時に、インターネットへテレビがつながっていくことで、まさに放送と通信の融合、という形で新しいコンテンツサービスが広がるし、多様な新しい楽しみ方が生まれてくると心から楽しみにしている」。

中山氏は続けて、「経済産業省でも、JEITAと連携をして、『次世代テレビに関する検討会』（委員長・慶応義塾大学特任教授芦村和幸氏）を設置し、検討を進めている」と述べ、「総務省からも参加していただき、我々からも総務省が行っている放送サービスに関する検討会にも参加させていただいている。完全に相互乗り入れの形で、放送事業と、機器を作っていく、またコンテンツをつくっていくということが一体の、車の両輪として、これから先の姿とともに検討していこうとしている」と国際的な新市場の創出へ向け、官民一体の態勢を構築している状況を説明。「こうした検討会で早く先行きを示していくことが、まさに産業の活性化、新しい産業を産んでいくことにつながる。みなさんの意見をもらいながら、先に進んでいきたい」と意欲を示した。

この後、2012年国際放送機器展実行委員会、座間隆司委員長が開会宣言を行い、最後に、総務省、経産省、電波産業会、IABM、電子情報技術産業協会、実行委員会から、代表者が参加してテープカットが行われた。

2012年 地上デジタル完全移行で 新たな時代への扉が開く 新たな放送サービス ビジネスモデルの構築も含めて模索

初日の11月14日午後5時より、レセプションが開催された。Inter BEEにおけるレセプションは4年ぶりに開催するもので、Inter BEEの開催に際して協力を得た後援、協力団体、日本放送協会、民放各局、出展企業各社の幹部を招き、B2Bの交流の場として開催された。Inter BEE 2012 国際放送機器展実行委員会、座間隆司委員長から挨拶に続き、後援団体の日本放送協会 理事・技師長の久保田圭一氏が来賓挨拶で登壇し、同じく後援団体の一般社団法人 日本民間放送連盟 専務理事 木村信哉氏が乾杯の挨拶に立った。

久保田氏、木村氏とともに、今年3月、東北三県が地上デジタル移行をしたことにより、日本が地上デジタル完全移行を実現したことを挙げ、今年が新たな放送サービスへのスタートの年と位置づけた。



Inter BEE 2012 国際放送機器展実行委員会
委員長 座間 隆司 氏



日本放送協会 理事・技師長
久保田 啓一 氏



一般社団法人 日本民間放送連盟 専務理事
木村 信哉 氏



「アジア最大級の放送機器展 Inter BEE 過去最多の出展者数」

冒頭、InterBEE 2012 国際放送機器展実行委員会、座間隆司委員長から挨拶があった。

「今回は、過去最多の871社が出展し、海外からも過去最大の35の国・地域から491社の出展があり、本展示会への国内外からの関心の高さがうかがえる。展示会場には、4K、8Kなどの超高精細映像技術や、セカンドスクリーン、スマートテレビなどの新しいメディアの可能性に加え、VLowなどの電波の有効活用、デジタルサイネージやプロジェクションマッピングという新たなビジネスモデルなど、国内外のさまざまな企業・団体がメディア産業の今とこれからを指し示す注目の提案を披露している。昨年新設したクロスメディア部門には、新たにクロスメディアシアターを設置し、トップクリエイターや第一線で活躍するプロフェッショナルの方々、メディアとコンテンツの多様性と可能性を訴求する各種プレゼンテーションのセッションを開催する。さらには、毎回注目を集める、InterBEE コンテントフォーラムでは、次世代のコンテンツ、信頼と創造をテーマに掲げ、国内外から、映像・音響各分野の第一人者をプレゼンターに迎え、コンテンツビジネスの最新動向が議論される」

「デジタル放送完全移行で 新たな時代への扉が開く」

続いて、後援団体である、日本放送協会 理事・技師長の久保田啓一氏から挨拶があった。

久保田氏はまず、昨年の東日本大震災により、延期されていた東北3県の地上デジタル放送への移行が、今年3月に実施されたことを紹介し「2012年は、我が国の地上波テレビジョン放送が完全にデジタル放送に移行する節目の年となった」と述べた。

久保田氏はまた、このデジタル放送への完全移行を「新しい時代の扉を開いた」とし、「これまで、実現が難しかったサービスが急速に広がっていくと感じている」と述べ、デジタル放送の完全移

行が新たな放送サービスの開発・普及の時代の幕開けとなると指摘した。

放送のデジタル化についての「放送局のサイド」からの変化として、「新しい番組制作のスタイルや、取材体制など、放送内のワークフローを変える」と述べ、「InterBEEでも4K、8Kといったハイビジョンをはるかに超える高品質のテレビ、コンテンツ制作機器が見られる。次世代の放送システムの実現へ向け、メーカーもいよいよ力を入れ始めたと思っている」と期待感をにじませた。

久保田氏は、テレビの技術開発における「高品質化・高画質化」の動きについて、「テレビの王道を再び歩み始めたという感を強くしている」とし、ロンドン・オリンピックでスーパーハイビジョンによるパブリックビューイングで、高い評価を得たことを紹介し、「早くこのテレビが欲しいという要望をいただいた。この要望にお応えするためにも、開発を急いでいる」と述べた。また、スーパーハイビジョンが、デジタルサイネージ、デジタルシネマ、医療、博物館、美術館など、放送以外の領域でも活用されている例を挙げ、「多くの方と力をあわせて進めていきたい。超高画質超高精細映像は日本のお家芸だと思っており、ぜひ広く進めることで、放送文化を豊かにするとともに、我が国の国際競争力の強化につながる」と締めくくった。

「ビジネスモデルを含め、 民放ならではの新たな放送を」

レセプション・オープニングの最後に、後援団体の一般社団法人 日本民間放送連盟 専務理事 木村信哉氏が登壇した。木村氏は、久保田氏と同様、地上デジタル放送への完全移行を話題に挙げ、「民放でも、昨年の震災報道を経て、改めて放送の持つ社会的な使命を強く意識することになった。同時に、放送の新しい形をデジタルにふさわしいコンテンツのあり方をメーカーの皆さんといっしょに考えていきたい。放送の高度化・多様化も、言われて久しいがビジネスモデルとともに、民間ならではの視点で、Inter BEEから放送の将来につながる新しいヒントを見つけたい」と挨拶し、木村氏の合図で来場者全員が乾杯を唱和した。



カメラ機材のネットワーク機能を強化し 映像活用の“将来像”を提案

パナソニックは「P2HD」シリーズや「AVCCAM」シリーズ、HDシステム機器を中心に、IPネットワーク連携で実現する放送・業務用AV機器の将来像を提案した。P2HDシリーズの新製品としてはメモリカード・カメラレコーダ「AG-HPX600」、AVCCAMシリーズからはメモリカード・カメラレコーダ「AG-AC90」などを展示。またスタジオカメラシステムとしてマルチフォーマットカメラ「AK-HC3800」のほか、リモートカメラシステムとしてIP映像の配信に対応したHDインテグレートドカメラ「AW-HE60S/H」を出展した。

カメラレコーダとともに新しい記録メディアも紹介。P2HDシリーズで使用する新放送用半導体記録メディア「microP2カード」(32GB/64GB)を国内初出展した。microP2カードはフォームファクターをSDメモリーカードに変更したことで、大幅にメディアコストを下げる事が可能。RAIDシステムの採用や内部の基板構成を堅牢化することにより、従来のP2カード同様の高速転送・高信頼性も確保している。会期中はこれらの機材を活用し、ブース内のUstreamスタジオからライブ放送も実施。映像配信の新しい形を提案した。パナソニック イメージング事業グループ プロフェッショナルAVビジネスユニット マーケティング企画チーム主事の並川 実氏に来場者の反響やInter BEEの位置づけなどを聞いた。



パナソニック株式会社
AVCネットワーク社
イメージング事業グループ プロフェッショナル AV ビジネスユニット
マーケティンググループ マーケティング企画チーム主事
並川 実氏



クラウド連携を視野にネットワーク機能を強化

■今回の展示の中で特にアピールしたい点は何か。

「P2HDシリーズの新製品となるメモ리카ード・カメラレコーダ『AG-HPX600』と新しい記録メディアとなる『microP2カード』だ。AG-HPX600はネットワーク機能が強化され、カメラの映像をスマートフォンやタブレット端末で視聴できるようになった。メタデータをもとにファイルベースの検索にも対応する。簡易編集も可能なので、撮影したその場で編集、送付のワークフローを実現できる。現場で使用する機材が減らせるし、作業も効率化できる。」

「AG-HPX600の新しい記録メディアとなるmicroP2カードは『SDメモリーカード UHS-II』規格に準拠し、大幅な小型化とコストダウン・汎用性を実現したものだ。小型化し、読み出し・書き込みが高速化されることで、現場での作業がやりやすくなる。既存のP2機器で使用するための『microP2カードアダプタ』と併せて、2013年春の商品化を予定している。この製品群は、これからの映像制作・配信の“将来像”を見据えたもの。今回は次世代につながる展示を心がけた」

■パナソニックが考える“将来像”とはどういうものか。

「映像の取り込み、編集、送付、アーカイブまで含めた一連のワークフローのネットワーク化だ。その先にクラウドとの連携も視野に入れている。今回は具体的な展示に至らなかったが、欧米で

はすでにクラウドを活用した提案も行っている。クラウドにつながることで、映像制作・活用のワークフローは劇的に変化する。ネットワーク機能を強化したAG-HPX600によるワイヤレス編集システムは、その布石となる物だ」

高まりつつあるネットワーク配信のニーズ

■来場者の反応はどうか。

「地デジ関連の投資が一回りしたこともあり、撮影機材に関する興味・関心が高まっている。特にネットワーク配信に興味を持っているお客様が多い。以前は放送局向けの展示が中心だったが、近年はローエンドソリューションの展示を増やしている。限られた予算の中で、いかに魅力的な映像サービスを実現するかが重要な課題になっているからだ」

■今後の展示に向けた課題や改善点はあるか。

「4k対応カメラなどHDを超えるソリューションに対するニーズがある一方、映像制作の現場では作業の効率化やコストダウンを求めるニーズも高い。お客様の幅広いニーズに対応したラインナップ強化に、これまで以上に注力していくことが大切だろう」

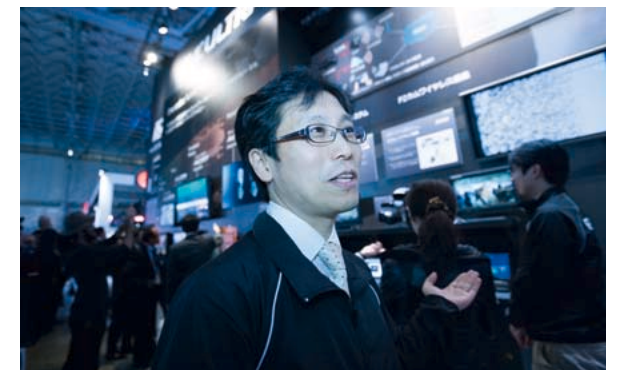
世界四大放送機器展の一つとして大きな役割

■Inter BEEをどのように位置づけているか。

「Inter BEEは世界四大放送機器展の一つであり、日本で開催する最も大きな放送機器展。その意義は大きい。多くのお客様に最新製品や新たな提案・情報発信を行える絶好の機会と位置づけている。お客様の反応や声に直接触れられる点も大きなメリットだ」

■今後、Inter BEEに期待することはあるか。

「海外、特にアジアのお客様の来場がもっと増えるといい。海外に向けて、積極的に情報発信し、来場促進につなげてもらいたい」





昨年に引き続き“Continuous Innovation”をテーマに掲げた朋栄は、次世代のファイルベースソリューションをはじめ、革新的なカメラ製品などを多数展示した。ファイルベースソリューションはさまざまな素材をMXFファイルでサーバに保存し、編集、送出、アーカイブまでのワークフローをファイルベース化するもの。全体を管理する「MediaConcierge(メディアコンシェルジュ)」は新機能が追加され、編集・送出系の運用性と操作性が改善された。アーカイブ系には高速転送で大容量の新型LTOサーバが投入されている。

カメラ製品としてはフル4K(4096×2160ピクセル)で最大900コマ/秒までのスーパースロー撮影に対応したハイスピードカメラ「FT-ONE」を国内で初めて出展した。最大9.4秒のRAWデータを内部メモリに記録できるほか、SSDカートリッジの実装も可能だ。ブース内特設シアターでは、4Kスーパースローのデモ映像を上映した。

またライブプロダクション関連製品としてオールインワンライブプロダクションシステム「SmartDirect」、ビデオスイッチャーでは「HANABI」の新製品2機種(2M/Eモデル「HVS-390HS」、2M/Eモデルおよび3M/Eモデル「HVS-4000HSA」)など初展示製品や新製品を数多く公開した。朋栄企画室企画・広報グループグループ長の白鳥貴之氏に来場者の反響、Inter BEEの位置づけなどを聞いた。

映画・CM 業界の来場者が増え 市場の広がり 新たな可能性を実感



株式会社朋栄
企画室
企画・広報グループグループ長
白鳥 貴之 氏

フル4K 高速度カメラ「FT-ONE」を国内初出展

■今回の中心となる展示を教えてください。

「次世代のファイルベースソリューションと、フル4K高速度カメラ『FT-ONE』が今回の展示の中心だ。ファイルベースソリューションについては2007年から提供を開始しており、お客様の声を反映し製品は年々進化を続けている。今年はその集大成と位置づけ、素材のインジェストから編集、送出、アーカイブまでを統合管理するファイルベースワークフローのメリットを強く打ち出した。」

「一方、FT-ONEはカメラ事業に対する当社の意気込みを示す注力製品といえる。新開発したフル4K解像度/高感度グローバルシャッター方式CMOSカラーセンサ『FT1-CMOS』を搭載し、フル4K解像度で秒間最大900コマまでのスーパースロー撮影を実現する。標準搭載される内部メモリへ、4Kフル解像度かつ900コマ/秒で最大9.4秒のRAWデータの記録も可能だ。スポーツやライブ中継における同時録再に対応する。また3G-SDI4系統と、ビューファインダーなどに用いるHD出力を2系統装備する。プロ作業に向けて、SSDカートリッジによるデータ取り出しが可能で、映画などの特殊撮影用途にも威力を発揮する。なお、FT-ONEはInter BEE 2012が国内初出展となる」

ベースバンドからファイルベースへの移行に強い関心

■展示の見せ方など工夫した点はあるか。

「ファイルベースソリューションはローカル放送局のファイルベース化を念頭に置き、ベースバンド主体のシステムからファイルベースへ移行することで『何が変わり、どんな管理手法が求められるか』といったことを具体的に提案する内容にした」

「FT-ONEに関してはグループ会社のエクサインターナショナルと協力し、デモ映像を制作。ブース内特設シアターで、カラーグレーディング処理を行った4Kスーパースロー映像を上映した」



■来場者の反応はどうか。

「ファイルベースに関してはお客様の関心が年々高まっているのをひしひしと感じる。そのため、コンセプトベースではなく、今年は“すぐに使えるソリューション”としての展示にこだわった。お客様も具体的なイメージを持ちやすいようで、共感の声を多くいただいている」

「またカメラ製品を強化したことで、放送局のお客様だけでなく、映画やCM業界のお客様の来場が増えているのを感じる。今まで当社のブースに足を運ばれることが少なかった現場のカメラマンの方も多く来場されている」

「今年は例年に増して来場者が多い。『実際に使ってみよう、デモを見てみたい』など、そのあとにつながる具体的な要望も例年に比べて多いという印象だ。こうしたいい流れを具体的な商談へと発展させていきたい」



Inter BEE はお客様の生の声を聞ける貴重な場

■御社にとってInterBEEはどういう位置づけか。

「Inter BEEは国内で最も重要な展示会。映像業界にかかわるお客様に向けて、最新の製品群を数多く提案できる絶好の機会と考えている。お客様の生の声を直に聞けるのも大きなメリットだ。普段、お客様と接する機会の少ない開発者もスタッフとして参加しているので、現場の要望や改善点などがダイレクトに伝わる。それが開発作業にフィードバックされることで、より良い製品づくりが可能になる」

■今後、Inter BEEに期待することはあるか。

「ここ数年、インターネットやソーシャルメディアを使った情報発信に積極的に取り組んでいるという印象がある。自分たちだけで情報発信していくのは限界があるので、この点は非常に感謝している。今後もこうした取り組みを継続してほしい。要望があるとすれば、海外へ向けての情報発信を強化し、海外のお客様のさらなる来場促進を図ってもらいたい」



富士フィルムは2012年のNABで発表し好評を博したシネマカメラ用レンズ「ZK4.7×19」、Inter BEE 2012が初披露となる望遠タイプのシネマカメラ用レンズ「ZK3.5×85」など、注目の最新レンズ製品などを豊富に出展した。

ZK4.7×19は焦点距離19mmから90mmまで、一方のZK3.5×85は焦点距離85mmから300mmまで対応する高性能PLマウントレンズ。いずれも着脱可能な電動ドライブユニットを搭載する。これにより、ズームやフォーカスを電動で駆動させることが可能になり、運用フィールドの幅が広がった。

99倍ズームに対応した「XA99x8.4BE」も大きな目玉の1つだ。これは望遠832mmから世界最広角の8.4mmまで対応した“寄れて引ける”高倍率中継レンズ。メカニズムと制御回路を一新することで「光学式防振機構」の性能が向上し、映像撮影時の安定性がより高まった。

そのほか、3Dデジタルカメラ「FinePix REAL 3D W3」および3D&2Dデジタルフォトフレーム「FinePix REAL 3D V3」、デジタル映像撮影現場向けの色管理システム「IS-100」、圧縮時最大容量6.25TBを実現した第6世代のLTOテープなど映像制作・活用の幅を広げる多様な製品を数多く展示した。富士フィルム 光学デバイス事業部 テレビレンズ営業チームの保坂 浩之氏に来場者の反響、Inter BEEの位置づけなどを聞いた。

性能と使いやすさを追求し 映像機材のデジタル対応を加速



富士フィルム株式会社
光学デバイス事業部
営業部 第二営業グループ
テレビレンズ営業チーム
保坂 浩之 氏



PLレンズに電動ドライブユニットを搭載

■今回の展示の中心となる製品は何か。

「最新のシネマレンズ製品だ。今年は特にPLレンズに力を入れた。ZK4.7×19およびZK3.5×85は高い光学性能を追求したことに加え、操作性の向上を図った点が大きな特長である。小型・軽量化を図るとともに電動制御のドライブユニットを搭載しており、ズームやフォーカスを電動でスムーズに行える。高い光学性能をフルに発揮し、映像表現の幅が大きく広がるだろう。なお、ZK4.7×19は2012年のNABで発表し、反響の大きかった製品。今回のInter BEEが国内初出展となる。ZK3.5×85も今回が国内初のお披露目だ」

「レンズ以外では3Dデジタルカメラや3D対応デジタルフォトフレーム、富士フィルムの色再現技術とカラーマネジメント技術をもとに開発したデジタル映像撮影現場向けの色管理システム『IS-100』、圧縮時最大容量6.25TBを実現した第6世代のLTOテープなどを出展した。IS-100は当社が初めて手がけるデジタル映像撮影用システムということもあり、反響が大きかったようだ。ブースではiPadの操作でカラーバランス、彩度、明るさなどの調整をリアルタイムで行えるデモも公開した。また第6世代のLTOテープは近日発売予定。アーカイブ用途として注目が高い」

■展示品の訴求に関して工夫した点はあるか。

「レンズに関しては昨年同様、ブース内に仮設スタジオを設営。照明を工夫し、実際のスタジオに近い環境で表現力、使い勝手などを体感できるようにした。また望遠レンズはより遠くの被写体を捉えられるように、レンズがブースの外側を向くようにカメラを配置した」

業界の垣根を越えた来場者の広がり

■先頃、撮影用/上映用フィルムの販売終了を発表したが、来場者の反応はどうか。

「撮影用/上映用フィルムの販売終了は映画撮影・制作・上映・保存工程のデジタル化に対応した事業転換の一環。ただし、機器のデジタル化については早い段階から取り組んできており、来場者に目立った変化はない」

「富士フィルムはデジタル化に関して、いかにそのメリットを製品に取り込むかということに注力して取り組んできた。例えば、PLレンズのドライブユニット搭載はその表れだ。レンズというアナログ的な光学機器にデジタル制御の駆動部品を付加することで、使いやすさを高めた。アナログの良さに、うまくデジタルの要素をミックスさせて、より良いものを提供していく。それが当社の目指す大きな方向性である」

■ブースを訪れる人はどんなお客様が多いか。

「従来は放送局のお客様がほとんどだったが、ここ数年、映画・CM業界のお客様が増えてきた。お客様のニーズも変化し、機材について映画用/テレビ用といった違いをあまり意識しなくなっている。高画質化への対応が進んだことが、その一因だろう。機材本来の性能やポテンシャルを重視する流れに変わってきている」

「PLレンズへのドライブユニット搭載も、映画用のレンズに放送用のレンズで利用されていた付属品が付加された形で、両者の融合が進みつつある表れだ。職種に関わらず、高画質化と使いやすさを求めるお客様が増えているので、そういうニーズを形にしていくことがメーカーとしての責務と考えている」



Inter BEE はお客様との大切な接点

■Inter BEEの役割について教えてほしい。

「春のNABと秋のInter BEEという二大サイクルで展示会を回している。特にInter BEEは国内最大の放送機器展であり、お客様との大切な接点と考えている。セールスで日々お客様と接する機会はあるが、いろいろな職種のお客様と同時に接することができる機会は少ない。その意味でも、Inter BEEの役割は大きい」

■Inter BEEへの要望や期待はあるか。

「展示の内容や見せ方、ブースのレイアウトなど、他社の動向を見て勉強したいが、期間中はブースを離れられない。例えば、初日の開催前に1時間だけでも、関係者の見学時間のようなものを設けてもらえるとうれしい」

「開催時期ももう少し早めてもらえるとうれしい。というのも、お客様の予算の編成時期がInter BEEより早いところがあるからだ。会期が早まれば、展示内容を次年度予算の編成に活かすといったいい流れができるのではないだろうか」





グループの総合力をフルに発揮 デジタルオーディオの トータルソリューションを提案

ヤマハはデジタルミキサーのCLシリーズ、スピーカーシステムのNEXO、音楽制作ソフトのSteinbergの新品を展示した。

最新商品のCLシリーズは25年間のヤマハのデジタルミキサーの技術を結集した製品。タッチパネル式で直感的な操作が可能だ。エフェクターでは、プレミアムラックと呼ぶ、Rupert Neve Designs社とコラボレーションした機能を搭載している。

NEXOの新品としては、数百人から数万人規模のイベントに対応できるSTMシリーズを展示。取り回しが容易で、ワンマンリングとして一人でつり下げ、グランドスタックの角度設定なども行える。メインとベースをダブルアレーで2列に並べた大型システムやトリプルアレーの構築にも対応する。

CLシリーズに加え、もう一つのヤマハの新品はSteinbergと共同開発したアドバンス・プロダクション・システム「NUAGE」。フェーダーユニット、マスターユニットなどのコントロール部分、オーディオインタフェースを備えた一つのDAWソリューションだ。

さらに今回の展示ではNEXO社およびSteinberg社をグループ会社化した統合メリットをアピール。デジタルオーディオネットワーク「Dante」に対応することで、各ブランドを統合したオーディオ関連のトータルソリューションを展示した。



ヤマハ株式会社
PA 営業部 マーケティンググループ主任
武田 学氏



オーディオ機器の魅力を伝える展示方法に期待

■Inter BEEをどのように位置づけているか。

「国内では最も力を入れている展示会だ。個人ユーザーから法人のお客様まで、いろいろな立場の人の意見を直接聞けるのも大変ありがたい。お客様の反応や製品の評価を肌で実感できる貴重な展示会だ」

■Inter BEEに期待することはあるか。

「放送業界向けの映像機器の展示が多いが、映像コンテンツの魅力を高める上でもオーディオは重要な要素。その性能や品質を体感できるような展示の仕方を考えているが、屋内のブースでは音圧規制の問題もあり、展開が難しい。防音や遮音のブースを作ってスピーカーの性能を体感してもらう展示も行ったことがあるが、大型のスピーカーになると狭い空間ではその魅力が十分に伝わらない。屋外スペースの活用も含め、プロオーディオ機器のポテンシャルを発揮できる展示方法について検討を進めてほしい」

Dante に対応した商品群を展示

■今回の展示のコンセプトは何か。

「展示のコンセプトは“All to the NEXT”。ヤマハ、CLシリーズ、NEXO、Steinberg といった各ブランドの新商品に加え、ヤマハグループのトータルソリューションを提案した。具体的には、各新商品をデジタルオーディオネットワーク『Dante』につなぎ、ネットワーク上から監視・制御することで、デジタルオーディオの世界が新たなステージに到達したことをアピールするものだ」

■どのような展示を心がけたか。

「ヤマハグループの総合力がより伝わるように見せ方を工夫した。昨年の20コマから今年は25コマにブースを拡大し、ブランドごとの仕切りもなくした。そうすることでトータルソリューションによるワークフローの全体像がよりわかりやすくなると考えたからだ。全体像を示すことで、レコーディングから音楽制作、ライブ会場での利用まで幅広いニーズに対応できることを紹介した」

DAW システム「NUAGE」を世界初披露

■展示の中で特に反響の高いものは何か。

「Dante対応のトータルソリューションはもちろんだが、中でもヤマハとSteinbergとのコラボによるポストプロダクション向けシステムソリューション『NUAGE』の反響が非常に良い。これはヤマハがSteinbergをグループ会社化して初の大型統合製品であり、今回のInter BEEが世界初披露となる。コントローラに関しては今まで大型の専用機がなかったため、業務用システムとしての高いニーズを実感している」

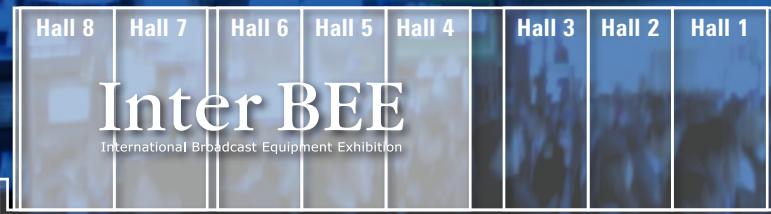
■来場者のニーズをどのように感じているか。

「最近ではオーディオと映像を分けて考えるのではなく、両者を統合したソリューションのニーズが高まっている。実はNUAGEもそうしたニーズに対応した製品。オーディオ編集の機能がメインだが、映像とシンクロしながら編集を行える。ブースでも映像と併せてオーディオ編集するデモを公開した」

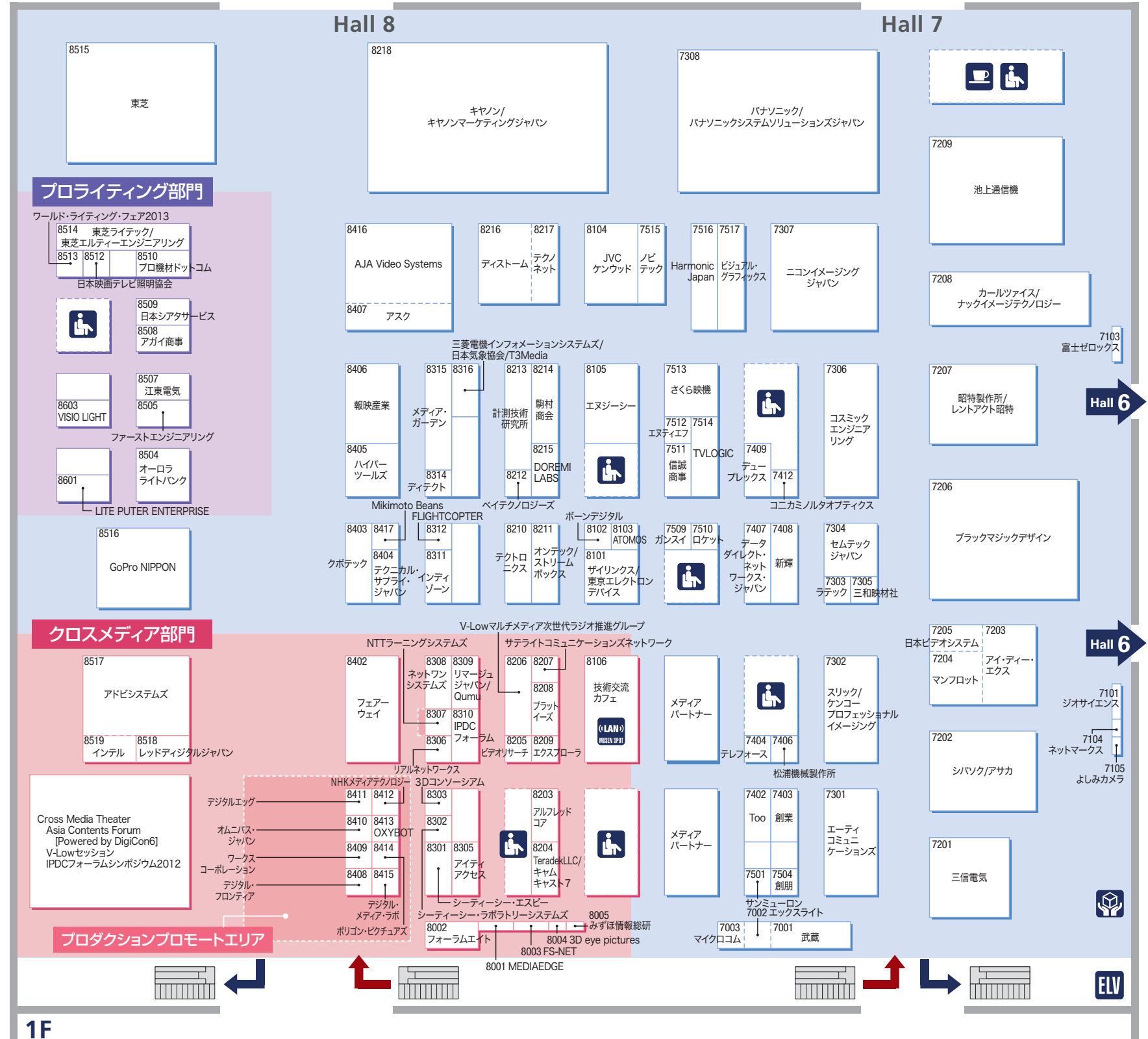
「こうしたニーズが高まっているのは、オーディオと映像を組み合わせ合わせた展開の仕方が増えてきているからだ。例えば、ライブハウスのお客様の場合、ただコンサートをするだけでなく、映像も一緒に撮って、パッケージとして商品化したり、ネットワークを使って動画を交えた音楽配信を行うケースもある。さまざまな展開を考えていく中で、オーディオと映像を一体的に処理できるシステムが求められている」



Makuhari Messe



映像・放送関連機材部門



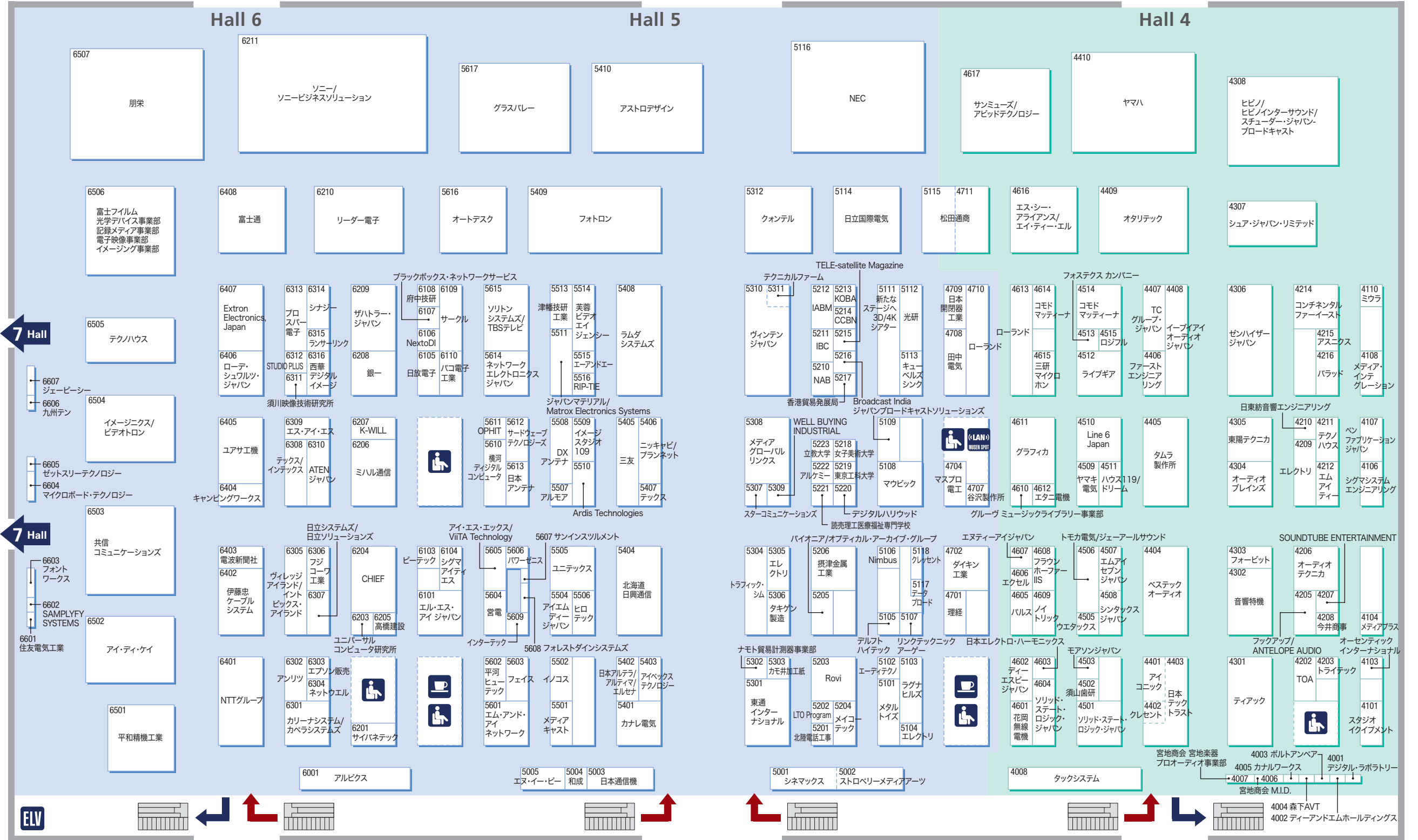
映像・放送関連機材部門

プロオーディオ部門

Hall 6

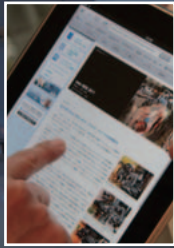
Hall 5

Hall 4



音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト
Inter BEE online
 www.inter-bee.com

Inter BEEでは、出展情報や国内外の関連展示会情報を独自に取材するチーム「Inter BEE ニュースセンター」を設置しています。出展製品、展示会情報は、取材チームにより記事・映像コンテンツとなり、会期前、会期中、会期後と年間を通じて、Inter BEE Online 内の Online Magazine や Inter BEE TV によって発信されました。



Inter BEE Online 掲載記事 (一部/抜粋)

Magazine 2012.10.22UP

シグマアイティエス(株)

ファイルベースワークフローに対応した LTO-5 ビデオアーカイブの制御装置「LTO ダビングシステム」を出展

シグマアイティエス(映像・放送関連機材部門 #6104)は、放送メディアのファイル化に伴う「アーカイブシステム」向けの製品として、LTO ダビングシステムを出展する。LTO-5 対応ビデオアーカイブレコーダーをリモート制御することにより、VTRテープのファイル化作業を半自動化する。記録素材の外部ストレージやVTRテープへの書き出し機能も搭載。自社製アラーム収集端末装置「SHAU-201」との組み合わせで、VTRデッキでの再生、録画中のISRとSNMP対応機器を常時監視、収集できる。ISR監視、収集ログによって、作業中に発生したチャンネルコンディションエラーなど、機器の異常と機器情報の内容の確認が可能。

Magazine 2012.10.22UP

みずほ情報総研(株)

次世代符号化技術 HEVC ストリーム解析ツールを出展

■次世代動画符号化方式HEVCのストリームを解析

みずほ情報総研株式会社(クロスメディアゾーン、#8005)は、同社のブースにおいて、画像処理関連ソリューションの新提案として、次世代動画符号化方式HEVCに対応したストリーム解析ツール「HEVCストリームアナライザ」を、参考展示・デモンストレーションする。

HEVCの特性評価をするためのツールとして、10月16日に同社が開発発表をした。「HEVCストリームアナライザ」はHEVC方式で圧縮符号化された信号(ストリーム)の特性評価を行うソフトウェア。解析データは、元の信号(縮小画像)や圧縮率、ビットレートの推移をグラフで表示する。

Magazine 2012.10.22UP

シーティーシー・ラボラトリーシステムズ(株)

高速ファイル転送ソフト「Aspera」を出展

シーティーシー・ラボラトリーシステムズ(クロスメディアゾーン #8302)は、同社の高速ファイル転送ソリューション「Aspera」を出展する。ファイルベースのワークフローにおいて、大容量ファイルをWAN上で高速にやりとりできるツール。すでにハリウッドスタジオや、世界の大手放送局、スポーツリーグ、政府機関などでも採用されている実績を持つ。

特徴は、FTPやHTTPなどの既存のプロトコルを用いず、独自のfaspテクノロジーによって、ボトルネックを取り除いた点にある。APIを公開しているため、既存システムとの連携なども可能だ。

「昨今、コンピュータ性能の飛躍的向上、ブロードバンドインターネットの普及、クラウドストレージサービスの普及などあらゆるビッグデータ環境が整ってきましたが、産業界の課題は、データのやり取りの効率化にある。Asperaは、この課題を解決するためのソリューションを提供する。」

Magazine 2012.10.22UP

ディーエスピージャパン(株)

マーキング・テクノロジーズ社製 最新オーディオプロセッサ「Horus(ホルス)」、仏社製 音場自動補正機「MC-Pro」を出展

ディーエスピージャパン株式会社(プロオーディオ部門 #4602)は、最新型のオーディオ・プロセッサ「Horus(ホルス)」を出展する。また、フランスTrinnov(トリノフ)社の音場自動補正機「MC-Pro」も展示する。MC-Proは、高速プロセッシングと正確な音響補正が話題になっている製品。この他に、スイスPSI社によるオールハンドメイドの高性能スピーカー「Mシリーズ」や、フィールド録音でアカデミー賞受賞者からの絶対的な信頼を誇るスイスSonosax社の「ESシリーズ」小型ミキサーの展示を行う。

ブースでは、このほか、ラウドネス補正を自動的に行う「MXFix」サーバーや、音声ポン出し機「Ovation(オベーション)」の実演を行うほか、ポストプロダクションでのインテグレーション例としてインテリジェント・コントローラー「Tango(タンゴ)2」「Pyramid(ピラミックス)」「Vcube(ブイキューブ)」も展示する。

Magazine 2012.10.22UP

(株)フォトロン

夏季オリンピックの放送センターでのワークフローを再現、EVS社製品を主力にファイルベース・スポーツプロダクションの最先端を紹介

フォトロン(映像・放送関連機材部門、#5409)は、ロンドンで開催された夏季オリンピックで採用されたEVS社製スポーツサーバーとプロダクションとの連携を再現し、最先端のスポーツプロダクションのワークフローをブースにて紹介する。

夏季オリンピックの会期中では、43の中継現場に52台の中継車、1,000台以上のカメラ、300台のEVSサーバーが用いられたという。

Magazine 2012.10.22UP

(株)創業

欧州製広告表示システム「ペンギンシステム」による「サウンドサイネージ」などデジタルサイネージ最新機器を出展

創業(映像・放送関連機材部門 #7403)は、屋内外の各種イベントや番組宣伝、屋外ロケ地からの中継を想定した展示を行う。

創業は、デジタルサイネージと映像素材のIP伝送に役立つユニークな商品を取り扱う企業。ブースでは、屋内外の各種イベントや番組宣伝、屋外ロケ地からの中継を想定した展示を行う。地球環境にも優しくイベント、ロケに便利なソリューションを提案する。

視聴者への訴求度を高める「サウンドサイネージシステム」は、厚さわずか1.5ミリのスピーカー「TLFスピーカー」(YAMAHA製)と、壁掛け型ディスプレイ「壁掛け型ディスプレイ」(YAMAHA製)を組み合わせたシステムだ。

Magazine 2012.10.23UP

ヒビノインターサウンド(株)

ヒビノグループ3社が共同出展 グループ関連製品ラインを一堂に結集

ヒビノインターサウンドは、ヒビノグループのヒビノ株式会社、スチューダー・ジャパン・ブロードキャスト株式会社とともに、プロオーディオ部門で今年も3社共同出展。各社が扱う製品ラインアップが一堂に会する。各社から今年発表されたばかりの新製品も含め、最新・最先端の機器が集められる。

各社の出展製品は、下記の通り。

【ヒビノインターサウンドからの出展製品】

- CALREC(放送局用ミキシングコンソール)
- CAMCO(パワーアンプ)
- CODA AUDIO(スピーカー)
- DiGiCo(ミキシングコンソール)
- DK Technologies(マスタリングコンソール)

Magazine 2012.10.23UP

(株)カムキャスト7

Vマウント型カメラバックハイビジョンエンコーダを出展 Wi-Fi、LAN、3G/4G/LTE通信にも対応

カムキャスト7(セブン)は、自社ブース(クロスメディアゾーン #8204)で、新製品のVマウント型H.264ハイビジョンエンコーダ「BRiK(ブリック)」を出展する。インターネット回線を利用してどこからでもライブ映像の送出が可能で、超小型のカメラバックハイビジョンエンコーダ。米国Teradek, LLCの製品。インターネットライブ中継サービスの提供と関連機器販売を行うカムキャスト7が、Teradek社の日本唯一の販売代理店として同社製品の輸入、販売ならびにサポートを行っている。

専用デコーダで受信してモニタアウトしたり、Ustreamやニコニコ生放送などのプラットフォーム(CDN)へ簡単にライブ映像を送ることができる。

同社が発売中のH.264ハイビジョンエンコーダ「CUBE」と同様、多彩な機能を小型ボディに盛り込んでいる。SDIスルーアウトを2系統搭載し、外部機器への電源供給用端子も搭載している。

Magazine 2012.10.23UP

エムアイティエ(株)

ライブ、屋外設営に特化したLANケーブル、NBCコネクターケーブルを出展 携帯型デジタルオーディオ信号解析器のデモも予定

放送局、レコーディングスタジオ、公共ホール等の業務用オーディオ・ビデオ及びコンピュータのインターフェース・ケーブルの開発・販売で知られるエムアイティエ(プロオーディオ部門 #4212)は、同社のモガミケーブルの最新ラインアップを展示する。アナログオーディオ用からデジタルビデオ用高周波帯域まで高音質・施工効率の高さで定評がある。

今回ブースでは特に、ライブ、屋外設営などの可動用途を想定して設計したLANケーブル、ワンタッチで抜き差しできるBNCコネクタ付きケーブルの展示も予定している。

Magazine 2012.10.23UP

リアルネットワークス

最新ストリーミングサーバ「Helix Universal Server」コンテンツ管理ツール「Helix Media Library」展示

リアルネットワークスは、11月14日(水)から16日(金)まで幕張メッセで開催されるInter BEE2012に、今回初出展する。ブース(クロスメディア部門 #8306)では、同社のストリーミング製品の最新バージョン「Helix Universal Server」とコンテンツ管理ツール「Helix Media Library」を展示する予定だ。

■ MPEG-DASHに対応した最新バージョンの「Helix Universal Server」を出展

リアルネットワークスは、最新バージョンのストリーミングサーバー「Helix Universal Server」を展示する。会場では、会場の様子をカメラで撮影し、同社のエンコード製品である「Helix Producer」を使い、「Helix Universal Server」から、PC/Android端末/iPhone/iPadなどのマルチプラットフォームでストリーミングを実施する。

Magazine 2012.10.25UP

オプティカル・アーカイブ・グループ

長期保存に対応した100GB BD-R「BDXL」を出展 室温25°C・相対湿度50%で50年を超えてもデータ再生可能

三菱化学メディア(映像・放送関連機材部門 #5205)は、同社がさきごろ発表したばかりの業務用アーカイブディスク100GB BD-R「BDXL」を出展する。公文書、行政文書、図書館や企業のデータ保管など、10年以上の長期保存を想定した業務用途の長期保存用追記型ブルーレイディスク。光ディスクアーカイブ事業のアライアンスグループであるオプティカル・アーカイブ・グループ(OPARG)の基準に則している。

専用ドライブシステムとして、バイオニアの業務用BDドライブ「BDR-PR1M」「BDR-PR1MA」に記録特性を合わせている。長期保存性に影響する最重要要因の一つが、温度と湿度。BDXLは、室温25°C・相対湿度50%で50年を超えてもデータ再生可能。

規格	容量	書き込み速度	再生速度
BD-R	25GB	4x	1x
BD-R	50GB	4x	1x
BD-R	100GB	4x	1x

Magazine 

パイオニア(株) 2012.10.25UP

**長期保存用BDドライブを出版
50年以上のアーカイブ可能に
光ディスクのアライアンスOPARGの製品に対応**

パイオニア(映像・放送関連機材部門 #5205)は、デジタルアーカイブ用の専用アーカイブディスクとして高品質記録を可能にした業務用BDライター「BDR-PR1M」「BDR-PR1MA」を出版する。両機とも、三菱化学メディア業務用アーカイブディスク100GB BD-R「BDXL」に対応し、高い記録品質と長期保存特性を実現し、貴重なデータを長期保存が可能だ。三菱化学メディアによる加速実験において、50年を超えるデータ再生寿命推定の結果を得ている。



■高品質・大量のアーカイブ構築を低コストで
厳しい基準で選別した光学ピックアップを標準
搭載し、記録速度も従来のBD-Rの約2倍に

Magazine 

ベストックオーディオ(株) 2012.10.25UP


**48ch同時ミックスに対応のオールインワンタイプ
デジタルミキシングコンソール MIDAS PRO1 を発表
小型・軽量で一人のセッティングも可能**

ベストックオーディオ(プロオーディオ部門、#4404)は、MIDAS デジタルミキシングコンソール PRO1 を出版する。MIDASのPROシリーズで初のオールインワン・タイプ・デジタルミキシングコンソールとなる。

48ch同時ミックス、16 Aux + 8MTX + LCRの27バス、最大6FX、最大28ch GEQの能力を持ち、コントロールサーフェスにDSP、パワーサプライ、アナログ入力24、アナログ出力24、AES入力2、AES出力3を装備したデジタルミキシングコンソール。

幅横686mm/重量21.5kgと小型・軽量で一人でのセッティングが可能。フィジカル入出力が足りない場合は、既存のすべての



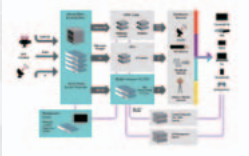
Magazine 

伊藤忠ケーブルシステム(株) 2012.10.30UP


**エンビビオ社、マルチスクリーンビデオ配信用
エンコーダの新製品、MPEG-DASHや
HEVC次世代フォーマットストリーミングを初公開**

エンビビオは、パートナー企業である伊藤忠ケーブルシステムのブース(映像・放送関連機材部門 #6402)で、放送事業者向けのライブ/オンデマンドのマルチスクリーンビデオ配信ソリューションを紹介する。

エンビビオは、ソフトウェアベースの独自エンコード技術で、単一ハードウェアでライブおよびオンデマンドでのストリーミング用エンコードを可能とする業界唯一のシステムソリューションを持つ。



ブースではマルチスクリーン対応エンコーダ/トランスコーダ「4Caster C4 GenIII」を中心に、スマートフォン、タブレット、PC

Magazine 


(株)朋栄 2012.10.30UP

**国内初出展のフル4K 高速度カメラなど
新製品を多数出展**

朋栄(映像・放送関連機材部門 #6507)は、カメラやビデオスイッチャー、ライブプロダクション、インジェスト/素材管理、アーカイブなどとさまざまなカテゴリで数多くの新製品を展示する。

■国内初出展 フル4K高速度カメラ
「FT-ONE」900コマ/秒で最大9.4秒
新製品で国内初展示となるのが、フル4K高速度カメラ「FT-ONE」、HD/SD/アナログ混在 高精細マルチビューワー「MV-1620HS」、HD/SDビデオスタライザー「IVS-710HS」。

朋栄のハイスピードカメラ「FT-ONE」は、フル4K(4096×2160ピクセル)で最大900コマ/秒までのスーパースロー撮影に対応し、



Magazine 

(株)ネットウエル 2012.10.25UP

非圧縮・無遅延のHD映像伝送ソリューションを出版

ネットウエル(映像・放送関連機材部門 #6304)は、HDカメラ撮影映像を、非圧縮、無遅延でエンコーダーに伝送し、マルチスクリーンへの配信を可能とするソリューションを披露する。

システムは、米VubiQ社製 非圧縮ワイヤレスHD 1.485Gbps HD-SDI映像伝送システム「VL300」シリーズ(RX300、TX300)と、米ViewCast社製エンコーディングシステム「Niagara4100」で構成される。

ネットウエルの無線通信営業部 部長 勝野功氏は、ソリューションの特徴を次のように話す。

「VL300シリーズは、免許不要でバンド幅の広い60GHz帯域を使用します。HD無線においては、出力レベルが10ミリワット未満、圧縮なしで撮影可能な優れた製品です。Niagara4100は、



Magazine 


アストロデザイン(株) 2012.10.30UP

**4Kワークフローをカバーするアストロデザインの
製品群を披露
カメラヘッド、SSD、テロップなど4Kの
中継番組制作にも対応**

長年にわたり高解像度の映像制作関連製品の開発、構築を進めてきたアストロデザインは、今年のInterBEEの自社ブース(映像・放送関連機材部門 #5410)で、各種の新製品を加えた、4Kの一連のワークフローを紹介する。撮影から記録・再生、編集、表示に至るまで4K映像制作のワークフローをカバーする製品群だ。

■「中継番組でも使える」4Kカメラヘッドが登場
新製品のカメラヘッド「AH-4413」は、4K解像度の映像を収録し、




Magazine 

西華デジタルイメージ(株) 2012.10.30UP

**CODEX DIGITALの最新SSDレコーダーや
ColorFront社製ファイル交換ソフトなど、
4K RAW映像制作のワークフローをデモ**

西華デジタルイメージ(映像・放送関連機材部門 #6316)は、CODEX DIGITAL社の最新SSDマルチフォーマットレコーダー「OnBoard S Plus」や、ColorFront社のオンセット用ファイル交換ソフト「OnSetDailies」を出版。OnBoard S Plusは、デジタルシネマカメラに搭載した形で、4Kデジタル映像の撮影から編集までのワークフローをデモする。

■長年にわたり4Kのワークフロー構築をサポート
西華デジタルイメージは、2006年にデジタルシネマカメラ向けに、REBONE



Magazine 

富士フイルム(株) 電子映像事業部 2012.10.30UP

3D映像の活用を幅を広げる製品・サービスを展示

富士フイルム(映像・放送関連機材部門 #6506)の電子映像コーナーでは3D関連の製品やサービスを多数出展する。映像表現の3D化を支援する製品に加え、紙媒体での3D表現を可能にしたシステムやサービスなどが目玉となる。これらの展示を通じ、3Dの魅力や可能性をアピールしていく。

■3D撮影の確認ツールとしての用途を提案
映像表現の3D化を支援する製品としては、昨年に引き続き、3Dデジタルカメラ「FinePix REAL 3D W3」、3D&2Dデジタルフォトフレーム「FinePix REAL 3D V3」を出版する。

「FinePix REAL 3D W3」は3D静止画だけでなく、3Dハイビジョン動画も撮影できるのが特徴。簡単なボタン操作で切り替えができる。右側面に搭載した高画質LCDとフジノン光学式3倍ズームレンズ



Magazine 


ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株) 2012.10.30UP

**新機能を搭載したブロードキャスト向け
コンソールなどを出版**

ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(プロオーディオ部門 #4501、#4604)は世界の放送局やポストプロダクション、音楽スタジオなどで豊富な導入実績を持つブロードキャスト向けコンソール「C10HD」「C100HDS」などを出版する。ブースではその新機能を体験することができる。

■コンパクトでパワフルな「C10HD」
「C10HD」はラージフォーマットコンソールで初めてプロセッサをコントロールサーフェイス内に搭載したオールインワン・デジタルコンソール。世界中の放送局で実績のあるデジタルコンソール「C100HD」の高い信頼性や機能、高音質、処理能力を継承するとともに、タッチスクリーンによる




Magazine 


ミハル通信(株) 2012.10.30UP

**放送局向け緊急バックアップ装置や
エリア放送システムの導入事例を紹介**

ミハル通信(映像・放送関連機材部門 #6206)は、放送局向け緊急バックアップ装置やエリア放送システムなど、放送のデジタル化によって得られた新たな機能を活用した最新の放送設備・装置を紹介する。中でも、放送局向け緊急バックアップ装置、エリア放送システムは、実際の放送局がどのようにして導入～活用しているかを紹介する貴重な展示となる。

1. 放送局向け緊急バックアップ装置
12セグ+ワンセグエンコーダを内蔵したOFDM変調器。緊急災害時の利用のほか、マスター装置のバックアップ装置としても利用できる。放送法の改正により、送出装置の冗長機能が重要視される中、この製品への関心も高まっている。すでに全国で18局が導入済み、2012年度中には12局増




Magazine 

富士フイルム(株) 記録メディア事業部 2012.10.30UP

**圧縮時最大6.25TBの保存が可能な
次世代LTOテープなども参考出展**

富士フイルム(映像・放送関連機材部門 #6506)の記録メディアコーナーでは、多様化するフォーマットに対応した豊富な記録メディアを展示する。なかでも注目したいのが、近日中に発売を予定している第6世代のLTOテープだ。そのほか、信頼性の高い放送用ビデオテープ、コンテンツ保存・管理サービスなどを出版。光ディスクの大容量化を推し進める革新的な記録媒体も技術展示する。

■新技術を用いた第6世代のLTOテープを参考出品。
近年は高画質なHDコンテンツの普及に伴い、ア



Magazine 


カーリナシステム(株) 2012.11.1UP

**映像表現の可能性を広げる製品のデモや
導入事例を展示
映像配信のための新世代カメラシステムをデモ**

カーリナシステム(映像・放送関連機材部門 #6301)の展示の目玉は、Slot-In Camera「SXH-360シリーズ」、ライブエンコーディングシステム「Cambria Live」の新バージョン、開発中のネットワークエンコーダ「MEDIASYNERGY NEX」など。これらの製品を使ったデモを展示し、ユニークな映像表現が行える点をアピールする。

■自由度の高い映像のキャプチャをリアルタイムで処理
目玉の一つであるSlot-In Camera「SXH-360シリーズ」はPCベースでのカメラコントロールや画像処理、映像配信のために設計




Magazine 

IPDCフォーラム 2012.11.5UP

**放送事業者が制作した
放送同期型マルチスクリーン向け15番組をデモ**

マルチスクリーン型放送研究会は、IPDCフォーラムのブース(クロスメディア部門、#8310)において、デジタル放送の放送波を利用してIPパケットを配信するIPDC (IP Data Casting) 技術を使った放送同期型のマルチスクリーン向け放送のデモを実施する。

マルチスクリーン型放送研究会は、地上デジタルテレビ放送の技術規格であるISDB-T方式にIPDC技術を実装して、放送番組に同期して関連情報を同時に放送し、テレビ番組を視聴しながらスマートフォンやタブレット端末で関連コンテンツを楽しむ「マルチスクリーン型放送サービス」の実現を目指し、2011年12月に発足した研究会である。発足時は、朝日放送、関西テレビ、テレビ大阪、毎日放送、読売テレビ、TBSテレビ、電通、博報堂DYメディアパートナーズ、NEC、パナソニック、ネクストウェブ、ヴィレッジアイランドの計12社で構成された。



Magazine 


(株)テクノネット 2012.11.5UP

**スポーツ中継に特化したスポーツコーダ・システムの
エントリーモデル「VFEX-ES」を出展
スポーツ中継用にAndroid向け情報提供サービスも**

テクノネット(映像・放送関連機材部門、#8217)は、サッカー、野球、ラグビー、バレーボール、駅伝、マラソンなどのスポーツ中継に特化した、HD(SDI)入出力対応のスポーツコーダ・システム「VFEX-ES」を出展する。



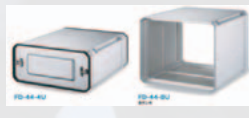
■3D対応キャラクタージェネレーター「VFEX-R」シリーズのエントリーモデルとして発表
同社製品のハイビジョンの2D/3Dグラフィックス、3D CGアニメーション対応のキャラクタージェネレーター「VFEX-R」シリーズのエントリーモデルとして、3D対応を省きコストパフォーマンスに特化した「VFEX-ES」が発売された。

Magazine 

タキゲン製造(株) 2012.11.6UP

**トラックなど振動する輸送機でも
内部機材に影響を与えないアルミ製軽量ラック
「二重構造型防振19インチラック」を展示**

タキゲン製造(映像・放送関連機材部門 #5306)振動輸送機(トラック等)でも内部機材に影響を与えない「二重構造型防振19インチラック」を展示する。アルミダイカスト、アルミフレーム、アルミパネル(絞り材)を組み合わせた軽量ラックだ。IECSC48C規格の19インチ機器が収納可能。アルミ押し出し材を用いているため、自由なサイズに設計でき、モニター、プロジェクター、ミキサーなど収納する機器にあわせて、各種のカスタマイズに対応する。オプションパーツと組合せ目的に応じた収納を実現する。強度を高めた二重構造も可能。電磁波対策・放熱対策にも優れている。



Magazine 

アドビシステムズ(株) 2012.11.5UP

**「Adobe Creative Suite 6」による
映像制作のデモを展示
映像制作ソリューションデモや
「Adobe 映像塾 特別編」も実施**

アドビシステムズ(クロスメディア部門、#8517)は、デジタルメディア開発ツールの最新版「Adobe Creative Suite 6」(以下、CS6)および最新の映像制作環境がサブスクリプションベースで利用できる「Adobe Creative Cloud」を中心に、進化する放送業界に向けた最新映像制作ソリューションを展示する。



■マルチデバイス対応の映像制作が可能なCS6
展示の目玉であるCS6は今年5月に発売された。

Magazine 

ATOMOS(株) 2012.11.6UP


**ProRes対応ポータブルレコーダー「Ninja2」、
ポータブルコンバーター「Connect」、
小型モニター付きレコーダー「Ronin」など
各種新製品を出展**

ATOMOS(映像・放送機材部門 #8103)は、同社のHD(SD)-SDI入出力対応ProRes(AVID DNxHD)ポータブルレコーダー「Samurai」、「Ninja2」を主要カメラメーカーのカムコーダー、DSLRと組み合わせたデモ展示を行う。

また、HDMI - SDIのポータブルコンバーター「Connect H2S」(HDMI to SDI)、「Connect S2H」(SDI to HDMI)、ProRes(AVID DNxHD)ポータブルデッキ「Ronin」、「Ronin Duo」を出展する。

「Ninja2」は、カメラのHDMI端子から、非圧縮品質の映像をとりこみ、Apple ProResコーデックで録画する。




Magazine 

(株)テレフォース 2012.11.6UP

**スキップバック再生機能を装備した
フルHD対応H.264ビデオレコーダー
「NH-462 デジタル・ビデオレコーダ」を出展**

テレフォースは、地震などのアラーム時点をワンタッチで検索可能なスキップバック再生機能を搭載したフルHD対応「NH-462 デジタル・ビデオレコーダ」を出展する。

HD-SDI入力によりフルHD(1920x1080)をH.264でリアルタイム録画。最大60fpsで記録可能。最大200メートルの長距離伝送が可能。RAID1の大容量HDDを最大2台搭載可能。プレ記録機能を持ち、外部からのアラーム信号入力に対応して、アラーム時点を検索・プレ記録からの映像再生が簡単にできる。最大2CHの信号を入力可能(NH462:HD-SDI or DVI, NH462S:HD-SDI 2CH)。簡易編集(IN/OUT設定)機能、リピート再生機能を搭載。純国産開発で、高信頼性・低価格を実現している。また、HDDの容量やソフト開発など、カスタマイズも可能。



Magazine 

オタリテック(株) 2012.11.7UP

**独d&b audiotechnikや英xta、独LAWOなど、
世界から多数の新製品を紹介**


オタリテック(プロオーディオ部門 #4409)は、例年に増して新製品を多数出展する。

ドイツのSR・設備用スピーカー d&baudiotechnik社からは話題の新製品V-Seriesを、また、英国xta社のマイク・ラインディストリビューターの新作DS8000も展示予定。

デジタルプロセッサの独Junger Audio社からは日本の現場環境にあわせてカスタマイズされた2chラウドネスコントロールプロセッサ LM2-JS、制作の現場に最適な4chラウドネスコントロールプロセッサ LM4を展示する。

Junger Audioからは、このほか、ラウドネスコントロール製品も展示予定、ラウドネスの自動制御・管理機器を探されている方には必見だ。

今や世界中の放送局に導入実績を持ち、多くの大規模イベントに使用され、日本国内でも多くの導入事例を持つデジタルコンソールシステムの独LAWO社からは、中継車など限られたスペースへの設置に最適な「LAWO」が日本初お披露目となる。



Magazine 

ブラックマジックデザイン(株) 2012.11.7UP

**シネマカメラBlackmagic Cinema Camera2
モデルを出展
ブースを拡大しカメラ撮影コーナーを開設**

■カメラ撮影コーナーを新設し
Blackmagic Cinema Camera 2モデルを展示
ブラックマジックデザインは、話題のシネマカメラBlackmagic Cinema CameraのEFモデルとIBCで発表されたマイクロフォーサーズ対応のMFTモデルを展示する。

昨年よりもブースを拡大し、自由にカメラを試すことができるカメラ撮影コーナーを設ける。



■4K対応のSSDレコーダーなど各種4K関連製品も展示
Blackmagic Designは、6000ドルからスタートする4K対応のSSDレコーダー「Blackmagic Cinema Camera 2」を展示する。

Magazine 


(株)メディア・インテグレーション 2012.11.7UP

**英Earthworks社製マイク新製品と
英Nugen Audio社製ラウドネス
管理ソリューションをデモ**

メディア・インテグレーション(プロオーディオ部門 #4108)は、米Earthworks社製のワイヤレス用ハイ・ディフィニション・ヴォーカル・マイクヘッド「WL40V」と、同じく米Earthworks社製の設備音響用マイク「Installation」シリーズ、英Nugen Audio社製の最新ラウドネス管理ソリューションを出展する。



■ワイヤード・マイク「SR40V」をベースにワイヤレス・カプセル化
WL40Vはワイヤレス・マイクをハイ・ディフィニション・ワイヤレス・マイクへと変えさせるハンドヘルド・トランスミッター用として開発された。


Magazine 

フラウンホーファー IIS 2012.11.7UP

**Android4.1 向け5.1 サラウンド対応HE-AACなど
MPEG-DASH 適応型ストリーミングや
BBCと共同開発の会話音量最適化技術をデモ**

独フラウンホーファー研究機構(FhG)は、IT系の研究機関としてドイツ国内に60の研究所を含む80の研究ユニットを持つ民間の研究機関だ。その範囲は幅広く、建設技術からエネルギー、安全保障、メディカル、環境、ナノテク、さらには交通・ロジスティクスなど、さまざまな領域でソリューション提供、ライセンスビジネスを展開している。同機関の特徴は、民間ベースで企業や学校、他の研究機関などさまざまな連携を柔軟に行い、産業面での具体的な成果を数多く提供している点にある。

情報・コミュニケーション、特にデジタルメディアの分野でも、符号化技術や3D計測など、映像や音声に関する技術開発で、国際的に高い評価を受けている。



Magazine 

(株)ソリトンシステムズ 2012.11.7UP

**TBSと共同出展
モバイル映像中継製品
「Smart -telecaster」シリーズを出展**

■テレビ中継で実績を持つ
モバイル中継システム
ソリトンシステムズは、TBSと共同で出展し、同社のモバイル映像中継製品「Smart-telecaster」シリーズの「Smart telecaster HD」と、Android OSに対応した「Smart telecaster for Android」のほか、未発表の新製品を出展する。

スマートテレキャスターは、誰でも簡単にビデオカメラと専用のタブレットPCで高画質な映像を中継できるシステム。災害現場、救急医療、保守・メンテナンス、工事現場の進捗確認などにも利用が可能。FOMAなどの携帯電話回線の環境下でもスムーズで高画質なライブ中継ができる。インマルサットBGAN(Inmarsat Broadband Global Network)など、利用シーンに応じて最適な衛星通信サービスも提供している。



Magazine 

NEC 2012.11.8UP

**「Feel the "Innovation"」をテーマに
次期マスターシステムを含む
最新の映像ソリューションを展示**

NECは、「Feel the "Innovation"」をテーマに、次期マスターシステムや新型プロダクションスイッチャーなどの最新の放送ソリューションを展示紹介する。ブース(映像・放送関連機材部門 #5116)内のメインステージでは、第3世代の最新スタジオマスターシステムを中心に紹介する予定だ。

■メインステージでは、第3世代の最新スタジオマスターシステムを中心に紹介
NECでは、2003年の地上デジタル放送開始から10年が経過することによる、システム更新需要に対応すべく、第3世代となるスタジオマスターシステムを開発している。



Magazine RSS

アイティアアクセス(株) 2012.11.8UP

HEVC対応の映像品質評価ツールや Civolution社のセカンドスクリーン向けソリューション等を出展

アイティアアクセス(クロスメディア部門、#8305)は、映像・音声品質検査ソリューションとして、Interra Systems社のオフラインAVストリームアナライザ「Vegaメディアアナライザ」とリアルタイムメディアコンテンツ・モニタリングソフトウェア「Orion」を、またセカンドスクリーンソリューションとして、Civolution社の「SyncNow」を出展する。ブースでは、それぞれの商品のデモンストレーションを実施する。



■HEVCに対応したオフラインAVストリームアナライザ「Vega HEVCアナライザ」を初出展

Magazine RSS

インテル(株) 2012.11.8UP

映像編集向けに特化した BTO(Build To Order)パソコンのメーカー製品をデモ

インテルは、BTO(Build To Order)パソコンのメリットを生かした映像編集プロクリエーターに特化したハイエンドパソコンを展示する。映像の高画質・高精細化、クロスメディアへの対応といった制作素材の負荷が高まる中で、ネットワーク環境によるグループ制作が進みつつある映像業界の多様なワークフローに対応し、必要に応じてカスタマイズできるジョブブランドBTOパソコンのメリットを体験できる。



出展製品は、下記のインテル製品を搭載したBTOパソコンの各種。出展メーカーは、マウスコンピューター、サードウェーブデジノス、ユニットコム の3社。

(搭載製品)
第3世代インテルCorei7プロセッサ


Magazine RSS

シユア・ジャパン・リミテッド 2012.11.8UP

最新ワイヤレスマイク「ULX-D」、放送局・PA向け最高峰ワイヤレスマイク「AXT」を出展 自社セミナーで特定ラジオマイクの周波数帯移行を説明

Shure Japan (プロオーディオ部門 #4307)の今回注目の製品はデジタル・ワイヤレスマイク「ULX-D」と、放送局・PA向け最高峰ワイヤレスマイク「AXT」だ。

デジタル・ワイヤレスマイク「ULX-D」は、設備向けのワイヤレスマイクロフォンで、特にカンファレンス用途に適している。1chモデルは4月に発売しているが、今回新製品として2ch、4chモデルが登場する。B帯で30チャンネル同時運用を実現するHDモード、AES-256bit暗号化処理など、会議やスピーチに最適な先進テクノロジーが搭載されている。




放送局・PA向けワイヤレスの最高峰モデル「AXT」は、

Magazine RSS

(株)エーディテクノ 2012.11.9UP

広視野角のIPSパネルを採用した多機能マルチ入力7型フィールドモニターを出展 2K対応9.7インチフィールドモニターを参考出展

エーディテクノ(映像・放送関連機材部門 #5102)は、IPSパネルを採用した7型マルチ入力端子搭載の3G-SDI対応フィールドモニター「CL765SD / CL76HOX」を出展する。また、2Kに対応したIPSパネル採用の9.7型マルチ入力端子搭載フィールドモニターを参考出展する。IPSパネルは、TFTアクティブマトリックス液晶表示装置とも呼ばれ、視野角が広く、色度変移・色調変化が少ないのが特徴。放送業務用ビデオモニターやカーナビ、iPhoneに搭載されているRetinaディスプレイなどで採用されている。




Magazine RSS

(株)アサカ 2012.11.8UP

JPEG2000採用の放送局マスター向けビデオ・オーディオ・ファイリング(VAF)SSDサーバー「AVR-800/801PV」を出展

アサカは、映像コーデックにJPEG2000を採用した放送局のマスター向けVAF (Video Audio Filing) サーバーの新製品「AVR-800/801PV」を出展する。SSDでRAID1を構築し、動画で2時間、静止画10000枚、音声で5時間の記録が可能。最大で2系統の出力が可能。



このほか、同じく映像コーデックにJPEG2000を採用し、VAF、制作の2つの用途での利用が可能なAVファイル装置の新製品「AVR-802」、コンテンツの長期保存に適したブルーレイディスクライブラリ装置「AMIシリーズ」など、素材、コンテンツの保存・管理用の製品群を出展する。NHKアイテックが開発したアーカイブシステム「101/102/103」

Magazine RSS

(株)フックアップ 2012.11.8UP

Universal Audio社製品をはじめ Thunderbolt接続による制作環境をデモ

フックアップは、Antelope社との共同ブースで出展し、Universal Audio社の製品を中心にThunderboltにフォーカスした展示を行う。

Universal AudioのApolloはアナログ録音のサウンドと使い心地を追求したワークフローを備えた、高解像度プロフェッショナル・オーディオインターフェイス。



18イン×24アウト、FireWireあるいはThunderbolt接続、一切の妥協を排した本物のUAアナログデザインで、クラス最高峰の高音質24bit/192kHzでの録音が可能。さらに強力なUADプラグインをリアルタイムで使用できる。お好みのアナログエミュレーションをMac/Win両環境で実現できる。

また、別売のオプションでApolloとコンピューターをThunderboltで接続することにより、接続バスの幅が飛躍的に拡大し、Apolloの

Magazine RSS

(株)駒村商会 2012.11.9UP

国内初出展のエーデルクローン社製スタビライザー、DSRL用フォローフォーカスなど新規取り扱い製品含め多数の新製品を出展

駒村商会(映像・放送関連機材部門、#8214)は同社が取り扱うデジタルカメラ用スタビライザー、シネベース、レンズおよびレンズマウント、アインセラなどを出展する。なかでも9月から取り扱いを開始した「Edelkrone(エーデルクローン)」製品は同社が国内唯一の正規代理店として販売するもの。超軽量・超コンパクトなデジタル一眼レフカメラ用リグなどユニークな製品を紹介する。そのほか、シュナイダー製レンズなど実績と定評のある製品も豊富に展示する。



■エーデルクローン社のスタビライザーとフォローフォーカスを国内初出展 エーデルクローンの「The Pocket Rig(ポケットリグ)」

Magazine RSS

富士通(株) 2012.11.9UP

スカパー JSATの4K生中継実験でも採用 H.264で高画質化に対応したコーデックIP-9610を用いた4K伝送デモをアストロデザインと実施

富士通(映像・放送関連機材部門 #6408)は、InterBEE 2012で、同社のH.264のコーデックIP-9610を用いて4K映像のリアルタイム伝送デモを行う。



IP-9610は、高画質の素材伝送のコーデックとして、従来機のIP-9500から、さらに高画質化を図った製品として、昨年のInterBEEで初出展された。その後、4月のNABでもデモを行い、2012年から日本で販売をしている。


IP-9610は、422、10ビットに対応し、H.264で1080 60Pの伝送が可能。3G-SDI出力に対応することで、よりスポーツ中継などの動きに強い、1Uサイズでありながら、HD映像2つ分の

Magazine RSS

報映産業(株) 2012.11.8UP

デジタル映像制作のワークフローに沿った製品紹介 独自の組み合わせによる推奨スタイルや異機種比較展示も実施

報映産業(映像・放送関連機材部門 #8406)は、取り込みからアーカイブまでのデジタルワークフローを、新製品を交え、流れに沿って展示するほか、FilmLight社のノンリニアカラーグレーディングシステムの「Baselight」と新製品のプラグイン「Baselight for AVID」、AMS Neve社のコンソール「Genesys」などを出展。また、参考出展としてトプコン社の360度動画撮影システム「360VR Lite」も展示する。



■ワークフローに沿った製品展示
取り込み用として、Telestreamのビデオキャプチャー

Magazine RSS

オーロラライトバンク 2012.11.9UP

ミニ撮影スタジオでLED照明機器をデモ 新製品「オーロラ2000S LEDスポットライト 5500Kズーム機能搭載版」を発表

オーロラライトバンク(プロライティング部門 #8504)は自社ブースにおいて、ミニ撮影スタジオを設営し、同社の各種LED照明機器を、ブース天井に設置してデモを行う。



ミニ撮影スタジオでは女性アナウンサーが商品説明を行い、その模様を実際にカメラで映し、照明の効果を紹介する。照明効果は、モニタリングスペースで見ることもできる。


昨年度発表したLEDスポットライト2000Sに、新たにズーム機能を搭載した新製品を発表する。また、スポットライト5000

Magazine RSS

ライブギア(株) 2012.11.10UP

重量90gのK-array製「KZ10」ラインアレイスピーカーや100Wの低消費電力LED照明「LiZ」などステージを効果的に演出する音響・照明機材各種を出展

ライブギア(プロオーディオ部門 #4512)は、演劇やコンサート会場に用いられる音響、照明、ステージリフト製品などを幅広く展示する。なかでも注目したいのが、音響および照明機材の新製品だ。音響機材ではK-array「レッドライン」シリーズの新型スピーカー「KZ10」および「KR402」、照明機材ではLED照明の新シリーズ「LiZ」などを出展する。




■舞台上に同化し、その世界観を損なわないスピーカーシステム
K-arrayの「KZ10」は超小型ラインアレイスピーカーで、

Magazine RSS

(株)メディアキャスト 2012.11.10UP

データ放送で「収益を上げ」「視聴率を上げ」、さらに「安心安全」を確保するための3つのソリューションを提案

メディアキャスト(映像・放送関連機材部門、#5501)は、データ放送で収益を上げるためのソリューション「for Business」、データ放送を使った視聴率を上げるソリューション「for Interactive & MultiScreen」、安心安全ソリューション「for Emergency」の3つをテーマにした同社ソリューションを展示紹介する。



同社代表取締役の杉本孝治氏は今年のInterBEEの展示内容について、「今まではデータ放送の機材を中心にアピールしてきたが、今年はデータ放送で何ができるかをそれぞれのテーマに沿って提案する」と説明した。また、ケーブルテレビ事業者やローカル局などに対して「データ放送を使った視聴率を上げる事例や収益を上げる事例を通して、データ放送の自覚

Magazine 

Harmonic Japan 合同会社 2012.11.11UP

デジタル・コンテンツワークフローのソリューションを展示
素材伝送から高性能サーバー、マルチスクリーン対応トランスコーダーなど最新機器を紹介

Harmonic Japan (映像・放送関連機材部門 #7516) は、昨年引き続き Harmonic のデジタル・コンテンツ・ワークフローのソリューション展示を行う。

エンコードから収録、編集、トランスコード、送出、マルチスクリーンに至るコンテンツ制作と配信に関するエンド・トゥ・エンドのソリューションを展示する。

ブースでは、「コントリビューション/ディストリビューション&デリバリ」「プロダクション&プレイアウト」、「マルチスクリーン」の各ステージにおいて、Harmonic のワークフローを紹介。多彩な製品群が



Magazine 

(株)ケンコープロフェッショナルイメージング 2012.11.11UP

仮設スタジオでLED照明デモ
斜め移動可能なカメラサポート、白い壁に照射するだけで壁をグリーンバックにできる照明機材などを出展

■全灯、Camlight LEDライトによるスタジオ照明の提案

ケンコープロフェッショナルイメージング (映像・放送関連機材部門 #7302) は、グループのケンコー・トキナー、スリックと合同で出展。ブース内に仮設スタジオを設置し、すべての照明にCUKHing社製 Camlight のLEDライトを用いたスタジオライティングを提案する。

このほか、多機能カメラサポートシステムの「Matthews HD DCスライダー」、出力800/1200WのHMIライトヘッド「Dedolight HMI 1200」などの新製品を出品するほか、白い壁に照射するだけで、壁をグリーンバックにできる照明機材などを出展する。



Magazine 

スターコミュニケーションズ(株) 2012.11.12UP

米 TVU Networks 社製 TVU Pack の新シリーズを出展
900g 軽量化版、クラウド活用版、iPhone を送信機に使った中継などが登場

スターコミュニケーションズ(映像・放送関連機材部門 #5307) は、モバイル回線を使ってHD映像をリアルタイムに伝送する米 TVU Networks 社製「TVUPackシリーズ」を出展する。

TVUPackシリーズは、今まで技術的な面やコスト的な面で実現が不可能だった生中継を可能にする。複数の3G・LTE・4G・WiMAXなどのモバイル回線を同時に使用し、HD映像を高画質に伝送。常に変化する無線帯域を監視し、効率良くデータの分散処理を行う独自のInverse Stamux Technologyは、TVU Networks社が開発した技術。

この技術により、ワイヤレスモバイル回線



Magazine 

(株)タムラ製作所 2012.11.12UP

デジタルオーディオミキサーの新製品「NT880」やデジタルワイヤレスインターカムなど、テレビ局・放送局向けの音声機器やワイヤレス機器を出展

タムラ製作所(プロオーディオ部門、#4405)はテレビ局・放送局向けの音声機器やワイヤレス機器などを出展する。中心となるのは、高品質な音声システムを実現するデジタルオーディオミキサーのフラッグシップモデル「NT880」、局内のコミュニケーションシステムを構築するデジタルワイヤレスインターカムなど。

■音質向上に加え、安全性・操作性を高めた「NT880」
 新製品の「NT880」は音声の高速処理で



Magazine 

摂津金属工業(株) 2012.11.11UP

NATOが採用 伊GT LINE社製 完全防塵・防水仕様の軍用機器・電子機器輸送用トランクケースを出展

摂津金属工業(映像・放送関連機材部門 #5206)は、NATO軍に正式採用されているイタリアGT LINE社のエクスプローラーケースをメインに出展する。エクスプローラーケースは、デリケートな軍用機器や電子機器等を厳しい環境下で輸送できる完全防塵・防水仕様(IP67)のトランクケース。

このほか、昨年同様に、超軽量の19インチラックのキャビネットラックRNCシリーズ、高密度実装が可能なキャビネットラックRGCシリーズとベストセラー製品であるキャビネットラックRKCシリーズ、アメリカZERO社製19インチ機器搭載可能な耐衝撃型コンテナのウリアーケース、ZDR



Magazine 

(有)エヌティエフ 2012.11.11UP


「水中映像用LED照明・LEDライト」「水中用定点カメラ」「特注防水ハウジング」など、防水ハウジング・パーツ、防水・防塵機器を出展

防水ハウジング・パーツ、防水・防塵機器の企画・設計・製造・販売をトータルに行うエヌティエフ(映像・放送関連機材部門 #7512)は今回、業務拡大のために出展を行う。

主な出展製品は、「水中映像用LED照明・LEDライト」「水中用定点カメラ」「特注防水ハウジング」や、その他ワンオフ製品、開発品など。水中用LED照明は1000W/100000lmの大光量で動画の撮影に適している。

エヌティエフでは、長年築き上げた高度な自社設計と自社工場による製造を強みとして、顧客からの要望を具現化し、製品化を繰り返している。



Magazine 


NTTアドバンステクノロジー(株) 2012.11.14UP

高品質なTV会議システム向け軽量・低遅延なソフトウェアコーデック SDK を出展

NTTアドバンステクノロジーは、NTTブース(映像・放送関連機材部門、#6401)において、高品質なTV会議システム向け軽量・低遅延なソフトウェアコーデック SDK「HDVE-2005SDK/HDVD-2005SDK」を出展し、デモンストレーションしている。

■双方向のHD映像(1920×1080画素 30fps)を60msecの低遅延で伝送が可能

このソフトウェアコーデック「HDVE-2005SDK/HDVD-2005SDK」は、NTTメディアインテリジェンス研究所が開発したH.264ソフトウェアエンコード/デコーダを採用したソフトウェア開発キット(SDK)。特徴は、「ノートPCなどの高CPUを搭載していないPCで、双方向のHD映像(1920×1080画素)を伝送することができ、



Magazine 

NTTエレクトロニクス(株) 2012.11.14UP

MPEG-DASHに対応したトランスコーダ「HVX500シリーズ」やAVC/H.264 IPエンコーダ/デコーダ「MV5000シリーズ」出展


NTTエレクトロニクスは、NTTブース(映像・放送関連機材部門、#6401)において、新たにMPEG-DASH機能を追加した高機能メディアトランスコーダ「HVX500シリーズ」や高画質・低遅延なHD映像のIP伝送対応AVC/H.264 IPエンコーダ/デコーダ「MV5000シリーズ」を出展している。

MV5000シリーズは昨日(11月13日)に発表された製品だ。

■MPEG-DASHとHLSによるマルチスクリーン向け映像配信デモ

マルチプラットフォーム対応高機能メディアトランスコーダ「HVX500シリーズ」は、1つの入力映像ソースをさまざまな再生機器




Magazine 

エタニ電機(株) 2012.11.12UP

スピーカーの歪み測定が可能なオーディオ・サウンド・アナライザ装置「ASA-10mkII」や、便利な「アナライザ」アプリを出展
15日(水)にチュートリアル登壇も

エタニ電機は、オーディオ・サウンド・アナライザ「ASA-10mkII」やオーディオ・サウンド・アナライザのiPhone/iPod touchアプリ「ASA mini」などのオーディオ測定装置を出展する。ブース(プロオーディオ部門、#4612)では、「ASA-10mkII」やiPhone/iPod touchアプリ「ASA mini」を使った測定のデモを実施する。

■96kHz / 24ビットの解析が可能なオーディオ・サウンド・アナライザ「ASA-10mkII」



Magazine 


クオンテル(株) 2012.11.12UP


Pablo Rio, Enterprise sQ, QTubeの3製品にフォーカスを当て、独自技術やソリューションを紹介

Quantel(映像・放送関連機材部門 #5312)は、Pablo Rio, Enterprise sQ, QTubeの3製品にフォーカスを当て、Quantelのユニークな技術やソリューションを紹介する。今年のNAB、IBCでは「revolution not evolution」(改革)をテーマに、放送業界に革命をもたらす新しい製品やテクノロジーを発表しており、最新情報を含めた展示デモを行う。

■PCで動作するハイエンドカラー&フィニッシングシステム「Pablo Rio」が日本初登場



Magazine 


InterBEE TV 


ヴァンデン ジャパン(株) 2012.11.14UP


超小型リモコンカメラ付きのパン/チルトカメラシステム「Q-Ball」を展示

ヴァンデン・ジャパン(#5310)は、直径約11cmの球体で超小型パン/チルトカメラシステム「Q-Ball」を展示。重さは約1キロほど。光学10倍ズームレンズと2メガピクセルCMOSカメラセンサーを搭載する。

ヴァンデン・ジャパンはほか、最新のデジタルポータブルビデオカメラに対応し、無段階調整の完全バランス、LFドラッグシステム、2.4kgの軽量設計などが特徴のカメラサポートシステム「Vision blue 5」や、ワイヤレスのトランスミッター/レシーバー「ABHDRX」なども展示。



Magazine 


InterBEE TV 

オートデスク(株) 2012.11.14UP

編集・ビジュアルエフェクトが一体となった Autodesk Smoke を出展

オートデスク(#5616)は、編集・ビジュアルエフェクトが一体となったAutodesk Smokeを出展している。最新バージョンの2013では、UIとパフォーマンス、機能が大きく強化されている。コネクストFXは、従来のハイエンド向けの機能が搭載。535,500円という低価格で提供。12月に発売予定。直前のバージョンをデモしたり、ユーザーの事例を紹介。

世界で35,000もダウンロードされているプレ・リリース版についての情報も、Facebookやチュートリアルで提供している。



Magazine **InterBEE TV**

(株)サンミュージク 2012.11.14UP

Avidと共同ブースで音響と映像の融合製品を紹介

サンミュージクはAvidとの共同ブース(#4617)で、同社が販売するドイツ・ザイナブリック社の残響リバーブ除去/増幅用プラグインソフト「UNIVEL」を紹介している。Pro ToolのRTAS(アルタス)、AAV(Avid Audio eXtension)、VST(Steinberg's Virtual Studio Technology)などのフォーマットに対応している。

Avidは、Interplay PAM(プロダクション・アセット・マネジメント)の最新バージョンのなど、Avidのビデオ・オーディオ製品の統合と、メディアを最大限に活用し収益を促進するファイルベースのワークフローを紹介する。



Magazine **InterBEE TV**

(株)ニコンイメージングジャパン 2012.11.14UP

デジタル・フィルム一眼レフカメラ、フルHD動画対応でプロフェッショナル用途に適応

ニコンイメージングジャパン(#7307)は、デジタル・フィルム一眼レフカメラの新製品であるD800とD800E、既存のD4の動画機能(Dムービー)をアピールする。両製品とも、ニコンFXフォーマット、1920×1080/30pのフルHDに対応している。

特にD800シリーズは、インターフェースにはHDMIミニ端子を採用し、ボディ背面の液晶モニターと外部モニターに同時に表示でき、非圧縮動画を必要とするプロフェッショナルのニーズに対応。

また、D800シリーズに装着できる「NIKKORレンズ」(交換レンズ)も多数展示。



Magazine **InterBEE TV**

(株)府中技研 2012.11.14UP

自社開発のFM送信設備。緊急時の避難場所での放送も

府中技研(#6110)は、FM放送局向けの送信機、中継装置など、多数の自社開発製品を展示している。FM送信機・中継装置「SA300シリーズ」、周波数可変型コミュニティーFM送信機「SA-030-SS」、周波数可変型放送用ミニFM送信機「SA-001-SS」など。



Magazine **InterBEE TV**

(株)シバソク 2012.11.14UP

マルチフォーマット スタンダードコンバータ VC7シリーズを展覧

シバソク(#7202)は、テレビ用方式変換装置のVC7シリーズを展覧している。特徴は、動き補正を使うことで、フレーム数が異なる変換を行ってもジャギネスが発生しない。大幅に小型化(2U、7kg)・低価格化を実現している。ハンディタイプのため、中継先や撮影現場でも利用しやすい。



Magazine **InterBEE TV**

(株)昭特製作所 2012.11.14UP

最大搭載質量90kgに対応の大型カメラ用雲台を展示

SHOTOKU(#7207)は、リモートシステム、バーチャル機器、伸縮クレーン、ヘッド、ペDESTAL、小型三脚システムなどを展示。大型カメラ用雲台「SG900」は、最大搭載質量が90kg、剛性と使いやすさ、よりスムーズな動きを追求して開発された。ペDESTALは、エアシリンダーを内蔵し、よりスムーズな動きとバランス、静穏性を実現している。




Magazine **InterBEE TV**

銀一(株) 2012.11.14UP

ドイツのクロジール社「マルチケージプラス」のプロトタイプを日本初公開

海外製品を扱う銀一(#6208)は、HD化が進んだ新製品ステディカム(ステディカムタンコ、ステディカムゼファーHD)、新ブランドであるシネバート製カメラスライダ、クロジール製マルチケージプラス、ティフエン製フィルター、マール製モニターなど、多彩なカメラサポート&アクセサリ製品を展示している。クロジール製マルチケージプラスはプロトタイプ製品を参考出品している。



Magazine **InterBEE TV**

ソニー(株)/ソニービジネスソリューション(株) 2012.11.15UP

4Kカメラ「PMW-F55」のライブ映像デモを実演

ソニービジネスソリューション(#6211)は、4K、ファイルベース・ソリューション、ライブベースの3つを柱に展覧。新開発の4Kセンサーを搭載した4Kカメラ「PMW-F55」は、4Kライブ出力に対応。ブースのデモでは、4Kモニターにライブで出力している様子を紹介する。

スイッチャーは新商品のMVS-3000、6500と、従来機の7000Xを展示。3000と6500は、小型低価格化を実現した製品ライン。主にライブ用途の運用を想定しているが、6500は編集にも対応。7000Xは、スイッチャープロセッサを2台内蔵して、冗長性を持たせている。

1月に発売予定のIPライブ伝送システム。NXL-IP55。は、現場のカメラとサブのスイッチャーの間の効率性、便利さを実現。

1対で最大3台のHDカメラ映像、インカムなどのリターン伝送も可能。放送グレードの高画質と低遅延伝送を実現。



Magazine **InterBEE TV**

TVLOGIC 2012.11.15UP

LEDパネル搭載の高画質ディスプレイ「XVMシリーズ」を展覧

韓国のTVロジック(#7514)は、LEDパネルを利用した高画質ディスプレイの「XVMシリーズ」を展覧。17インチ、24インチ、32インチ、47インチの4種類ある。17インチモデルは3G対応しているが、今回はさらにバックライトの品質を向上させている。



Magazine **InterBEE TV**

エーティ コミュニケーションズ(株) 2012.11.15UP

移動しながら衛星を捕捉して通信を行う 自動追尾型フェイズドアレイアンテナを参考展覧

エーティコミュニケーションズ(#7301)は、日産エルグランドをベース車輻とした衛星通信車を2台展覧。2m相当の最新可搬型アンテナCCT200シリーズを日本国内で初めて展示。

車載型のアンテナCCT120システムは、ワンマンオペレーション、低公害、低消費電力、低燃費、低発熱を実現。パソコンを利用して、現場で即使用することができる。

参考展覧の自動追尾型フェイズドアレイアンテナは、移動しながら衛星を捕捉して通信を行うことができる。



Magazine **InterBEE TV**

ATENジャパン(株) 2012.11.15UP

HDMI信号8入力を8系統に出力可能なマトリックススイッチャー

ATENジャパン(#6310)は、ATENビデオブランド「VanCryst」の製品で、12月上旬に発売予定のHDMIマトリックススイッチャー、光ファイバーを使用したHDMI延長器などの新製品を展示。

さらに放送局送出システムなどでも多く活用されているマトリックスKVMスイッチャー、リモートからの遠隔操作が可能なOver IP KVMスイッチといったALTUSENブランド製品のデモも行う。



Magazine **InterBEE TV**

アルピクス(株) 2012.11.15UP

コンパクトな装置、容易にリアルタイムスーパーインポーズ

アルピクス(#6001)は、SDI信号一系統にスーパーインポーズする新製品「DVS-10S」を展示。ソフトウェア上でタイプしたテキストがリアルタイムに表示される。256×256ドットのロゴも表示可能。「DVS-109」は9チャンネル対応モデル。



Magazine **InterBEE TV**


キヤノン(株)/キヤノンマーケティングジャパン(株) 2012.11.15UP

C500にシネスタイルズームレンズを装着してデモ 参考出品で4Kディスプレイもデモ

キヤノンブースでは今回、HD機材から最新4K機材を取りそろえて展覧。一番の目玉はEOS C500に、キヤノンのシネスタイルズームレンズCN-E30-300mmを装着してデモ。特徴は、4K RAWの映像を出力できる点と、低い感度でも非常に鮮明な映像が撮れる点だ。

レコーダーにはアストロデザイン製の4K SSDレコーダーを使用。この映像の確認用に4Kディスプレイを参考展覧している。

会場では、多彩で充実したレンズ群を紹介するコーナーや、災害時の屋外報道などにも対応する放送用カメラシステムなどが展示されている。



Magazine **InterBEE TV**

ネットワークエレクトロニクスジャパン(株) 2012.11.15UP

SDI信号を非圧縮、またはJPEG2000をIPで伝送する新製品Nevion社「Ventura」を展示

ネットワークエレクトロニクスジャパン(#5614)は、Nevion社のVentura(ベンチュラ)光ファイバー、VikinX(バイキンス)マトリクスルーター、新製品の1RUサイズのタッチパネルLCD付コントロールパネル、Flashlink光ファイバー伝送装置、ビデオ&オーディオプロセッシング各種、SDH IP伝送キャリアクラス映像伝送装置などを展示。



Magazine **InterBEE TV**

メタルトイズ 2012.11.15UP

30秒でタイヤ交換可能なドリーや、軽量・小型で耐荷重200kgのドリー「ビートル」を展示

メタルトイズ(#5101)はブースで、レールとドリーに力を入れた出展を行っている。8個のエアタイヤにより車輪交換が一人でも30秒程度で簡単にできるドリーを紹介。

また、重量・サイズともにコンパクトなドリーの「ビートル」は、ボールの高さ調整が可能。また、レールは、折りたたんで運べる軽量さでありながら、耐荷重は200kgを越える頑丈さを持っている。



Magazine **InterBEE TV**

(株)新輝 2012.11.15UP

強力な自動追尾機能を装備したモザイク編集システム「ENTERTAINMENT 4D」をデモ

新輝(#7408)は、PVスタジオエンターテインメント4Dを出展。自動追尾のモザイクがけアプリケーション。自動追尾はモザイクをかけたい対象をコンピューターが解析して追尾しながら、モザイクをかける。対象物の移動や回転、ズームなどを自動でPCが解析し、手作業の負担を極限まで軽減する。

自動サーチに加えてマウスなどによる手動でのトレースへ切り替えることができる。自動・手動追尾はいつでも切替できるので、シーンに応じた適切な操作を実現します。



Magazine **InterBEE TV**

三信電気(株) 2012.11.15UP

携帯回線を利用したライブ映像伝送システム

三信電気(#7201)は、LiveU社の携帯回線を利用したライブ映像伝送システムを展示。LiveUシリーズは可搬性に優れた映像伝送装置で、独自のRFテクノロジーにより複数モバイル回線を同時に使用。安定した映像伝送を行う。

ニュース速報、スポーツ中継、天気予報、交通情報、移動中継(バイク、自動車、列車)、素材伝送などの中継に最適。



Magazine **InterBEE TV**

(株)JVCケンウッド 2012.11.15UP

4kワークフローの要となる4K2Kカメラレコーダーを参考出展

JVCケンウッド(映像・放送関連機材部門#8104)は、4K2Kカメラレコーダーを参考出展している。また、業務用液晶モニター、11月発売のカメラレコーダーなども展示している。

参考出展の4K2Kカメラレコーダーは、独自の次世代画像処理エンジン「FALCONBRID」(ファルコンブリッド)を搭載し、ハンディタイプで4K2K解像度をプログレッシブ記録可能。そのほか、地域を限定してワンセグ放送を行なうエリアワンセグシステムについても参考出展する。

ケンウッドブランドからは、新聞発の放送事業用4FSK連絡無線標準規格に準拠したVHFデジタル無線機(3機種)のプロトタイプを展示するほか、放送事業用連絡無線機IP遠隔制御システムによるネットワーク経由の通信システムを提案している。



Magazine **InterBEE TV**

(株)エス・シー・アライアンス 2012.11.15UP

IPオーディオネットワークの独自プロトコルで高速化したAXIA IPコンソールを出展

エス・シー・アライアンス(#4616)は、AXIAのIPコンソールを出展している。LiveWireと呼ぶ、IPオーディオネットワークの独自プロトコルを採用しており、これにより、イーサネットケーブル、カテゴリー6のケーブル1本で、リニアPCM音声(48kHz 24ビット)の音声信号を420ステレオ信号分送れる。

さらに、プログラムデータ、制御信号、時計信号も含めて送ることができる。これにより、設備更新時の施工コスト、工事期間の短縮、スタジオの省スペース化を実現することができる。



Magazine **InterBEE TV**

さくら映機(株) 2012.11.15UP

来春発売予定のノンリニアシステム「PRUNUS Zero」を出展 クロマキーなど映像の加工処理機能を大幅に強化

さくら映機(#7513)は、来春発売予定のPRUNUS Zeroを出展。既存製品のリアルタイム性と操作性をそのままに、加工の機能を強化している。より洗練されたデザインにしている点も特徴。OpenGLの3Dによる加工が可能。タイムラインをリアルタイムに実施できる。

カメラコントロール機能により、空間を自由に演出できる。クロマキーもリアルタイム処理ができるため、パラメーターの調整無しで即合成ができる。カラーコレクション機能では、4つの領域でパラメーターをリアルタイムで調整できる機能を装備している。




Magazine **InterBEE TV**

FS-NET(株) 2012.11.16UP

スケジュールリングによる音声発信が可能な音声合成アナウンスシステム「マイアナ」を出展

FS-NETは、音声合成アナウンスシステム「マイアナ」を出展した。株式会社エーアイの音声合成エンジン「エーアイ・トーク2」を採用。パソコン上でメールを打つ感覚でテキストを打ち込むと、自然な音声変換をする。「マイアナPro」(59,800円)はアナウンスをスケジュールリングできる。「マイアナMate」(48,000円)は、音声ファイルをUSBなどからプレイヤーで再生できる。



Magazine **InterBEE TV**

(株)コスミックエンジニアリング 2012.11.15UP

軽四輪で4カメラ4人乗りのHD中継車を実現「オートキャリー・ミニ」

コスミックエンジニアリング(#7306)は、小型軽乗用車を使用した中継車のシステム「軽四輪HDTV中継車 オートキャリー・ミニ」をデモしている。車の車種に関わらず、最大4カメラ、4人乗車のシステムがつけられる点の特徴。スイッチャーやミキサーを搭載して中継車として使用し、車からおろしてスタジオのサブシステムとしても使用できる。伝送系では、カメラアダプターシステムで光り伝送が可能。最大4カメラの中継システムを構築できる。車の大きな改造をすることなく、安価にシステム構築ができる。



Magazine **InterBEE TV**

(株)サークル 2012.11.15UP

会場で7mクレーン「SCORPIO'23」とバーチャルCGの合成デモを実施

放送機器のレンタルを行うCIRCLE(#6109)は、さまざまなカメラのリグやケースの販売を強化している。小型化するカメラに対応したケースなどの販売に力を入れている。ブースでは、同社のもう一つの事業である、特機請け負い業務の部門が提供する全長7メートルのカメラ用クレーン「SCORPIO'23」にCGバーチャル映像を組み合わせて、関連会社でバーチャル合成用CGを制作するアイドカが制作したCGとクレーンの動きが同期をとるという連動システムを構築。11月から販売。会場では、アイドカが制作したCGとの合成映像を見ることが出来る。



Magazine **InterBEE TV**

NextoDI Co., Ltd. 2012.11.16UP

メモリーカードのデータを簡単にバックアップできる「NVS-Air」を出展

Nexto DI(映像・放送関連機材部門、#6106)はメモリーカードバックアップ機器の「NVS-Air」を出展している。データを安全・確実にバックアップできるため、メモリーカードの使い回しが可能になる。バックアップしたデータは外付けのハードディスクに保存が可能。高額な大容量メモリーカードを大量に用意する必要がなくなるため、コスト削減につながる点をアピールしている。

■32GBのデータを5分程度で高速バックアップ
「NVS-Air」はNexto DIが従来から提供しているメモリーカードバックアップ機器「NVSシリーズ」の最新機種




Magazine **InterBEE TV**

アガイ商事(株) 2012.11.16UP

ドイツ・コボルト社製品、防滴仕様で小型軽量のライティングシステム「コボルトHMI」を展示

アガイ商事は、独コボルト社の全天候型HMI(メタルハライドライト)を出展した。突然の雨でも、電源が落ちることがないため、継続して撮影ができる。池袋オフィスでは、常時製品を試すことができる。




Magazine **InterBEE TV**

ウエタックス(株) 2012.11.16UP

ダイバー間で最大4人まで相互通話が可能な水中通話装置「SV-1200」を出展

ウエタックスは、水中通話装置「SV-220」、「SV-1200」を出展した。水中での作業ダイバーと船上での相互通話、および、ダイバー同士の通話を可能にした装置。ダイバーのフルフェイスマスクの下にマイクとスピーカーを設置し、陸上のアンプボックスからハンドマイクで話すことができる。ダイバー間も通話ができる。SV-220はダイバー2人まで、SV-1200はダイバー4人まで相互通話が可能。



Magazine **InterBEE TV**

カモ井加工紙(株) 2012.11.16UP

グレーチャートの作成も可能な撮影用万能テープ「mt foto」を出展

カモ井加工紙は、撮影用万能テープ「mt foto」を出展した。貼った後にはがしても糊が残りにくい。また、白・黒・グレーのテープを使ってグレーチャートとして用いることもできる。飛ばない白、露出標準のグレー、つぶれない黒の3タイプ3サイズを用意している。



Magazine **InterBEE TV**

ビジュアル・グラフィックス(株) 2012.11.16UP

サーバーソリューションを軸にファイルベースワークフローを紹介 音響ハウスの明治製菓・テープライブラリーの事例も会場でも

ビジュアル・グラフィックス(#7517)は、サーバーソリューションとしてEdit Share、WIRED SERVERを中心に、ファイルベースワークフローを最適化するシステムを紹介している。Edit Shareは、圧縮形、プロレゾDNxHDのデータを扱うのに適している。WIRED SERVERは、2K、4K、非圧縮の連番ファイルを高速に共有できるサーバー。共有された映像データをアーカイブするソリューションとしてthiDa2を提案。ブラウザから簡単にファイルサーバーの閲覧・検索・プレビューができる。音響ハウスの明治製菓・テープライブラリーの事例も会場でも紹介している。



Magazine **InterBEE TV**

ビデオトロン(株) 2012.11.16UP

2ch同時計測可能なラウドネスコントローラー「LDC-70HD/SD」を参考出展

ビデオトロンは、参考出展のラウドネスコントローラー「LDC-70HD/SD」、ムービーファイル装置「MF-70V」、アップコンバート機能付き3chカラーサーバー「CK-93HD」などを出展した。ラウドネスコントローラー「LDC-70HD/SD」は、回線映像などのSDI入力信号を自動でラウドネスコントロールした。2ch同時計測機能を搭載。二カ国語や5.1ch+Stereoも一度で計測できる。タイムコード指定値による自動ラウドネス計測が可能。また、音声リマッピング機能を搭載している。モジュールタイプの動画ファイル、ムービーファイル装置「MF-70V」は、ステーションマークやロゴマーク用の音声付きの動画や静止画を記録できるファイル装置。動画180秒、静止画1000枚、音声240秒まで記録できる。オプションで、容量を増設すれば、動画900秒、4000枚、音声1020秒まで記録できる。また、Vbus-74HCの管脚も対応している。



Magazine **InterBEE TV**

コモドマッティーナ(株) 2012.11.16UP

英国ミキシングコンソールメーカー ALLEN&HEATH 社製デジタルミキサーシステム「GLD」を出展

コモドマッティーナは、英国ミキシングコンソールメーカー ALLEN&HEATH 社のデジタルミキサーシステム「GLD」を出展した。本体ミキサー部分「GLD-80」、入出力のラック部分は、24in 12outの「AR84」、8in 4outの「AR84」の2台、合計で3つのハードから構成される。オーディオラックと本体のミキサーは、CAT5のイーサネット接続され、伝送システムも、一つのパッケージになっている。ミキサーは、最大でinput48、物理的なoutputが24、内部バスが20搭載されている。inputのプロセッシングとして、4バンドのパラメトリックEQ、コンプレッサー、リミッター、ディレイ機能を搭載。outputには、4バンドのパラメトリックEQ、グラフィックEQ、コンプレッサー、リミッター、ディレイ機能を搭載している。




Magazine **InterBEE TV**

ザハトラ・ジャパン(株) 2012.11.16UP

ACEの高機種となる新シリーズ「L」シリーズを世界で初披露。カーボン採用により軽量化を実現

ザハトラ・ジャパンは、新商品のace Lを発表した。世界でもInterBEEでのお披露目が初の出展となる。ace Mの上位機種と位置づけられる。カウンタースパンのメモリが2つ増え、0から7まで調整可能。また、水準調整部分にランプが点灯して暗がりでもわかりやすくなっている。素材はMのときのアルミからカーボンファイバーに変わり、これまで以上に軽量化されている。



Magazine **InterBEE TV**

ヒビノ(株) 2012.11.16UP

JBL社製ラージサイズのラインアレイスピーカー「VTX」シリーズを展示

ヒビノ(#4308)は、JBL社製ラージサイズのラインアレイスピーカー「VTX」シリーズを出展している。「VTX-V25」は、3ウェイのラインアレイスピーカーと「IV25」対になるサブウーファーとして「VTX-S28」をデモ。VTXシリーズは、高域部分に、D2ドライバーを採用。2つのコンプレッションドライバーを単一の筐体に結合している。また中域は、RBI (Radiation Boundary Integrator)を採用し、高域と中域を歪みなく滑らかに統合する。概観は、1キャビネットあたり82.5kgとコンパクト。S28は、18インチのユニットが2つ搭載されており、カーディオイド、かつカーディオイドアレイに構成できる。VTXのアンプとして、同グループのアムクロン社製DSP内蔵アンプを用意。また、VTXシリーズの最良の音を引き出すためのプロトタイプスピーカーによるトーンコントロールも展示している。



Magazine **InterBEE TV**

ユアサ工機(株) 2012.11.16UP

15mの高さまで対応する中継車用油圧式伸縮ポールシステムを出展

ユアサ工機は、油圧式伸縮ポールを発売。会場では、障害物を避けるために、伝送用のパラボラアンテナを装着した製品を出展。リモコンによって、ポールの伸縮の調整、および、アンテナの旋回/角度調整(パン・チルト)が可能。最大15mの伸縮が可能。民放、NHKなど多くの放送局が採用している。



Magazine **InterBEE TV**

スチューダー・ジャパン・ブロードキャスト(株) 2012.11.16UP

可搬型放送向けコンソール「VISTA 1」を出展

スチューダー・ジャパンブロードキャスト(#4308)は、コンパクトで操作性の容易な放送用可搬型コンソール「VISA1」を出展。デスクが6レイヤーあり、ワンアクションですべてのレイヤー間を切り替えられる。フェーダーのスリットに色をつけた「フェーダー・グロー」を標準で搭載しており、8色を機能に合わせて設定できる。コントロールペイにも4つのレイヤーがあり、ワンアクションで切り替え可能。モニターセクションも、上位機種種のVISTA5と同様、16のモニターセクター、ラージモデルの切り替えが可能。5.1にも対応。ジングルプレイヤーを標準で装備しており、USBポートからWAVファイルを8個のボタンを割り当て、「本だし」ができる。



Magazine **InterBEE TV**

ティアック(株) 2012.11.16UP

自社製CDドライブを搭載した放送業務用CDプレイヤー、ノイズフィルターを搭載したパワーディストリビューターAV-Pシリーズを出展

TASCAMは、放送業務仕様CDプレイヤー「CD-9010 SYSTEM」を出展。耐久性、運用効率、操作性、高音質を高いレベルでバランスした放送用CDプレイヤー。自社製のCDドライブを放送業務用にチューニングして搭載している。新製品のパワーディストリビューターAV-Pシリーズは、従来公表だったAV-Pシリーズを国内専用の機能を搭載している。電源プラグの差し込み極性チェッカーを搭載し、本体で確認できる。ロングボディアール径290mm以上で、ラックに組んだときにも使いやすい。新機能として、2モデルにUSBポートを前に二つ、後ろに一つ搭載し、USBからの電源供給が可能。全製品に、ラインのイズフィルター、共通の電源ノイズ抑制機能も搭載している。




Magazine **InterBEE TV**

リーダー電子(株) 2012.11.16UP

最大12時間のラウドネス測定が可能なオーディオモニター LV5838を出展

リーダー電子は、オーディオモニターLV5838を出展した。オーディオコンソール、マスタ監視用オーディオモニター。測定信号は3G/HD/SD-SDIに重畳された音声信号、またはAES/EBU信号。ラウドネス測定を最大12時間監視可能。時間変位をチャート上で表示できる。ロングターム、ショートターム、モーメントリーの3つのモードの値を表示できる。表示機能は、ラウドネス測定表示をはじめ、レベル計表示、リソース表示、サウンド表示、音声ステータス表示を単独または組み合わせで表示することが可能。入力、SDI、AES/EBUの両方に対応。AES/EBUでは物理的な信号の振幅レベルを確認できる。イーサネット出力、リモート操作も可能。また、ラウドネス測定表示も可能。また、ラウドネス測定表示も可能。



Magazine **InterBEE TV**

リマージュジャパン(株)/Qumu, Inc. 2012.11.16UP

Blu-layのコピー機能を搭載したオンデマンド光ディスク作成機「Producer IV 8200N」と企業内ビデオ配信ソリューション「QUMU」を出展

リマージュ・ジャパンは、4ドライブを搭載したオンデマンド光ディスク作成ソリューション「RIMAGE Producer IV 8200N」と、企業向けビデオストリーミングソリューション「QUMU」ビデオコントロールセンターを出展した。「RIMAGE Producer IV 8200N」は、産業用光ディスクパブリッシングの標準機ともいわれるRIMAGE Producerシリーズ最高峰の製品。4基のドライブを内蔵し、新たにブルーレイディスクの製造能力が向上している。新機能として、ブルーレイのコピープロテクト機能「Blu-Loc」を搭載。また、盤面印刷用に熱転写のプリンターを内蔵し、光沢があり、傷に強いのが特徴。また、ディスクの品質も向上している。



Magazine **InterBEE TV**

ローデ・シュワルツ・ジャパン(株) 2012.11.16UP

世界初、HDMI対応の4K60fps非圧縮ビデオカードを展

ローデ・シュワルツ・ジャパンは世界で初めて、4K2K非圧縮信号(最大60fps)を出力するHDMIのビデオカード「DVS Atomix HDMI」を発売した。2010年からローデ・シュワルツ・グループの傘下となったDVS社の製品。従来、SDIで4K出力があったが、HDMIとしてはこれが初めて。

PCベースのビデオカードにHDMI端子を装備しており、HDMI 1.4bフォーマット対応のHDMI出力コネクタが4系統ある。拡張ユニットにより、HD-SDI 4系統の入出力が可能。4K2K画像を4分割したHDTV解像度の信号を同時に出力できる。

HDMIのバージョン1.4は3840×2160、4096×2160の解像度をサポートし、Ethernetの伝送に対応している。また、3D映像の伝送にも対応している。




Magazine **InterBEE TV**

営電(株) 2012.11.16UP

V-Lowマルチメディア放送システムを出展
リアルタイムエンコーダーから変調器までをシステム提案
緊急放送の切替にも対応

営電は、V-Lowマルチメディア放送システムを出展。アナログの空きチャンネルを利用したデジタルラジオの放送を行う。エンコーダーから変調器までシステムを揃えている。音声をリアルタイムエンコーダーでトランスポートストリーム(TS)に符号化し、LANを経てIP伝送装置でDVB ASIに変換し、デジタル・ラジオ・ステーション「model 3561B」変調器でデジタルラジオ信号に変調し、防災ラジオ受信機で受信する。

緊急放送として、デジタルラジオステーションで、緊急放送に切り替えることで、地震や津波の警報を防災ラジオで受信できる。



Magazine **InterBEE TV**

(株)キャンピングワークス 2012.11.16UP

ハイエース用車載発電機「Gstream2800i」を出展

キャンピングワークスは、車載用発電機「Gstream2800i」を出展した。ハイエース専用。

AC100V28Aの出力で、インバーター制御の正弦波の出力ができる。小型・防音型。

ハイエースの床下のスペアタイヤの位置に発電機を取り付け、横にマフラーを設置。出力制御のインバーターユニットは車内にとりつける。ステンレスで作成したスペシャルマフラーは錆に強いオリジナル製品。室内には発電機設備がなく、室内を有効に使える。



Magazine **InterBEE TV**

(株)ストロベリーメディアアーツ 2012.11.16UP


軽量・仮設型LEDディスプレイ「SMA LED Series」の各種製品を出展

ストロベリーメディアアーツは、軽量・仮設型LEDディスプレイ「SMA LED Series」の各種製品を出展した。

ドットピッチが18mmの「SLIT VISION 18」、9mmの「SLIT VISION 9 Bio」、6mmの「Black hole 6B」のラインアップを展示。

9mm「SLIT VISION 9 Bio」は、室内用、屋外用の2機種。参考出展として3.75mmの「パネル」も展示。各種とも、独自開発による特殊なコーティングによる低反射で鮮明な映像を映し出せる。

また、同社ではテレビの再掲によるモアレ防止フィルターを開発している。



Magazine **InterBEE TV**

(株)アスク 2012.11.16UP

低価格で接続が容易な英GB Labs社製ネットワークストレージ「Space」を出展
12:30から製品デモを実施

アスク(8407)は、英国GB Labsのネットワークストレージ「Space」を出展している。高速な共有ストレージ。アスクのブースのすべての端末、AJAの各種の端末をすべてSpaceに接続して共有している。

SpaceSSDは、通常のギガビットイーサネットワークで接続。ドライバーも、追加のソフトも必要なく、Mac、Windows上でIPアドレスを入力すれば、簡単に素材の共有・再生ができる。

キャプチャー、編集も簡単にできる。SANなどの高価なシステムと比べて、接続性、操作性、価格面で優れている。



Magazine **InterBEE TV**

(株)アルフレッドコア 2012.11.16UP

コンテンツ配信のソリューション「ALF STREAM」を出展

アルフレッドコアは、2007年に創設した会社。スマートフォンなどのマルチデバイスにコンテンツ配信をするためのバックグラウンドシステム。生ライブの映像ソース、ビデオデータをアップロードすると、自動的にエンコード、トランスコード、セキュリティをかけて配信できる。配信状況を解析することができる。

コンテンツ購入サイトや会員管理のシステムもセットで提供。ポータルにアクセスするためのスマートフォンアプリも提供。IPTV対応、PC対応、スマートタブレット対応、iPhone対応、Android対応が可能。Android 4.1以降のFlashが使えないケースでもFlashを再生できるプレイヤーを提供している。



Magazine **InterBEE TV**

(株)フェアウェイ 2012.11.16UP

インターネット放送システムを提案。
モバイルセットトップボックスなど
テレビに出力するための専用端末を展示

フェアウェイは、インターネットを用いたモバイル向けの映像配信を、テレビに転送して出力するための専用端末「mobile set-top box」を出展した。アプリ本で1チャンネルとして、アプリ上から好きな放送を選べば、モバイルで受信している映像をテレビに転送して見ることができる。



Magazine **InterBEE TV**

(株)プラットイーズ 2012.11.16UP

映像コンテンツ情報ナビゲーションアプリ「エラベラー」を出展

プラットイーズは、映像コンテンツ情報ナビゲーションアプリ「エラベラー」、視聴率・総合分析ツール「REPOMO」、CATVユニバーサルポータル「おすすめ番組情報サービス」を出展した。

映像コンテンツ情報ナビゲーションアプリ「エラベラー」は、12月末にオープン予定。有料放送などの非加入者にも魅力のある番組を紹介し、視聴方法を分かりやすく説明することで加入を誘導する。

番組情報は毎月100本。チャンネルをまたいでさまざまな番組を紹介している。SNSで共有することも可能。カレンダーに登録して視聴のリマインドをすることも可能。

Facebookのページもオープンしている。リモコン機能を持ち、チャンネルロゴを選ぶことで番組を視聴できる。



Magazine **InterBEE TV**

(株)ヴァレージアイランド 2012.11.16UP

蘭Dektek社製RFキャプチャー「DTA-231」、
仏AVIWEST社製中継用伝送装置
「デジタル・モバイル・ニュース・ギャザリング」を出展

ヴァレージアイランドは、オランダDektek社のRFキャプチャー「DTA-231」と、仏AVIWEST社の中継用伝送装置「デジタル・モバイル・ニュース・ギャザリング」を出展した。

地上デジタル放送の、RF信号を記録できる。通常は200万円~300万円程度ですが、キャプチャー機能を搭載して20万円以下で販売。

仏AVIWEST社の中継用伝送装置「デジタル・モバイル・ニュース・ギャザリング」は、カメラに搭載型。ニュースギャザリング用にSIMカードを8つ搭載でき、3G、LTEなど複数の回線を使用して中継ができる。各種のオペレーターを組み合わせることで安定した素材伝送が可能。有線LAN、無線LAN、モバイルも可能。



Magazine **InterBEE TV**

(株)エムアイセブンジャパン 2012.11.16UP

PreSonus デジタルミキサー
「StudioLive」ファミリーを出展

エムアイセブンジャパンは、テーマを「ライブサウンド、DAW、MAD」とし、PreSonus、Solid State Logic、Quantecの3ブランドを展示したハンズオンを実施した。

PreSonus社製品では、「StudioLive」ファミリーに加え、近年高い評価を得ている64Bit DAW「Studio One」などライブ&DAWソリューションを展示。いずれも、ライブ・サウンド、ライブ・レコーディング、スタジオ・ワークのすべてに必要な機能性を備えた、ハードウェア/ソフトウェア統合デジタル・ミキシング&レコーディング・システムとなっている。「StudioLive」ファミリーでは、「StudioLive 24.4.2」、「StudioLive 16.4.2」、「StudioLive 16.0.2」の3機種を出展。特徴は、3機種ともオペレーションの形態が同じ。アナログミキサーを使う感覚で使用できる。パソコンをつなぐことで、スマートモジュールがアド・オンで追加可能。オーディオインターフェースも可能。



Magazine **InterBEE TV**


(株)メディアグローバルリンクス 2012.11.16UP

IPビデオルーティングシステム「MDX2040」を出展

メディアグローバルリンクスは、IPビデオルーティングシステム「MDX2040」を出展した。放送局で進むファイルベースのワークフローでファイル素材が急増している中で、ベースバンド、TSストリーム、MXFファイル等の様々なコンテンツを一元的に取扱う事のできるIPビデオルーター。

各端末装置からベースバンドを入力でき、IPビデオルーターがコア装置となる。IPルーティングシステム内で、プライオリティを付けた制御ができる。最優先としてベースバンド信号を優先し、ファイル信号に7段階の優先順位をつけることができる。

データ流量やファイル転送を可視化し、端末装置でレベル調整機能、FS機能を持つ。100%帯域保証の安定したネットワーク構築が実現できるほか、運用のワークフローを効率化、トータルコストを削減する。




Magazine **InterBEE TV**

(株)九州テン 2012.11.16UP

技術適合基準を日本で最初に取得した
エリア放送ワンセグ送信機「QT-AOS」を出展

九州テンは、エリア放送ワンセグ送信機「QT-AOS」を出展した。技術適合基準を日本で第一号に取得し、さまざまなイベントや観光案内などのサービスに提供。会場では、放送用コンテンツをSDカードメモリーに記録。商用に向け、ネットワーク機能を付加し、出力機能をさらに強化する計画だ。



Magazine **InterBEE TV**

(株)光研 2012.11.16UP

iPhone用レンズアダプターによる撮影のデモを実施

興和グループの光研は、iPhone用レンズアダプターによる撮影のデモを行った。また、新製品のパネル型HDMI用ツイステアケーブル延長器「KE101PT/KE101PR」を出展した。電設ボックスに埋め込むことができる。本体がコンパクトで設置場所などでスペースをとらない。会議室や教室などでのシステムアップにも活用できる。




Magazine **InterBEE TV**

(株)創朋 2012.11.16UP

HDDから自動的に光ディスクによるアーカイブを構築するNet Ars-Qと搭載ソフト「群衆」をデモディスクの盤面印刷も同時に実施

創朋は、光ディスクへのアーカイブシステムNet Ars-Qと、同システムに搭載したソフト「群衆」を出展した。エプソンのパブリッシャーを用いて、HDD内のデータを随時、光ディスクにアーカイブし、同時にディスクの盤面に印刷をしていく。差し込み印刷で盤面に日時、通し番号、IDなどを記録していきける。創朋 (#7504)



Magazine **InterBEE TV**

池上通信機(株) 2012.11.16UP

Exceeded Technologyをテーマに多彩な最新機器、参考出品製品を出展

池上通信機は、テーマとして「Exceeded Technology」を掲げ、Camera System, Transmission (Wireless / IP Network), System, Monitors, FileBase Systemの5つのコーナーにおいて、多彩な先進の放送機器を紹介している。

入り口にあるカメラシステムの紹介コーナーでは、高画質・高信頼性を求められるUnicamHDのシステムカメララインアップをはじめ他、情報カメラ、次世代の情報カメラとして超高感度カメラなどをデモ。

3G対応フラッグシップカメラの「HDK-970A/AP」、HDK-970A/APのハンディタイプである「HDK-97A/AP」、16-bitフルデジタルHDTVカメラシステム「HDK-79GX」は、16-bitフルデジタルHDTVカメラシステム「HDK-55」は、いずれも新製品。



Magazine **InterBEE TV**

東京エレクトロン デバイス(株) 2012.11.16UP

ザイリンクス製リファレンスデザイン「リアルタイムビデオエンジン」とARMコア内蔵評価キットアプリケーションを出展

東京エレクトロン デバイスは、ザイリンクス製リファレンスデザイン「リアルタイムビデオエンジン (RTVE) OZ745」と、OMNI TECS社製ARMコア内蔵FPGAを使用したブロードキャスト向け評価キットアプリケーション「Zynq-7000」を出展した。

ザイリンクスのリアルタイムビデオエンジン (RTVE) を使用したリファレンスデザイン「OZ745」は、ベースにはザイリンクスのKintex-7 FPGAを使用した、KC705 評価キットを用い、SDI インタフェースカード、HDMI インタフェースカードの汎用的なボードを使ったリファレンスデザイン。4chの画像の拡大・縮小をリアルタイム、ブラウザソフトでできる。



Magazine **InterBEE TV**

(株)東陽テクニカ 2012.11.16UP

SDI 入出力搭載、タッチパネル方式のラウドネスモニター新製品「TM3-3G」を展示

東陽テクニカは、日本初登場の新製品、RTW社製ラウドネスモニター「Touch Monitor TM3-3G」を出展した。

エンベデッドオーディオに対応したSDI入出力タイプ。TM3は、もともとタッチパネル方式のディスプレイを採用。使用環境に合わせてラウドネスメーター、ピークメーター、数値メーター、スタート・ストップ・リセットボタンを自由にレイアウトできる。あらかじめ10個のパターンを本体に内蔵しているため、簡単にレイアウトができる。

オプションのエンベデッド・ソフトにより、SDI入力したデータをAES、アナログで出力できる。タイムコート・リーダーもオプションで導入可能。



Magazine **InterBEE TV**


共信コミュニケーションズ(株) 2012.11.16UP

厳選したソリューション製品を出展 NASを中核にしたマルチアプリケーション環境、4K高精細デジタルサイネージなどを提案

共信コミュニケーションズは、同社が扱う各種のソリューションから厳選した製品を出展。コンテンツ制作コーナーでは、AVID|ISIS5000、GB Labs社SPACEの2種類のNAS共有サーバーを中核に、Adobe、Apple、Autodesk、Grassvalleyなど、マルチアプリケーション環境を紹介。

プロダクション環境のインジェストシステム、テレストリーム社バイブラインシリーズでは、IBCで発表されたXDCAMコーデックに対応した新製品を出展。

また、4Kデジタルサイネージのコーナーでは、臨場感・実物感溢れる次世代映像設備をデモ。マルチディスプレイ表示にも対応したサイネージシステムとともに、超高解像度映像データの効率的なデリバリーを実現するソリューションを紹介している。



Magazine **InterBEE TV**


ANTELOPE AUDIO 2012.11.16UP

新製品のAD/DAコンバーター ECLIPSE384と、世界初1Uで32chを実現したAD/DAコンバーター ORION32を出展

Antelope Audioは、昨年発表した新製品のAD/DAコンバーターECLIPSE384と、ORION32を出展した。

ECLIPSE384は、キュー・ミックス機能を備え、オールインワンタイプのスタジオ・コアとなることを目指した製品。アナログ3系統AES3系統、SPDIF2系統、光2系統、USBなどが接続できる。モニター・スピーカーにはLarge、Medium、Smallまでの3つのユニットを接続できる。

ORIONは世界で初めて、1Uサイズで32チャンネルを実現したAD/DAコンバーター。アナログ入出力端子、D-SUB、デジタル入出力としてはADAT入出力端子を4基装備。オプティカル/MADI端子も搭載している。



Magazine **InterBEE TV**

カベラシステムズ 2012.11.18UP

新製品ライブ配信システム「Cambria Live Studio」、番組配信システム「Cambria Live Broadcast」を出展

カベラシステムズは、ソフトベースのオールインワンライブ配信システム「Cambria Live Studio」と、インターネット番組配信システム「Cambria Live Broadcast」の二つの新製品を出展。

「Cambria Live Studio」は、カーリナが開発したSiカメラとインテグレーションをして、ライブでキャプチャーをしてライブ配信を行える。キャプチャー素材Siカメラからのビデオ入力信号以外にDVIキャプチャー、素材ファイルの入力もできるので、ライブ配信中にビデオ入力素材からファイルに切り替えて配信ができる。出力設定は、ライブ配信中にファイル出力やUSTREAM、YouTubeライブへのアップロードが可能だ。

USTREAMからの正式な認定を受け、USTREAMが推奨するエンコードシステムとして販売している。

「Cambria Live Broadcast」は、1Uサイズの番組配信システムで、番組配信の効率化を実現している。



Magazine **InterBEE TV**

日本通信機(株) 2012.11.16UP

災害時等にマスター設備へ簡易に設置 必要最低限のデジタル放送を可能とする地上デジタル非常用中継送信機

日本通信機は、可搬型の地上デジタル非常用中継送信機を出展した。オールチャンネルの送信変換、受信変換、OFDMの変調器、ルビジウム発振器を搭載している。放送局の通信に障害が発生したときに代替できる。



Magazine **InterBEE TV**

パナソニック(株)/ パナソニックシステムソリューションズジャパン(株) 2012.11.16UP

P2HDの新製品 メモリーカード・カメラレコーダー AG-HPX600を展示

パナソニックグループ(#7308)は、「Link together Link to the future ~Evolving AVC-World~」をコンセプトに出展。P2HDシリーズ、AVCCAM、HDシステム機器を中心に、IPネットワーク連携で実現する、放送・業務用AV機器の将来像をご提案する。

「P2HD」シリーズの新製品として、メモリーカード・カメラレコーダー AG-HPX600を展示している。このほか、「AVCCAM」シリーズとしては、メモリーカード・カメラレコーダー AG-AC90ほか多数のソリューションを紹介している。レンズマウントを2/3にすることで、従来のレンズの資産を活用できる。新型のボディで重量は3kg以下を実現している。



Magazine **InterBEE TV**

タックシステム(株) 2012.11.18UP

チャンネルごとにマトリックスの設定が可能な新製品のMADIコンバーター「ANDIAMO 2シリーズ」を出展

タックシステムは、ProTools、AVID関連機器を中心に展示。周辺機器の新製品として出展した、MADIコンバーター「ANDIAMO 2シリーズ」は、各種の入力を出力に対してチャンネルごとマトリックス設定できる製品。

また、スタジオコントロールシステムとして、キーボード、マウス、ディスプレイの切り替え変調、マトリックス用の装置。一つのキーボードで複数のパソコンの間を行き来してコントロールできる。無制限の台数のPCを選べるマトリックスにも対応する。



Magazine **InterBEE TV**

ヤマハ(株) 2012.11.18UP

25年の技術・ノウハウを結集したデジタルミキサーの最新製品CLシリーズを出展

YAMAHAは、デジタルミキサーの最新の商品であるCLシリーズを出展。これまでの25年間のヤマハのデジタルミキサーの技術を結集した製品として、操作形態はタッチパネルで直感的な操作が可能。M7シリーズを踏襲。エフェクターでは、プレミアムラックと呼ぶ、ニーヴ社とコラボレーションした機能を搭載している。

NEXOの新製品としては、数百人から数万人規模のイベントに対応できるSTMシリーズを展示。取り回しが簡単で、ワンマンリングとして、一人でつり下げ、グランドスタックの角度設定ができる。さらに、メインとベースをダブルアレーで2列に並べた大型システムやトリプルアレーの構築も可能。



Magazine **InterBEE TV**

(株)データダイレクト・ネットワークス・ジャパン 2012.11.18UP

**プロ用共有高速ストレージを展覧
編集アプリと接続しスムーズな環境を体感**

データダイレクト・ネットワークスは、米国のストレージベンダーとして、プロ用共有高速高性能ストレージを展示・デモしている。デモでは、MXFサーバーを各種の編集用アプリケーションを動作させ、各アプリ上で接続した動画編集の動作状態、管理状態を体感できる。

接続ストレージは、最新のSFA10K、SFA12Kなど。オンライン、オフライン編集がHD解像度でもスムーズに実施できる。



Magazine **InterBEE TV**

テクトロニクス 2012.11.20UP

**ドルビーのラウドネス補正機能を搭載した
ファイルベースビデオコンテンツ/
自動検証システム「Cerify SW」を展覧**

テクトロニクスが出展した、ファイルベースビデオコンテンツ/自動検証システム「Cerify SW」は、ファイルベースでコンテンツを納品する際、放送できる状態かどうかを検証する。ブラック、フリーズ、ラウドネス、PSEフリッカーの検査を行う。ラウドネスはドルビーのラウドネス補正機能を導入し、平均ラウドネスが高い場合、正しい値に補正したファイルを作成する。

新製品のTVシンクゼネレーター「SPG8000型」は、新たに電源を二重化し、ホットスワップが可能。プラグインの電源ユニットにより、マスターが落ちたときにもスレーブに切り替えることができる。本体の電源を落とすとことなく、ユニットを差し替える事が可能。

ポータブルタイプのコンパクト波形モニター「WPM」は、6Mhzから108Mhzまで対応している。



Magazine **InterBEE TV**

(株)日立国際電気 2012.11.20UP

**V-Low マルチメディア送信機で
90Mhz-108Mhz 帯のデジタルラジオ放送をデモ
電力増幅器の小型・高性能化を実現**

日立国際電気は、V-Low マルチメディア送信機を出展。アナログテレビ放送の跡地を利用した新しいデジタル放送システムだ。デモでは、VHFの1-3チャンネルに相当する90MHz-108MHzの帯域で新たなAM-FMラジオのデジタル放送、道路情報、防災情報を行う展示をしている。400Wの電力増幅器(PA)を3台使用し、1.2KWまで増力して放送している。地上デジタル放送の当時では、同じサイズで300Wの大きさでファンを内蔵できなかったが、今回のPAは、小型化が実現しファンを内蔵し、1個のPAで400Wを実現している。



Magazine **InterBEE TV**


(株)ラグナヒルズ 2012.11.19UP

**シームレスな大規模映像を無制限複数表示可能な
スウェーデン DATATON 社製
プロジェクションシステム「WACH OUT」を展覧**

ラグナヒルズは、スウェーデンのDATATON社製シームレス・マルチプロジェクションシステム「WATCHOUT」を出展している。

マルチ・スクリーン・ディスプレイのためのシステムで、高品位なマルチ・イメージを最新コンピュータ技術によるデジタル・イメージ、ビデオ、グラフィックスと融合して表示する。大きなシームレス・イメージの表現が可能で、表示デバイスは、プロジェクター、LCDディスプレイ、プラズマ・ディスプレイなど、コンピュータと接続できるディスプレイ機器ならほとんど全てに対応する。

ビデオカメラからのライブイメージや、DVDプレーヤーなど外部からの入力のほか、各種の画像・映像ファイルに対応している。




Magazine **InterBEE TV**

(株)フォーラムエイト 2012.11.20UP

**クラウド型バーチャルリアリティシステム
「VR-Cloud」、6K サイネージシステムを展覧**

フォーラムエイトは、クラウド型バーチャルリアリティシステム「VR-Cloud」、6Kサイネージシステムを出展。6K解像度でバーチャルリアリティを表示できる。VRソフトの「UC-win/Road ver.8」は、騒音解析を行ったデータをVR上に反映させるデモを行っている。

VR-Cloudは、クラウド上で「UC-win/Road」をクラウド上で実現している。PC画面に映像を配信し、リアルタイムにコマンドをサーバーに送れる。低価格のPCでもVRが実現できる。最新バージョン4では、アンドロイドにも対応している。




Magazine **InterBEE TV**

DXアンテナ(株) 2012.11.21UP

**IPDC 技術による「デジタル伝送システム」、
業界初となる「ミリ波伝送システム」など
次世代の情報伝送ソリューションを多数展示**

DXアンテナ(映像・放送関連機材部門、#5508)はIPDC(IP Data Casting)技術を用いた「デジタル伝送システム」、ワイヤレスでハイビジョン放送信号を送ることができる業界初となる「ミリ波伝送システム」、高画質な「フルハイビジョン見守りシステム」、停電時対応機能を搭載した「ギャップフィラーシステム」など次世代の情報伝送ソリューションを多数展示している。

■同軸ケーブルでIPデータの配信が可能に
IPDC技術を用いた「デジタル伝送システム」は、



Magazine **InterBEE TV**

グラスバレー(株) 2012.11.21UP

**自社製品ラインアップで、撮影・インジェストから、
編集、送らまでのワークフローを紹介**

グラスバレーは、インジェストから素材収録、編集、送らまで一貫して自社製品で連携が可能。ブースでは、そのワークフローを紹介している。

CMOSセンサーを採用した「LDX」シリーズカメラSTRATUS(メディアワークフロー)EEDシステムは、今年のIBCで発表した製品。

CCDのスマアの欠点を補う新たなチップとしてCMOSを採用。CMOSの場合、従来は、カメラ・パンの際に生じるローリングシャッターの問題を、新たにCCDのフレーム読みだし機能を追加したことにより解消している点特徴。60pまで対応しており、感度60i、60pのいずれも同じ感度で撮影できる。

ファイルベースワークフローのコーナーでは、「EDIUSバージョン6.5」を搭載した新たなノンリニア編集ターニングシステム「HDWFS」を、ネットパソコンタイプまで出展している。



Magazine **InterBEE TV**

レッドデジタルジャパン(株) 2012.11.21UP

**iPad、iPhoneでカメラフォーカス等の
遠隔操作が可能なMIZLER MODULEを展覧**

レッドデジタルジャパンは、超高解像度カメラの周辺機器と本体を出展。小型・コンパクトで高解像度を実現。モジュラー式の構成により、撮影条件に合わせたコンフィグレーションが可能なのが特徴。破格の低価格で業界を覆す。

新発表として出展した「MIZLER MODULE」(マイズラー・モジュール)は、EPICカメラに装着。ワイヤレスでレンズのフォーカス、IBIS、ズームなどのコントロールが可能。iPad、iPhoneで操作可能。メディアへのRAWデータとProRESを同時に収録可能。6K製品も開発中。




Magazine **InterBEE TV**

(株)イメージスタジオ109 2012.11.25UP

**4本のケーブルで空中から自在に撮影、
光ファイバーでシステム制御を行うSpidercam
FIFA/W杯や世界のスポーツ・コンサート中継等でも採用**

イメージスタジオ109は、スパイダーカムを展示。2004年にオーストリアとドイツで開発されたカメラシステムだ。カメラが空間上を飛び回り、空撮のような映像を撮影できる。カメラは、4本のケーブル製のロープで移動する。光ファイバーでHD信号と制御信号を交信。ウィンチで調整している。高低、位置の調整などが可能。コントローラーを制御するパイロットとカメラマンで撮影を行う。6人のスタッフで撮影。水泳での水面を移動する撮影なども可能。パッケージでサービスを行い、日本でも実績を持つ。



Magazine **InterBEE TV**

マンフロット(株) 2012.11.21UP

**一眼レフカメラの動画撮影用サポート・リグの
新シリーズ「SYMPLA」を出展
世界初の電動式フォローフォーカスでカメラの
ISO、アイリス、色温度設定も可能に**

マンフロットは、新シリーズSYMPLAシリーズを出展した。一眼レフカメラによる動画撮影のためのサポート・リグ。会場では、MAT BOXや、望遠レンズサポートキットをデモしている。既存のリグは、複雑な装備が必要とされ、部品数も多数に及ぶケースが多いが、SYMPLAシリーズは、商品点数を少なくしてシンプルな製品構成を実現した。

MAT BOXは、ゴム製の蛇腹(じゃばら)を使用して、操作性が優れ、部分的な開閉が可能だ。大きな特徴は、他社がギア式の



Magazine **InterBEE TV**

Line 6 Japan(株) 2012.11.25UP

**タッチスクリーンで操作するミキシングシステム
「StageScape M20d」を出展
iPadによるリモートコントロールにも対応**

Line6 Japanは、ステージソースM20dスマートミキサーを出展した。プロのエンジニアだけでなく、ミュージシャンなど幅広い利用者を想定している。タッチスクリーンのユーザーインターフェースとエンコーダーで、ミキサー上のGUIで容易にステージ上のマイクのセッティングができる。

1台で、オールインワンとして用いることができる。24ビット48Kのマルチトラック・オーディオレコーダーや、コンピューターのオーディオインターフェースとして使用したり、Line6のスピーカーとのリンクも可能。




Magazine **InterBEE TV**

富士ゼロックス(株) 2012.11.27UP

**HDMI、DVIデジタル信号を、劣化なしで
最長1kmまで伝送する光伝送ケーブル2機種を展示**

富士ゼロックスは、4K対応の光DVI HDMI延長器を出展。アナログケーブルでの延長に対して、劣化なくDVI HDMI信号を最長1kmまで延長できる。デジタルをそのまま光に変換すると劣化がなく延長が可能。富士ゼロックスのレーザープリンターのレーザー技術を応用したものだ。



Magazine **InterBEE TV**

北海道日興通信(株) 2012.11.27UP

4K/8K対応のテロップシステム「CG-Store」を出版

北海道日興通信は、テロップシステム「CG-Store」を出版。昨年はHD対応だったが、今年は4K/8Kに対応する。同製品により、テレビのニュース番組のテロップを作成する感覚で簡単に映画用のテロップを作成できる。アストロデザインのボードを搭載しており、4KのテロップをSDI信号で出力できる。CG-Storeの送出アプリケーションは、項目ごとに50枚までテロップを蓄積可能。



Magazine **InterBEE TV**

カールツァイス(株) 2012.11.28UP

PL、EF、マイクロフォーサーズなど5種類のマウントに対応。15mm~135mm焦点距離のシネレンズ「コンパクトプライム2」シリーズ

カールツァイスは定評のある単焦点レンズ「コンパクトプライム」シリーズなどの従来品に加え、シリーズの新製品を多数出版している。新製品は来年以降、順次発売する。



■来年発売の最新レンズを展示
「コンパクトプライム」シリーズの新製品は「CP.2 スーパースピード T1.5」。レンズサイズは35mm、50mm、85mmがある。すべてのレンズにおいて筐体サイズを統一し、フォーカス/アイリスリングの位置が一定。シリーズ共通の高い光学性能、操作性を継承しながらコストパフォーマンスを向上させている。

Magazine **InterBEE TV**

シーティーシー・エスピー(株) 2012.12.4UP

米Elemental社のライブストリーミング製品を出版 GPUを用いて高速処理を実現

伊藤忠テクノソリューションズのグループ会社である、シーティーシー・エスピーは、米Elemental Technologies社のエンコーダ製品を出版した。Elementalは自社が開発したエンコーディング技術で、GPU(Graphics Processing Unit)を使って、複数同時に並列処理を行う技術を開発。これによりライブエンコーダではフルハイビジョンの画質の映像を同時に4チャンネル、トランスコーダでは従来のファイル生成時間に比べ、最大で10分の1の時間で処理が可能となり、ストリーミングシステムを構築するコストを大幅に削減することができる。Elementalの製品はハード・ソフトが一体化されたアプライアンス形式で提供され、Webインタフェースで操作が可能で難しい操作を一切必要ない。Elemental Live(高集約ライブエンコーダ)は、ストリーミングの用途に応じて選択できる。入力、出力、エンコード、ストリーミングの機能を統合した製品で、ストリーミングの用途に応じて選択できる。



Magazine **InterBEE TV**

(株)アイ・ディ・ケイ 2012.12.4UP

HDMI信号を100m以上伝送可能なソリューションを展示 デジタルサイネージの導入コスト低減・機器構成の簡素化をアピール

アイ・ディ・ケイは、同社の「HDMI Cat6 伝送ソリューション」のコーナーで、「HDMI Cat6 延長・分配器システム」を出版した。HDMI信号は通常、5mまでしか延長できないが、1:1で100mまで、7段階までのカスケード(デイジーチェーン接続)によって、各最大60mまで接続が可能だ。駅や空港における多数のディスプレイを用いた大規模なデジタルサイネージでの利用が可能。同システムを導入することにより、機器構成を簡素化するほか、導入コストの低減も可能。年末から年明けに向けてラインアップを増やしていく計画だ。



Magazine **InterBEE TV**

横河デジタルコンピュータ(株) 2012.11.28UP

放送エリアの電波状況、映像・音声を同時に監視する中継局監視システム「サテライトエリアPRUS+」を展示

横河デジタルコンピュータは、新製品のサテライトエリアPRUS+を出版した。中継局の監視システムは従来、電波の測定値だけを監視していたのに対し、新製品は、映像と音と電波の測定値をすべて監視できる。これまでは中継局に監視装置を設置していたが、放送エリアに監視装置を設置することで、一般回線を使用して伝送が可能になっている。チューナーユニットとレコーダユニットを分割することで、複数局での中継局でも、1台のレコーダで複数の局の監視が可能になり、導入コストを下げる事ができる。災害対策として監視システムの強化を検討している放送局へ向けて提案していく。




Magazine **InterBEE TV**

(株)エレクトリ 2012.11.29UP

既存システムに低価格で追加・拡張が可能な韓国SUNGJIN社製ワイヤレスインターカム

エレクトリは、韓国SUNJIM(ソンジム)社の2.4GHz帯を使ったワイヤレスインターカムを出版。親機も子機もコンパクトな形状のため、屋外でもコンパクトなシステム運用ができる点特徴。2.4GHzの他社製品と比べて導入コストが低い。親機には有線インターカムとのインターフェースがある。既存の有線インターカムのシステムと接続することで、既存のシステムにワイヤレスインターカムを追加できる。子機は、クリアカムのヘッドセットをそのまま利用できる。既存の資産を活用しながら、ワイヤレスシステムを導入できる。




Magazine **InterBEE TV**

平和精機工業(株) 2012.12.4UP

大型三脚の新製品「RSプラス」シリーズを出版 無段階カウンター・バランス、スタビライザー機構を搭載し操作性を大幅に向上

平和精機工業は、新製品RSプラスシリーズの「RSP-850」「RSP-750C」を出版した。RSプラスは、従来のRSシリーズと変わらない、ヘッドでマイナス40度からプラス60度まで変わらないパン・チルト、どの角度でも止められる無段階のカウンター・バランスシステムを搭載した大型・上位バージョン。スタジオ仕様のカメラやデジタルシネマ用の三脚として提供する。ロック解除をサイドからワンタッチで取り付け取り外しができる。パン・チルトのトルクの段階は、左手ですべて設定できる。従来の3段階から7段階になっている。カウンター・バランスのつまみは、カメラを支えるスプリングを調整するが、従来はだんだんスプリングの力が大きくなり、調整が難しくなっていた。RSプラスは、調整つまみを搭載することで、調整が容易になる。



Magazine **InterBEE TV**

MEDIAEDGE(株) 2012.12.5UP

4K映像のIPリアルタイム伝送をデモ 低価格のコンバーター新製品「Video Pro」シリーズなど各種新製品を初出版

MEDIAEDGE(メディアエッジ)は、4K映像サイネージシステムのコーナーで、4K 60p再生が可能なビデオプレイヤー「HDSS-4Km1」と、4K IP伝送が可能なネットワーク対応4Kライブ映像送信装置「MEDIAEDGE 4K Encoder」を出版した。会場では、カメラからのHDMI信号4本をエンコーダに取り込み、LANケーブルを通して、ネットワーク対応4Kライブ映像受信装置「MEDIAEDGE 4K Decoder」で受信した映像を表示するデモを行っている。ブースではこのほか、自動送出システム「MEDIAEDGE-APM」の最新バージョンを出版。ソフトをバージョンアップして、コンテンツのダメージ登録が可能になっている。16チャンネルスイッチにも対応する「MEDIAEDGE 4K Switch」の新製品も出版している。




Magazine **InterBEE TV**

(株)オーディオテクニカ 2012.11.30UP

楽器集音に適したサイドアドレス・マイクロホン「AT5040」を出版 4つのコンデンサーユニットを搭載し高感度マイナス20dbを実現

オーディオテクニカは、楽器の集音用のサイドアドレス・マイクロホン「AT5040」を出版した。通常のコンデンサーマイクロホンは、円形だが、同製品は、長方形のユニット(2マイクロホン)を4つつなげて感度を高めている。これは、レコーディングにおける最適な性能が得られることを想定した設計。標準的な円形ユニットの2倍となる、オーディオテクニカ史上最大のユニット搭載となる。通常の円形コンデンサーマイクは、マイナス40dbだが、「AT5040」では、マイナス25dbを実現している。マイクロホン本体からユニットを効率的に交換できる。




Magazine **InterBEE TV**

(株)計測技術研究所 2012.11.30UP

2K⇒4Kアップコンバーターを参考出版 2013年2月にリリースを予定

計測技術研究所は、超解像技術を採用した2K⇒4Kアップコンバーターユニットを参考出版した。大きさはA5サイズのコンパクトさを実現し、計測技術研究所が独自開発したの信号処理技術を採用している。超解像ユニットは、2013年2月リリースを予定。リリース前には評価機の貸出を実施する予定。



4K HDMI対応のコンパクト非圧縮レコーダ UDR-N50A。HDMI 4K一系統で出力が可能。会場ではHDMIケーブル一本で表示した。CANONのCINEMA EOS C-500のRAW収録にも対応している。非圧縮レコーダの提供は13年目になり、各種のラインアップをそろえており、4K/8K対応のラインアップをそろえている。

Magazine **InterBEE TV**

Rovi Corporation 2012.12.5UP

HEVCやソニー XAVC対応のコーデックSDKをデモ 分散エンコードに対応したTotalCode Enterpriseも出版

Roviは、標準的なコーデック、フォーマット、ストリーミングに対応した開発ツール「MainConcept CODEC SDK」を出版。新機能として、HEVC対応機能をアピールした。また、「MainConcept H.264 SDK Broadcast版」では、ソニーのXAVCに対応し、4Kのデコードもスムーズに処理できる。このほか、アプリケーションとして出版したサーバー分散型エンコーディングソリューションの「TotalCode Enterprise」は、複数サーバーへ分散してエンコード処理することで、マルチスクリーン、マルチデバイスに対応する大量のトランスコードへの対応が可能。同製品では、DivX Plus Streaming対応データの作成が可能。アダプティブストリーミング、トランスコード、マルチキャスト、ユニキャストに対応する。また、DivX Plus Streaming対応データの作成が可能。



Magazine **InterBEE TV**

ジャパンマテリアル(株) 2012.12.5UP

4K対応H.264コーデック カナダmatrox社製「Maevex」、HD-SDI信号4系統をHDIモニターで分割表示可能なマルチビューワーも出版

ジャパンマテリアルは、カナダmatrox社の新製品マルチビューワー「MicroQuad」を出版した。HD-SDI信号4系統をHDIモニターで分割表示できる。matroxの国内初展示のコーデック「Maevex」は、リアルタイムでH.264配信が可能。マルチキャスト、ユニキャストに対応。4スクリーンの同期をとることで、4K/2Kの映像配信が可能。



Magazine **InterBEE TV**

ハイパーツールズ(株) 2012.12.5UP

バンド幅730MHzに拡張したVGA分配器、EDIDをディップスイッチで設定できるDVI-VGA変換器を出展

ハイパーツールズは、映像・音声の延長・分配・切替・変換器の各種製品を展示した。

ハイエンドのVGA・音声分配器「SP-VS 102A」「SP-VS-104A」「SP-VS 108A」は、従来バンド幅が300MHz~350MHz対応だったが、730MHzまで対応している。2面に同じ映像を投影したデモを実施した。

新製品のEDIA内蔵のDVI-VGA変換器「CD-DV 101A」は、モニターのEDID、(Extended Display Identification Data、モニターの仕様・特性を示すパラメーター)の設定が、ディップスイッチによって設定ができる。




Magazine **InterBEE TV**

(株)よしみカメラ 2012.12.5UP

天体望遠鏡の制御技術を応用し、デジタル制御に対応した自社開発の電動ドリル「Samurai」を展示

よしみカメラは、微速度撮影用電動ドリル「Samurai」(サムライ)を出展した。

1年前から発売していたアナログ制御に加え、12月からデジタル制御の電動ドリル、タイムラプス機能搭載のドリルを出展した。特徴は、コンピューターによる制御が可能で、天体望遠鏡の制御技術を応用し0.1ミリピッチでコントロールが可能。価格は、海外製品は100万円以上するのに加え、水平部分で30万円。パンチルトを加えても50万円程度。



Magazine **InterBEE TV**

イメージニクス(株) 2012.12.24UP

デジタルサイネージで有効な映像のローテート機能を搭載したDVI/HDMIフレームシンクロナイザRS-1550Bを出展

イメージニクスは、DVI/HDMIフレームシンクロナイザRS-1550Bを出展した。従来のフレームシンクロナイザ、スキャンコンバーター機能に加え、ローテート機能、外部制御機能を搭載し、さまざまなマルチディスプレイ画面構成が可能になった。ユーザーが設定した解像度に全自動で解像度変換できる。

ローテート機能により、映像信号をリアルタイムで左90°または右90°に回転させることができる。これにより、デジタルサイネージなどで、薄型ディスプレイを「縦型」で設置する場合、パソコンやB.D.カメラ



Magazine **InterBEE TV**

(株)エム・アンド・アイ ネットワーク 2012.12.25UP

台湾データビデオ社製12入力対応スイッチャー「SE-2800」と最大700mSEC対応のオーディオディレイボックス「AD-100」出展

エム・アンド・アイ ネットワークは、台湾のデータビデオ社製HD/SDスイッチャー「SE-2800」と、オーディオディレイボックス「AD-100」を出展した。

「SE-2800」は、HD SDI対応12入力対応で、2画面マルチプレビューによる12画面表示が可能。12入力で135万円。8入力で108万円。

オーディオディレイボックス「AD-100」は、アナログ入力で最大700mSEC、12mSEC単位で設定できる。映像のデジタル化に伴い、音が出ない現象が多く、手軽に対応できる。



Magazine **InterBEE TV**

(株)須山歯研 2012.12.6UP

耳の型を採取して制作する個人用イヤーマニター「FIT EAR」で、アニソン視聴専用のシリーズ「萌音 Monet」を出展

須山歯研は、「FIT EAR」(フィット・イヤーマニター)のブランドで、耳の型を採取して個人にフィットしたカスタム・イヤーマニターを製作している。従来は、業務用に音楽ステージ用のイヤーマニターとして提供していたが、最近では映像制作の現場や、あるいは音楽鑑賞用へと用途が拡大している。

今回は、音楽鑑賞用の新たな試みとして、「アニソン専用」のFIT EAR「萌音 Monet」(もね)を出展した。業務用をベースとしており、広い帯域にフラットな特性を持ち、特に「歌」の視聴に適した設計となっている。社長の須山慶太氏は、萌音について次のように話す。「昔のアニソンは、音質も悪く、聴きにくい。今回は、最新のデジタル録音技術を用いて、高音質の音源を収録し、それをFIT EARで再生することで、聴きやすさを追求している。」



Magazine **InterBEE TV**

(株)芙蓉ビデオエイジェンシー 2012.12.11UP

新製品の32x32マトリックススイッチャー「DSR9130」「DSR9030」を出展 DINコネクター採用で1Uの小型化を実現

芙蓉ビデオエイジェンシーは、新製品の32x32マトリックススイッチャー「DSR9130」「DSR9030」を出展した。

「DSR9130」は、新たにDINコネクターを採用することで、大きさを1Uにおさえることを実現。奥行きも短くなっており、中継車など狭いスペースに適している。価格も既存機種より低価格化している。



Magazine **InterBEE TV**

(株)シンタックスジャパン 2012.12.25UP

Thunderbolt対応 最大390ch対応のMADI録音ソリューション「HDSPe MADI FX」を出展・デモ

シンタックスジャパンは、MADI(マディ)録音ソリューション「HDSPe MADI FX」を出展・デモした。

MADI (Multichannel Audio Digital Interface)は音声信号インタフェースの標準規格。AES/EBU規格をマルチ・チャンネル対応に拡張し、BNC端子と同軸ケーブルにより、125MBのデータ伝送を行える。サンプル単位の精度でマルチチャンネルの長距離オーディオ伝送を最もシンプルな手段で提供する。デジタル・オーディオ機器の増加や、マルチチャンネル化などへの対応を目的に規格化された。長距離伝送、設置コストの削減、全体的なメンテナンスの軽減などの効果がある。

AMS/Neve、SSL、ソニー、三菱とAES(Audio Engineering Society)の協力で開発された。MADI規格の標準規格。AES/EBU規格をマルチ・チャンネル対応に拡張し、BNC端子と同軸ケーブルにより、125MBのデータ伝送を行える。サンプル単位の精度でマルチチャンネルの長距離オーディオ伝送を最もシンプルな手段で提供する。デジタル・オーディオ機器の増加や、マルチチャンネル化などへの対応を目的に規格化された。長距離伝送、設置コストの削減、全体的なメンテナンスの軽減などの効果がある。



Magazine **InterBEE TV**

(株)テックス/(株)インテックス 2012.12.25UP

Retinaディスプレイを採用したオランダALPHATRON社製3.54インチビューファインダーを出展

インテックスは撮影機材レンタルの関連会社「株式会社テックス」と共同で出展。テックスが取り扱うTILTA、MOVICAM、3alityなどの各種リグを撮影スタイルに近い形で展示。リグ搭載カメラにはMTFのレンズマウント変換を取付けたPMW-F3や、ZUNOWの新製品ズームレンズのFZ16-28mmF2.8を取付けたPMW-F3、FUJINON製の新型レンズのZK4.7x19を取付けたEOS C500PLなどを展示した。

また、日本初登場の、オランダメーカー BRIGHT TANGERINE社のマットボックス「Misfit」、「VIV」、「Strummer」の3シリーズを出展した。

オランダALPHATRON製のレティナディスプレイを採用した3.54インチのビューファインダー「EVF-035W-3G」を展示した。



Magazine **InterBEE TV**

日本エレクトロ・ハーモニクス(株) 2012.12.11UP

名器 Fairchild Comp 670のレプリカ FairComp-670を出展 nokkoのアルバム・マスタリング音源をデモ

日本エレクトロ・ハーモニクスは、独自のMODE MACHINES社製コンプレッサー「FairComp-670」を出展した。60年代から世界の大手レコーディング・スタジオで高級機材として用いられ、「ヴィンテージ・コンプレッサー」と呼ばれた「Fairchild Compressor 670」のレプリカ。「Fairchild Compressor 670」は、20個もの真空管を用いたコンプレッサーで、実機は数少なく、現在でも市場取引価格3万ドル以上といわれている。

会場では、nokkoのアルバムマスタリングに使用した音源をデモした。忠実にFairchild Compを真似た作りで、ヴィンテージの真空管を使用している。(コンプレッサーとは、音の強さの差を縮小する効果がある。)



Magazine **InterBEE TV**

富士フイルム(株) イメージング事業部 2012.12.11UP

映画「脳男」で採用 現場での色管理システム「IS-100」「IS-100mini」複数モニター、カメラのマッチング機能を搭載

富士フイルム イメージング事業部は、デジタル映像撮影の現場向け色管理システム「IS-100」と「IS-100 mini」を出展した。「IS-100 mini」は参考出展。

IS-100は、撮影現場のモニターとポストプロダクションのモニター色管理を一致するシステム。IS-100miniは、撮影現場で用いられる複数台のモニターの「モニターマッチング」や、マルチカメラ撮影時の複数台のカメラの「カメラマッチング」機能を持つ。

IS-100はすでに、2013年2月9日公開予定のバイオレンスミステリー映画「脳男」(配給:東宝、監督:瀧本智行、主演:生田斗真)の撮影現場で使用されており、会場では「脳男」でのワークフローがパネル展示された。



Magazine **InterBEE TV**

(株)ファーストエンジニアリング 2012.12.25UP

ロンドン五輪で使用したエボライツ社製LEDコントロールサーバー「サファイア・タッチ」を出展

ファーストエンジニアリングは、ロンドン・オリンピックの開会式・閉会式で客席のLEDをコントロールしたエボライツ社製AIサーバー「サファイア・タッチ」を出展した。

また、世界で最も売れているエボライツのライティングコンソール卓、ステージ・シミュレーション用ソフト「Capture」、トラスにはリーダーライト社の最新LED機材を展示した。



Magazine **InterBEE TV**

(株)東通インターナショナル 2012.12.25UP

MOG社製MXFシステム「mxf SPEEDRAIL」とリアルタイム3DCG装置「Avid Motion Graphics」を出展

東通インターナショナルは、多くのメーカーにMXFツールをSDKとして供給しているMOG社のファイルベースインジェスト/アウトジェストシステム「mxf SPEEDRAIL」と AVID が NAB Show 2012 で発表した「Avid Motion Graphics 編集システム」を出展した。

「mxf SPEEDRAIL」は、ファイルベースのワークフローに必要な各コンポーネントを一つのプラットフォームに統合し、理想的なファイルベースソリューションを提供。これまで編集機を用いていたファイルベースの作業を効率化できる。従来の製品に比べ、ワンコーデックで2つのラッパーを同時に生成したり、2つのストレージに対して同時にファイル生成が可能。





話し手
Sound Designer
デニス バクスター氏

聞き手
有限会社沢口音楽工房 代表
沢口 真生氏

2012年は4年ごとに開催されるオリンピックの年。InterBEE初日に開催されたInter BEE Content Forum 2012では、オリンピック・イヤーにちなみ、「オリンピック大規模スポーツイベントの音声システム構築」と題したセッションが開催された。オリンピックは、世界最大のスポーツの祭典であると同時に、世界で最も複雑で高度な音声制作システム構築が必要とされるスポーツ中継だ。

デニス・バクスター氏は、ロンドン・オリンピックで、サウンド・デザイナーを担当。バクスター氏はNBCでオリンピック中継を担当した後に独立して、オリンピックをはじめとした大型スポーツイベントのサウンド・デザインを手掛けてきた。

これまで、アトランタ(1996年夏季)、シドニー(2000年夏季)、ソルトレイク(2002年冬季)、アテネ(2004年夏季)、トリノ(2006年冬季)、北京(2008年夏季)、バンクーバー(2010年冬季)、ロンドン(2012年夏季)と、8つのオリンピックのサウンドデザイナーを務めている。また、ワールドカップやNASCARなど数百のスポーツイベントのサウンドデザイナーを担当した経験も持ち、スポーツ番組のオーディオ技術などでエミー賞を5回受賞している。スポーツ中継、放送のサウンドデザイナーの第一人者だ。

セッションでは、ロンドン・オリンピックでバクスター氏が設計したサウンド・システムについて紹介し、イベントで実際に発生した問題点や、その解決策などを交え、スポーツ・イベントにおける多彩な演出技法を詳細に解説した。

聞き手の沢口真生氏は、NHKにおいてドラマのミキサーを務め、芸術祭大賞・放送文化基金賞・IBC ノンブルドール賞・パチカン希望賞など、国際的にも高い評価を得た数々の受賞作を担当。NHK在籍時から、サラウンド音声の開発に尽力し、AESを中心に数多くのワークショップ・セミナー・技術発表を行う。2003年には制作技術センター長に就任。サラウンド音響開発の論文では、AES、IBSよりフェローの称号を得たほか、JASでは「音の匠」として顕彰されるなど、国内外におけるプロオーディオの世界で広く知られるサラウンド音響の第一人者だ。2005年にNHK退職後は、パイオニアのオーディオ推進担当顧問を経て、東京芸術大学音楽環境創造学科で、サウンドデザインの教鞭を執るほか、自ら「サラウンド寺子屋」を主宰し、サラウンド技術の教育・普及活動に務める。このサラウンド寺子屋活動により、「AES JAPAN AWARD」(2009年)を受賞したほか、2012年12月には「サラウンドサウンドにおける、スピーカー配置の検証と、国内ガイドラインの設定」で日本オーディオ協会から協会賞を受賞している。

互いに世界のプロサウンドの第一人者である沢口氏とバクスター氏。インタビューで沢口氏は、サウンド・デザインの技術的な課題とともに、バクスター氏がサウンド・デザインという職業にこめた第一線のプロとしての思いを聞き出している。

オリンピック60競技 全種目の魅力をサウンドで引き出す

20年にわたり8回のオリンピック のサウンド・デザインを担当

沢口:「これまでにどのような経歴をお持ちですか」

バクスター:「放送業界のフリーランスエンジニアとして35年ほど従事しています。厳密に言えば、スポーツ放送です。フリーランスとして、世界を舞台として好きな仕事に携わせてもらっています。特に、オリンピック委員会との仕事は、20年ほど経ちました。オリンピックプロジェクトでサウンド・デザイナーとしてフルに稼働し始めたのは、アトランタオリンピック(1996年)からで、ソチで9回目となります」

沢口:「オリンピックでは、アナログから5.1サラウンドに至るまで多くの経験をお持ちですね。スポーツのサウンドを手がけたきっかけはなんですか」

バクスター:「私は、NBCの中継番組のミキサーに従事しており、ソウル(1988年)では、NBC放送の中継を担当していました。次のバルセロナ(1992年)から、新たにマネージング体制・組織が整えられ、フルタイムでオリンピック放送の仕事をはじめました。その当時、オリンピックの放送を担当していたManolo Romero氏を紹介されたのです。そのとき、これが自分にとって本当にやりたいことなのだと感じました」

「アトランタ(1996年)では、オリンピック委員会が放送を強化し、大勢のビデオライティング、サウンドなどのスペシャリストを集め、大規模になりました。テレビの視聴者やスポンサー企業も賞賛してくれました。その時の試みが、その後のオリンピック放送の標準となっています」

60種類にわたる競技の魅力を サウンドで引き出す

沢口:「当初、ご苦労されたのはどんな点でしたか」

バクスター:「最初は、中継担当だったために、オリンピックで何をしようかよくわかっていませんでした。突然プランナーとなり、オフィスに向かうという行為も大変でした。初めてオリンピックを担当した頃、競技の数の多さに非常に驚きました。60種類もあるのです。まずは、これらの競技を学ばなければなりません。私は過去のオリンピックのビデオアーカイブを見て、各競技のポイントがどこかを分析しました」

「当初一番チャレンジであり、また重要であったことは、FIFAやFIG(国際体操連盟)など、スポーツ競技の団体と仕事ができただけです。スポーツ競技にはそれぞれ、放送に際しての制限規定が多くあり、個々の競技の撮影には、それぞれの団体の承認が必要でした。例えば、マ

イクロフォンの装着一つにしても承認が必要です。スポーツ競技団体とよい関係を築くことで、スムーズな承認を得ることができました。私はまず、スポーツ競技団体や放送関係者、現場のオーディオ関係者とよりよい関係を構築することに時間を費やしました」

「実は当時、60種類もある競技のほとんどがテレビで放映されていませんでした。また、柔道は日本で、アーチェリーは韓国で、卓球は中国で、というように、国ごとに特に人気のスポーツがあります。オリンピックは、こうしたスポーツを、より国際的に人気のある競技にしていこうとするプレゼンテーションの場であるとも言えるでしょう。サウンド・デザインは、そうした競技の魅力を引き出すための重要な役割をしているのです」

「ロンドン・オリンピックの際、体操の競技団体から、演技の際の各選手のしぐさの音があまりになまなましく多すぎる、というクレームが来ました。しかし私は、視聴者はそれを望んでいると反論しました。視聴者は、家庭内のリビングルーム、キッチン、ベッドルームなどと劇場ではないところで、選手の呼吸を、手で握っている音を、感情を、細かい部分まで知りたいのだと説明したのです。こうしたサウンド表現のための、細かい部分に至る提案が私の仕事です。現場の音を細かい部分まで伝えることができれば、コメンテーターは必要ありません」





ロンドンから デジタルサウンドを導入

沢口：「オリンピックにおいて、今後のバクスターさんの役割はどのようなものですか」

バクスター：「これまで長い間、オリンピックのサウンド・デザインだけでなく、サウンド・プロダクション、そしてその関連技術など複数の仕事を一人で担当してきました。しかし、ロンドン・オリンピックからスタッフを増やしました。こなす仕事量が増え続けているからです。ロンドンオリンピックからは、サウンド・プロダクションのみに注力しました。将来につながっていく高品質なオリンピックサウンドにフォーカスをおいて全体を見据えています」

「ロンドンオリンピックでは、初めて中継車や関連機材をすべてデジタルで揃えました。ある人が『今までのオリンピックで最高のサウンドだった』とコメントしてくれました。それに対し、私は『そうでしょう。すべてがデジタルサウンドだったから最高の品質に仕上がったのです』と答えました」

「ロンドン・オリンピックが終わった今、次のブラジルオリンピックに向けてよりよい案を練っているところです。オリンピックの詳細を見ているうちに、自分が何をしたいかというビジョンが明確になってきます。そのビジョンに応じて技術の改善、アプリケーションの向上、各スポーツ競技団体との協力関係など

を進めていきます。放送をよくするため、スポーツ競技団体に新たな提案をしていきます」

沢口：「長年にわたり、オリンピックをはじめとした大規模なスポーツイベントのサウンド・デザインを続けてこれた要因はなんでしょうか」

バクスター：「チャレンジ精神でしょう。簡単でないことはわかっていたからね。そして、なぜ簡単でないのか、という理由を理解するには長い年月がかかりました。自分なりに今までと違うもっと進化させた方法で放送の仕事に携わり、またオリンピックに対してそのような思いを持ち続け、その結果として今の自分に至っており、新たに何か違った方法を！の思いもまだ生きています」



「オリンピックは人々にとって特別なイベントです。オリンピックと共により発展してきたものの一つがサウンドです。オリンピックと共に映像は目を見張るような発展を遂げてきましたが、サウンドの進化も映像に劣らぬ存在となり、多くの注目を浴びています。プロデューサーはよりよい作品作りのためにサウンドが不可欠なものであることを認識すべきでしょう」

オリンピックの作業で 信頼を深めたオーディオテクニカ

沢口：「日本のメーカーとの連携はありますか」

バクスター：「1997年に、パナソニックからの紹介でオーディオテクニカという企業を紹介され、それ以来、共同作業をしています。このときの出会いは、お互いにとってよい機会となりました。私はとても感謝しており、このよい関係をとても誇りに思います」

「私が何かを提案すると即答でOKをくれ、それに対し共に何ができるかを考えてくれました。アトランタオリンピックではじめて共同作業をし、シドニーでも行いました。例えば私が、もっとステレオマイクフォンが必要だとリクエストすれば、1年後には用意してくれていた。オーディオテクニカは、私の将来に向けたビジョンに多大なる信頼を寄せてくれました」



家庭でテレビを見ている家族こそが 大切にすべき“本当の顧客”

家庭のTV視聴者が 満足する音づくり

沢口：「Inter BEE 2012におけるセッションで、最もアピールしたかったポイントは何ですか」

バクスター：「大きなポイントは、家庭における視聴者を忘れないで欲しいということです。家庭内でのテレビ視聴は大きな割合を占めています。音響設備も整っていない、機材の組み合わせなどセットアップについてなされていない、というのが実際の状況です。我々プロは、それらの人々を常に念頭においておくべきなのです。その環境のための完璧なサラウンドというものは私はまだ着手できていません」

「私が提案しているのは、そのような環境でも十分なインパクトが感じられる4.0ミックスです。LFEは誤解されることがたびたびあります。映画におけるLFE

の本来の意味は“low frequency effect”です。テレビ業界の人たちがまれに理解している“low frequency enhancement”ではありません。LFEは否定的な意見もあるようですが、私はサウンドの発展は4.0を経過していくと思います。細かい部分まで表現したサウンドさえあれば、完璧な視聴席などは必要ありません」

「今、私は、昔に戻ってステレオ3DサウンドのDSPを使うべきだと思っています。それをサラウンドフォーマットに変えるのです。後部スピーカーに装置を追加してもっとサウンドを拡げ、シアターのようにします。どこに座っていても非常にバランスのよいサウンドを得ることができます」

「この論法には反対意見もあるのですが、私は視聴位置の限界を減らす手法だと思います。全員がシアター環境にあるのでしたら必要ないのですが、現実の家庭内では違います。我々は、本当の

顧客、主な視聴者を忘れてはならないのです」

沢口：「それは大切なポイントですね」
バクスター：「一般家庭でテレビを見ている家族、これが私の本当の顧客なのです。顧客が気に入ってもらえればすべてよし。私は視聴者のためにミキシングを行っており、楽しんでもらうために、できる限りのことをするつもりです」

「この仕事は、ペインターやアーティストのように、芸術性の高いクリエイティブな仕事であると思っています。違うマイクフォンを使用すれば、違うカラーが描けるというように。私の妻はアーティストです。そしてその妻よりサウンドはカラーであるという類似論を学びました。私達は、サウンドという美しいペイント作業を行っているサウンドスケープ(音景)クリエイターといえるでしょう」



聞き手
女子美術大学 大学院 美術研究科 教授
デザイン専攻 (メディアアート造形)
為ヶ谷 秀一 氏

話し手
NASA Digital Television Program Manager
ロドニー グラブス氏

InterBEE 会期2日目の11月15日に開催された映像シンポジウム「神秘的で美しい“宇宙”を体感～高臨場感映像テクノロジーの進化～」では、NASAの宇宙映像システムや、JPL (ジェット推進研究所) が取り組む火星探査機などから送られてくる画像データの映像化などの最新宇宙映像テクノロジーが紹介された。

来日したNASAのDigital Television Program Manager ロドニー グラブス氏は、貴重な撮影素材やCGなどを活用した映像で、一般市民にNASAの活動を紹介している。グラブス氏はこうした活動を「国民が実際に関われることを分かち合え、同時に、科学者やエンジニアたちの仕事の向上にも役立つ」と位置づけ、さらに映像による先端技術の紹介が「科学の進歩や教育に貢献していける」と指摘する。

本インタビューの聞き手で、映像シンポジウムのコーディネイターを務めた女子美術大学 大学院 教授の為ヶ谷秀一氏は、NHKの在任中、当時放送技術の先端であったハイビジョンの映像制作を担い、ハイビジョンCGと実写の合成技術を駆使した最新の番組制作に取り組むなど、最先端の映像技術による番組制作の手法を開拓してきた。さらには、為ヶ谷氏の働きかけにより、NASAが初めてスペースシャトルに日本製のハイビジョンカメラを搭載。地球に居ながらにして、宇宙からの鮮明な地球の映像を見せることに貢献している。

長年にわたり、映像制作においてNASAとの交流を深めてきた為ヶ谷教授が、NASAにおける映像コミュニケーションの位置づけや、今後のNASAでの活動やInterBEEの展示をはじめとした日本の映像技術力について、グラブス氏に聞く。



映像で宇宙開発の成果を国民と分かち合うことは スタッフの士気も高める

「国民に本物の宇宙を見せたい」

為ヶ谷：「Inter BEE 2012のビジュアルシンポジウムに参加いただきありがとうございました。シンポジウムの印象はいかがでしたか」

グラブス：「テクノロジーとアートの完璧な架け橋のようなものだと感じました。私は、アートプロデューサーとしての経歴があり、コンテンツ制作にも携わり、今は技術寄りの人間です」

「本日のシンポジウムは、論理的にテクノロジーがどのように役に立ってきたかをお話ししました。科学、アート、そして教育と、さまざまな分野に関連するテクノロジーを追求しているのが我々で、シンポジウムにとっても感謝しています。これらすべての事柄は完全に融合しあい、大変重要であると思います。特に“リアルタイム”と“ライブプログラミング”に注目しています。もし、技術が発達し続けるなら、我々もスペースクラフトからのスーパーハイビジョンのライブ中継が可能となるでしょう。大変に素晴らしいことです」

「技術が発達すればカメラも進化し、圧縮技術も進化する。それにより、アーティストは、壮観なビジュアリゼーションを創造することができます。セッションで登壇したみなさんが、実際のデータやビジュアルデータにより小惑星や彗星、流星、太陽系すべてのものが相互作用し合っていることの解説をしたのを聞いたときには大変感銘を受けました。時間が許せば私も、フィルムメイキングに携わっていた話や、ここ数年、ほか人々の素晴らしい作品作りに関与したりしていたことを話したかったですね」

為ヶ谷：「NASAでは、ビジュアルの部署にいらしゃいますよね。納税者である国民や子供達と、ビジュアルでコミュニケーションをはかっていますね。視聴者にアピールするにはどのような観点からの活動が大切ですか」

グラブス：「はい。日本もそうですが、米国の納税者は、スペースクラフトやスタッフなど、我々のすべてに対してお金を払っています。だから、米国民が払っているお金に見合うと満足するものを提示することが重要です」

「NASAの憲章では『NASAが創造するものはすべてアメリカ国民の財産である』としています。よって、我々がすべきことは、抽象的なものでなくアメリカ国民が実際に関われることを分かち合わなければなりません。そしてそれは同時に、科学者やエンジニア達の仕事の向上にも役立ちます」

「スペースプログラムに携われることは大変光栄に思っています。納税者達はその払いに見合うものを提供しながら、同時に科学の進歩や教育に貢献していけるからです」

為ヶ谷：「スペースシャトルがハリウッド近くの道路で運ばれている映像をYouTubeで観ました。アメリカの国民は皆スペースシャトルが大好きですね。それについてはどう思いますか」

グラブス：「あれだけ巨大な宇宙船シャトルを間近に見たら、このような巨大なものを宇宙に飛ばしているのかと驚嘆したでしょう。ある意味で、ハイディフィニションビデオのようなもので、間近で観た時にはじめて強く感動するのです。間近

に見てはじめて、宇宙に行って帰還するこの巨大なシャトルの強いパワーを感じるのです」

「この光景は、国民に本物の宇宙をみせることができたなら、それはとても素晴らしいということをお伝えしてくれました。人々はとても興味があるのです」

「民間の参入で打ち上げ回数、 打ち上げ場所が増加」

為ヶ谷：「ケープ・カナベラルでシャトルの打ち上げをずいぶん前に見たことがあります。シャトルが発する光には大変感動しました。それは大変神秘的な光でした。多くの人が、観光スポットからもシャトルの打ち上げを見たりしましたね。NASAのビジュアルの将来についてはどう思いますか」

グラブス：「将来、NASAのスペースクラフトは、引き続きケネディスペースセンターのケープ・カナベラルから打ち上げられると思います。そして、ロケットもますます大型化します。すると人々は、打ち上げからもっと遠方に位置しなくてはならなくなってきます。すると、ハイビジョンのイメージ、あるいはスーパーハイビジョンなどが非常に重要となっていきます。船体が大きければ危険度が増すからです。ロケットはサターンVよりも大きくなります」





「今、NASAでは民間ベースのスペースクラフト打ち上げ(商業スペースクラフト)が始まっており、ドラゴンやオービタルサイエンスなどの民間企業が、テキサス州やニューメキシコ州、デラウェア州の海岸側などから一般人をのせて打ち上げを計画しています。すると、より多くの人々がスペースクラフトの打ち上げを見られる機会が増えます。本物の力強さ、神々しい光というものを目の当たりに見ることが出来ます。実際に目で見ないと人に伝えることもできません。壮大な光景ですね」

「宇宙での国際共同開発で世界が一つに」

為ヶ谷:「次のNASAでのロケット打ち上げはいつ頃ですか」
グラブス:「大型ロケットを建設途中で、その詳細ミッションについても検討中で

す。憶測ではありますが、月やラグランジュポイントに必然的に戻ると思えます。月やラグランジュポイントで、火星にいくためのスペースシップを建設します。火星は不可避の目的地だと思います。しかし、アメリカが単独でそれを行うとは思いません。多くの国々との共同作業だと思います。そのスペースシップは国際船になると思います」

「というのは、太陽系宇宙探索は世界規模で行うものですし、まして一国の政府のみがそのための資金を持つということは不可能だと思います。NASA単独での月面写真というのはもう存在しなくなると思えます。ロシア、ヨーロッパ諸国、中国、そして日本などの諸外国と共同で宇宙遊泳を行っていくと思えます」

「私は46歳ですが、いまだに宇宙に行くことに希望を持っています。もちろん、26歳の時のように可能性は高くはないですが。戦争と違い、宇宙の共同探索に

よって世界は一つとなるでしょう」
為ヶ谷:「その通りだと思います」

「NASAセンター内にTV番組制作環境が完備」

為ヶ谷:「NASAの中には、ビジュアルのためのプログラムを担当しているグループはありますか」

グラブス:「パブリックアフェア担当部署(広報担当)があります。さらに各NASAセンターでは、それぞれTV番組制作が行える環境が整っています。主に、それぞれのセンターでの科学やエンジニアリングについての番組ですが、教育番組も制作します」

「一つの面白い例として、金星の太陽面通過の時のことをお話ししましょう。大変珍しく、素晴らしいイベントでしたので、ジェット推進研究所、マーシャル宇宙飛行センター、ゴダード宇宙飛行センターなどと各センターから多くの人間が関わりました。ハワイ火山の山頂にカメラを設置し、リアルタイムの4K撮影を行い、NASA TVでライブのストリーミングを行いました。その映像では世界各地のスイッチングを行いながら、ストーリーをつけて配信しました。我々は、科学データをその場でリアルタイムに付加しながらストーリーをリアルタイムに構成していけるという例です」

NASA TV 金星の太陽面通過では4K撮影でリアルタイムライブ中継も

「特別教育番組も制作」

為ヶ谷:「あなたの部署はNASAメディアグループであるNASA TVとリンクしているわけですね。お互いにどのようにコミュニケーションをはかっていますか」

グラブス:「NASA TVプロデューサー全員、毎週電話会議を行い、現在進行しているものについて伝えます。技術側の人間もそれにより、必要な技術やインフラを整えます。例えば、先ほどお話しした金星の太陽面通過の時には、何週間も前から、私のチームはネット環境を確実なものとし、衛星時間の設定などを行いました。すべての体制が整い、ライブショーとして、あらゆる場所へのスイッチングが行えたのです」

「コンテンツプロデューサーと技術の間も、週に一度コミュニケーションをはかっています。よって、我々は何週間前、あるいは何ヶ月前には主なイベントについて把握しています」

「また、ロボットコンテストや、月面走行バギーコンテストなどなど、ドキュメンタリーの特別教育番組もあります」

為ヶ谷:「あなたは、NASAのビジュアルグループのマネージングを担っているのですか」

グラブス:「はい。NASAデジタルテレビジョンワーキンググループの、各センターの技術関係の責任者を勤めています。ウェブビデオワーキンググループもあり、放

送し終わった番組はストリーミングビデオとしてインターネットで公開しています」

「最近、静止画を扱うグループもできました。だから、今では静止画コンテンツ、ウェブコンテンツ、そしてビデオコンテンツとあります」

「私の仕事は、お互いを支え合うためのインフラ整備に責任を持つことで、それにより、一般、科学者、エンジニアとコンテンツのやりとりが行えます。これは非常に重要なことで、コンテンツがなければ配信もできません。コンテンツありきです」

「より良い作品のための手法を提案。4K、HEVCなどに注目」

為ヶ谷:「コンテンツに関わる人たちは、ハイクオリティーの画質を扱いたいと思っていますか。そのための新しい設備などリクエストしてきますか」

グラブス:「ときどきあります。だいたい、技術関係の間はコンテンツ関係のものより先を進んでいます。例えば今、我々は4KやHEVCなどに注目しています。コンテンツプロデューサーより、先を見据えています」

「先を知ることにより、よりよいインフラ整備、よりよいカメラなど、よい作品のための手法を提案しています。そしてコンテンツプロバイダーも追従してくるというわけです」

「NASAにおいて、我々は先を進んでいかなければなりません。公務の人間がきて“こういうことをやりたいんだが”と先陣を切って言うことはほとんどありません。常に“こういうやり方で、こんなことができるんじゃないの”とこちらから提案しています」

「日本のメーカー、放送局との共同作業も頻繁に実施」

為ヶ谷:「日本の産業と連携するよう何か新しいシステムを開発しましたか」

グラブス:「頻繁にあります。宇宙に飛んだ3DA1カメラなどは、パナソニックと、3Dによるもう少し面白いコンテンツを作れないだろうか、とディスカッションしたものでした。スペースステーションに3Dカメラを持っていったらどうだろう、という話で、公認カメラとして宇宙に飛び立ったのです。これが、日本の企業とのコラボです」

「このようなコラボは大変有益で、何年も続いています。パナソニックをはじめ、JAXAやNHK、Sonyなどなど、技術開発を行っている日本の企業と共同作業を行っています」

「ですから私にとって、将来が計れるInter BEEなどのイベントに参加できたことは、非常に得るものも大きいよい機会なのです」



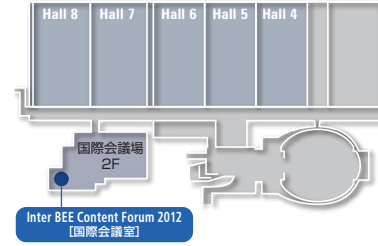
Inter BEE Content Forum 2012

会場：国際会議場2階 国際会議室

企画：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

次世代のコンテンツ ~信頼と創造~

国内外から映像・音響各分野で活躍する第一人者をプレゼンターに迎え、ユーザ・エクスペリエンスによって変わるコンテンツビジネスの最新動向を議論しました。



特別講演

日英同時通訳付

無料

10:00 ▶ 11:00

THE VISION OF DOUBLE NEGATIVE SINGAPORE

イギリスの名門VFXスタジオDOUBLE NEGATIVE。ハリウッドの大作を手掛ける同社の14年の足取りをたどり、また、2009年にアジア進出を果たし、DOUBLE NEGATIVE SINGAPOREを設立。アジアでの制作、そしてアジアの才能とのコラボレーションの同社のビジョンが明かされました。

ゾウイー クランリー 氏
DOUBLE NEGATIVE SINGAPORE CG Supervisor



11:20 ▶ 12:00

放送・メディア業界 ビジネスと技術展望

IABMは放送及びメディア業界の300社を代表する組織です。IABMではメンバーを通じてサプライ及びサービスセクターを独自に理解しています。IABMが行う多くの活動には市場リサーチや市場研究が含まれ、これらの活動を通じてビジネスや技術力学やトレンドの理解を試みています。講演ではビジネスの観点からデータを検証して、最も影響力を持つ技術的推進要因を明らかにしました。

ジョン アイヴ 氏
IABM Director of Business Development & Technology



11.14
(水)

13:00 ▶ 14:30

SUPER Hi-Vision in LONDON 2012

ロンドン五輪の期間中、OBS(オリンピック放送機構)、BBC(英国放送協会)と共同で、同競技のスーパーハイビジョンによる公開上映(パブリックビューイング)を日本、英国、米国において実施しました。これは、大画面、高精細、高臨場感あふれる新メディアの開発を加速し、海外放送機関と連携した日米欧での普及展開を促進し、さらには、IP回線網による伝送技術の研究開発・検証などを目的として実施されたもので、その技術内容について報告しました。

菅原 正幸 氏
NHK放送技術研究所 テレビ方式研究部 研究主幹



15:00 ▶ 16:30

オリンピック大規模スポーツイベントの音声システム構築

スポーツ中継のなかでも複雑で高度な音声制作システム構築が必要とされるオリンピック分野の第一人者デニス・バクスター氏が、ロンドン五輪で発生した音声システム構築上の問題点とその解決策、さらには様々な技法について詳細に解説しました。

デニス バクスター 氏
Sound Designer



10:30 ▶ 11:30

これからの衛星伝送運用とCarrier ID

衛星伝送において他局による不用意な衛星アップリンク波により運用に支障を与えるケースがあつたことから、2015年までの衛星アップリンク波へのID付加により発信元を特定できるようにCarrier IDが規格されました。Carrier IDを推進するsIRGのコールマン氏がCarrier IDの歴史、ロンドン五輪前に行なわれたテストと今後の動向について紹介しました。

マーティン コールマン 氏
sIRG Executive Director



11.16
(金)

映像シンポジウム

日英同時通訳付

有料

14:00 ▶ 17:00

神秘的で美しい“宇宙”を体感～高臨場感映像テクノロジーの進化～

“宇宙から見る地球は、本当に美しい”。宇宙からの映像を見るたびに、私たちは夢やロマンを感じる。ISS(国際宇宙ステーション)におけるNASAのHDTV宇宙映像システムや、月や火星を目指した新しい映像システム開発への挑戦、JPL(ジェット推進研究所)からは、NASAの火星探査機から送られてくる画像データの映像化など、研究とアウトリーチに向けた宇宙映像生成の最新状況を紹介します。NHKの「宇宙の渚」では、超高感度ハイビジョンカメラやコンピュータグラフィックス(CG)による高精細映像技術が、壮大な宇宙体験を私たちにもたらしてくれました。宇宙は複雑である。その複雑さを高精細映像で再現することで、映像が私たちに臨場感を与えてくれます。宇宙映像が人々にもたらした夢やロマンは、最新の技術開発によりもたらされる高精細映像と、それを人々に届けるコンテンツ制作とのコラボレーションが不可欠です。このフォーラムは、未来に向けたテクノロジーとコンテンツをつなぐ場を目指して開催しました。



●プレゼンター



ロドニー グラブス 氏
NASA Digital Television Program Manager



石井 太郎 氏
日本放送協会 制作局 第1制作センター
科学・環境番組部 チーフディレクター

11.15
(木)



鈴木 繁氏
カリフォルニア工科大学 ジェット推進研究所(JPL)
機器ソフトウェア・科学データシステムセクション エンジニア



倉田 裕史氏
株式会社NHKアート 番組美術センター
デジタルデザイン部 CG映像 アートディレクター

●司会・進行



為ヶ谷 秀一 氏
女子美術大学 大学院 教授



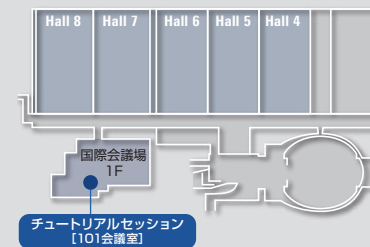
国重 静司氏
株式会社NHKアート 取締役



Inter BEE チュートリアルセッション

会場：国際会議場1階 101会議室
 企画：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会（JESA）

放送業界、映像・音響業界で働く若手、さらにこれらの分野に関心を持っている大学、専門学校の学生などを対象に、第一線で活躍する講師陣が、最先端技術動向、最新機器・システムの活用法、コンテンツ制作手法などを伝授し、今後の業界の発展に向け、後進人材の育成に寄与しました。



音響シンポジウム

日英同時通訳付 有料

14:00 ▶ 17:00

大規模スポーツ制作の音声構築

地上デジタル放送が本格化し、スポーツ中継の音声制作のスタイルも大きく変わっています。日本を代表するスポーツ中継の音声スペシャリストが一堂に会して、最新情報の紹介やディスカッションを行いました。

放送局、CATV、衛星放送スポーツチャンネル、制作プロダクション等で、スポーツ中継に携わっておられるか、携わる可能性のある皆様方には必見のセッションでした。大規模スポーツ制作は、音声制作以外にも様々な連絡システムの構築や、各現場間の送り返し、さらにメインの放送以外にもニュース用音声や世界配信用IS音声の制作等複雑なシステム構築を必要とします。これらの問題を具体的な事例に基づいて議論しました。

●プレゼンター



高岡 彰吾 氏
 株式会社 日テレ・テクニカル・リソーシズ
 制作技術センター技術制作部 音声



竹下 博英 氏
 株式会社フジテレビジョン 技術局 制作技術センター
 制作技術部 副部長

●司会・進行



沢口 真生 氏
 沢口音楽工房 サラウンド寺子屋塾 代表
 Fellow AES/IBS



和三 晃章 氏
 朝日放送株式会社 技術局 制作技術センター
 制作技術 課長



池田 重之 氏
 日本放送協会 放送技術局
 報道技術センター 中継部



亀川 徹 氏
 東京芸術大学 音楽学部 音楽環境創造科
 教授

音響セッション 現場で役立つ映像制作技術者のための基礎知識

有料

13:00 ▶ 14:30 セッションA

携帯端末を利用した音響制作・計測アプリ応用の最新動向

PC機能を持った携帯端末の普及に伴い、従来大型で高価だった音響計測や制作機器が、携帯端末で安価で精度も良く利用可能となりました。デジタル・ドメイン、アナログ・ドメイン、操作性、携帯性などの面からこの事実を検証すると共に、業務レベルで利用できるアプリを紹介しつつ、使われている技術や実際の応用について解説しました。



高藤 征幸 氏
 株式会社シンタックスジャパン エンジニアリングディレクター



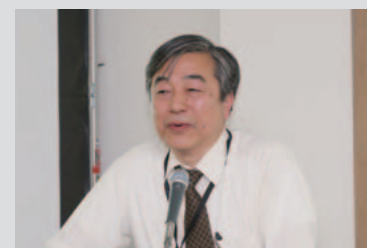
日野 捷吉郎 氏
 エタ二電機株式会社 代表取締役

11.15 (木)

15:00 ▶ 16:30 セッションB

ファイルベース音声／映像制作の現状

映像・音声は従来のテープメディアから、デジタルデータとPCサーバーネットワークを利用した制作・送出システムへ変化しつつあります。この講座では、これまでの歴史を振り返りながら、現在の運用システム例を紹介し、今後のトータルファイルベースシステム構築への展望をお伝えしました。



山本 隆彦 氏
 タックシステム株式会社 代表取締役

11.16 (金)

映像セッション 現場で役立つ映像制作技術者のための基礎知識

有料

13:00 ▶ 14:30 セッションC

最新デジタル機器を駆使した映像表現 ～「仁淀川 青の神秘」での撮影技法～

平均水質全国一位を記録した清冽なる川を扱った映像表現番組「仁淀川 青の神秘」制作における、デジタル一眼レフ、ハイスピードカメラ、水中ハイスピードカメラ、超高感度カメラ等のデジタル機器を駆使した撮影技法を徹底的に解説しました。



世宮 大輔 氏
 日本放送協会 NHK高知放送局 技術部 カメラマン

11.16 (金)

15:00 ▶ 16:30 セッションD

東日本大震災とドキュメンタリーカメラマン ～震災から1年半、伝え続けるということ～

東日本大震災発生直後から多くのニュースや報道番組が制作されました。ニュースの裏側の「失った暮らし」や「苦しみや悲しみ」について被災者に寄り添いながら伝えてきた報道カメラマンが、心理・撮影機材・撮影技法などの分野からその報道を分析いたします。



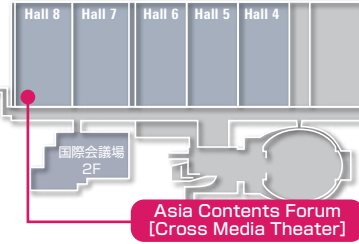
湯木 慎治 氏
 日本放送協会 放送技術局 制作技術センター 番組制作技術部
 チーフエンジニア

11.16 (金)

Asia Contents Forum Powered by DigiCon6

会場: Cross Media Theater | モデレータ: 結城 崇史 氏 Asia Contents Forum ディレクター
特別協力: TBS DigiCon6 | 坂本 章 氏 Asia Contents Forum 副ディレクター

TBSが「クリエイターの発掘と育成」を目的として2000年にスタートし、現在、アジア10地域で開催されている映像コンテスト「TBS DigiCon6」とInter BEEがコラボレーション。新しいコンテンツ作りの最前線で活躍するクリエイターや国内外の若手クリエイターが、自らの作品について講演しました。



特別セッション①

15:00 ▶ 16:30

視聴から体験する時代へー プロジェクトマッピングが誘う 「映像」の未来型

2012年9月に東京駅丸の内駅舎で開催されたイベント「TOKYO STATION VISION」の中心スタッフがそのメイキングを元にプロジェクトマッピング制作の舞台と体験型映像の可能性に迫りました。



11.14
(水)



森内 大輔 氏
株式会社NHKエンタープライズ
事業本部 企画開発センター チーフプロデューサー



内田 照久 氏
株式会社エス・シー・アライアンス
メディアエンターテインメント社 ETC PIGI JAPON DIV.



譚澤 大助 氏
株式会社ピクス プロデューサー

特別セッション②

15:00 ▶ 16:30

劇場公開作品VFX事例 「宇宙兄弟VFXメイキング」

1999年に株式会社オムニバス・ジャパン入社。CGディレクターとして映画「監督ばんざい」、TV-CM「NTTドコモデータ通信「鉄人28号」」などのVFXを担当。企画/演出した作品「SPACE SHOWER TV "HOTタイトル"」、「藤商事CR宇宙戦艦ヤマト」が、それぞれSIGGRAPH2007、2009で上映されるなどの評価を得ている。本講演では、そのクオリティの高さが注目されたVFXシーンについて語りました。



11.16
(金)



古賀 庸郎 氏
株式会社オムニバス・ジャパン CGディレクター

DigiCon6 トップクリエイターセッション

招待講演として、映画「My Girl」で上海国際映画祭最優秀監督賞を受賞したタイの映画監督Adisorn Tresirikasem氏、『龍が如く』シリーズや『モンキーボール』シリーズなどを手掛けた日本ゲーム界のトップクリエイターの名越 稔洋 氏が、自身の体験を元にコンテンツ制作環境について語りました。

●司会: 古谷 有美 氏 TBSアナウンサー ●進行: 山口 泰広 氏 DigiCon6 フェスティバルディレクター

12:30 ▶ 13:30 セッション①

11.15
(木)

Adisorn Tresirikasem 氏
映画監督



15:00 ▶ 16:00 セッション②

名越 稔洋 氏
株式会社セガ 取締役
チーフクリエイティブオフィサー



TBS DigiCon6 優秀作品紹介 (DigiCon6 Asian Creators' Talk)

13:30 ▶ 14:30 | 16:00 ▶ 16:30

アジア各地域で行われたDigiCon6リージョナルアワードで最優秀賞を受賞した作品の才能あふれる若手クリエイターや関係者が来日し、ノミネート作品の紹介やコンテンツ制作環境について発表しました。

●司会: 古谷 有美 氏 TBSアナウンサー ●進行: 山口 泰広 氏 DigiCon6 フェスティバルディレクター

●発表者:

11.15
(木)

- Ms. Weihua GAO (中国)
- Mr. Alan Chiu I Jen (台湾)
- Mr. LEE Chin (香港)
- Mr. Sagar Narendra KADAM (インド)
- Mr. Geuntae PARK (韓国)
- Mr. Kyungsoo YU (韓国)
- Mr. Gabing ZENO (マレーシア)

- Ms. Juhaidah BINTI JEOMIN (マレーシア)
- Mr. John Alistaire Cruz FELLICIANO (フィリピン)
- Mr. Takeyuki ONISHI (フィリピン)
- Mr. TAN PANG REN (シンガポール)
- Mr. Teo Say Kiam Raymond (シンガポール)
- Mr. Pidok MOOMUENSRI (タイ)



11.16
(金)



詳細情報は<http://www.digicon6.com/>

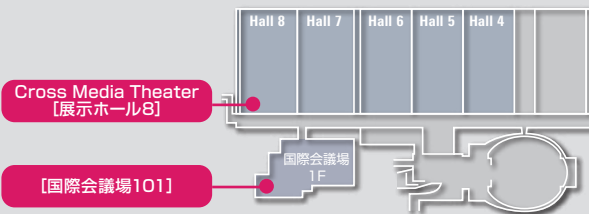
第14回 TBS DigiCon6 Awards 受賞作品一覧

	作品名	受賞者氏名	地域
Golden DigiCon6 Award	display - tag	山田 詩音、福島 佑貴、田中 翔 総田 隼世、畑尾 佐助、加藤さき	日本
Silver DigiCon6 Award	BURP	GEUNTAE PARK JONGKI JEON KYUNGSOO YU	韓国
Bronze DigiCon6 Award	KUROKO	鈴木 春香	日本
DigiCon6 Creativity Awards	Happy Anniversary	Cheng Teng / Liang Fan	中国
	A LIFE IN A DAY	TARA CABULLO JOLLY FELICIANO	フィリピン
	Lubdhanam Cora	SAGAR KADAM	インド

Cross Media Theater

会場：展示ホール8

クロスメディアとデジタルコンテンツを訴求する場として、2012年より「CrossMedia Theater」を新設。新しい産業分野におけるコンテンツ制作・管理から配信・購入など、各方面から注目と関心を集めている、新しいビジネス領域を提案しました。



IPDCフォーラムシンポジウム2012 企画：IPDCフォーラム

10:30 ▶ 12:00 **カンファレンス** 国際会議場1階 101会議室

海外におけるセカンドスクリーン動向とIPDC展開の可能性について

諸外国でも検討が加速化するセカンドスクリーン型サービスについて、海外での展示会視察に関する報告や、国内ならではの検討状況等の最新事情を報告しました。また、IPDCとセカンドスクリーンの親和性を踏まえ、国内の地上デジタル放送や海外でのISDB-Tでの応用の可能性についての検討状況を紹介しました。

第1部 世界の潮流となりつつあるセカンドスクリーンの海外動向に迫る

- 加藤 康氏** civolution Business Development Consultant
- 田中 勇樹氏** ITコンサルタント/リサーチャー
- 高木 誠一氏** 日本電気株式会社 キャリアネットワークビジネスユニット 主席技術主幹

第2部 ISDB-T採用国におけるIPDCへの期待

- 高木 誠一氏** 日本電気株式会社 キャリアネットワークビジネスユニット 主席技術主幹
- 杉沼 浩司氏** 日本大学 生産工学部 講師/映像新聞 論説委員
- マルセロ・ズッフォ氏** ブラジル サンパウロ大学 システムインテグレーション研究所 教授



11.16 (金) 13:00 ▶ 14:30 **トークセッション** 展示ホール8 (Cross Media Theater)

これでIPDCのすべてが分かる！ ～IPDCの技術紹介、導入事例、そこから広がる新たなビジネス展開～

知っているようで知らない「IPDC」について、そもそもIPDCの優位性の再確認や、実導入上の課題整理といった基本的なところから、実際にIPDCを活用されている方々による具体的な解決事例の紹介、ノウハウの共有など、放送分野でのIPDCを検討されている方々にとって、今だからこそ聞いてみたい内容を紹介しました。

第1部 IPDCの技術と先行事例

- 濱口 伸氏** 株式会社毎日放送 経営戦略室 主事
- 坂梨 裕基氏** 関西テレビ放送株式会社 放送推進局 技術推進部 主事
- 外岡 信一郎氏** 株式会社mmbi 経営企画部 シニアマネージャー

第2部 デジタル放送とIPDCのこれから

- 今谷 秀和氏** 株式会社電通 関西支社 テレビ局 局次長
- 岡村 智之氏** 株式会社フジテレビジョン 技術開発局 専任局長
- 齊藤 浩史氏** 株式会社毎日放送 経営戦略室マネージャー
- 大塚 正浩氏** 九州朝日放送株式会社 技術局 技術戦略担当部長



Pre Visualization (プリビズ) セッション

11.14 (水) 13:00 ▶ 14:00

日本におけるプリビズ事例紹介とハリウッドレポート

映画制作におけるプリビズ活用事例を紹介します。一般に知られているCGムービーによるシミュレーションではなく、リアルタイムで撮影シーンのチェックを行うリアルタイムプリビズ手法についてお話ししました。映画のような撮影シーン数が多い作品のプリビズを行なうのに、非常に効果的な手法です。ぜひご覧頂き、映像制作のヒントにして頂ければと思います。また、プリビズ先進国である米国ハリウッドの最新情報をレポートしました。

山口 聡 氏

ACW DEEP 代表 / プリビズスーパーバイザー



V-Lowセッション

11.14 (水) 10:30 ▶ 12:00 **セッション①**

「一家に一台安心ラジオ」としての次世代ラジオ

東日本大震災の教訓を受けて、今後想定される南海トラフによる東南海地震において、地域ラジオとしての役割を考えます。スピーカーの方々の当該地域は、東南海地震において、相当な被害が予測されています。現在の地域での受け止め方、検討課題等を踏まえ、V-Low帯を使つての「災害に強い」次世代ラジオの在り方を浮き彫りにしました。

木村 太郎氏 CSRA代表・V-Low防災デジタル・コミュニティラジオ検討協議会 会長
逗子・葉山コミュニティ放送株式会社 代表取締役社長

泉 清氏 和歌山県田辺市
FM TANABE株式会社 代表取締役社長

川端 建一郎氏 BANBANネットワーク株式会社 事業開発部 次長
近畿V-Low実証実験協議会 加古川分科会事務局

柴田 憲宣氏 株式会社エフエム豊橋 取締役
豊橋ケーブルネットワーク株式会社 企画部長



11.16 (金) 10:30 ▶ 12:00 **セッション②**

次世代ラジオが拓く新たなラジオ文化

「災害に強い」次世代ラジオということを大前提として、デジタルラジオの可能性はもっと語られるべきと考えています。地域メディアとして実績のあるコミュニティ放送局から見たV-Low帯によるデジタルラジオには、どのような可能性があるのか。また、ビジネスとして成立するのかどうか。コンテンツの在り方は？インターネットとの関係性は？等、専門家お二人を交えて、様々な視点からデジタルラジオのコンセプトを考えました。

木村 太郎氏 CSRA代表・逗子・葉山コミュニティ放送株式会社 代表取締役社長

砂川 浩憲氏 立教大学 社会学部 メディア社会学科 准教授

角谷 友行氏 株式会社エムティーアイ 執行役員 music.jp事業本部
ストリーミング事業部 事業部長 兼 ネットラジオ部長



Production Promote Booth

コンテンツクリエイターの来場を働きかけるべく、日本を代表するCG・VFXプロダクションのブースを設置し、日本のデジタルCG・VFXクリエイターへの情報発信をInter BEEで展開した。開催中は、多くのCG・VFXクリエイターや学生などもブースを訪問し、活発な交流が行われ、ソフトウェア、ハードウェアの技術力とコンテンツ制作者の創造性の連携により、コンテンツ制作における新たな可能性を提案した。



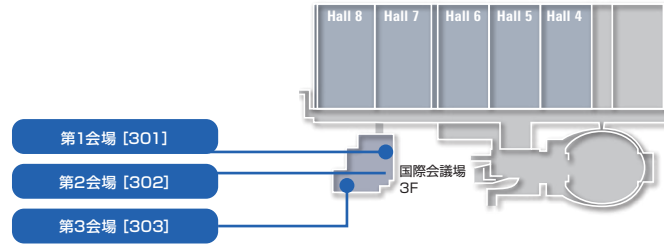
Production & Creator's Night

映像機器のみならず、最新の映像作品そのものにも親しんでいたために、日本を代表するCG・VFXプロダクションの皆様と、国内外のデジタルCG・VFXクリエイターとの交流パーティ「Production & Creator's Night」を開催し、153名もの多くの方に参加いただいた。



第49回 民放技術報告会

国際会議場3階
主催・企画：一般社団法人日本民間放送連盟（JBA）



◆回線・伝送部門			第1会場 [301]
10:30	東京スカイツリー®に設置したTBSテレビのFPU受信基地設備について	TBSテレビ 技術局回線部	加藤 克行 氏
10:55	東京スカイツリー®FPU受信基地局設備概要	テレビ東京 技術局回線技術部	望月 正洋 氏
11:20	東京スカイツリー受信基地設備の構築	フジテレビジョン 技術局放送技術センター回線管制部	一文字 哲也 氏
11:45	デジタルインターカムシステムを用いたPBX更新	フジテレビジョン 技術局放送技術センター回線管制部	天本 光一 氏
13:00	4FSK連絡無線伝送評価報告	日本テレビ放送網 技術統括局技術戦略部(兼)コンテンツ技術運用部	穂坂 怜 氏
13:25	ベストエフォート回線における映像の安定伝送を実現する「準リアルタイム方式」の開発	関西テレビ放送 制作技術局報道技術部(兼)放送技術局技術推進部	栗山 和久 氏
13:50	クラウドを用いたファイル伝送実証実験報告	テレビ東京 報道局取材センター報道技術担当	佐藤 雄一郎 氏
14:15	「FileCast Station クライアント&プレイヤー」その拡張として「番組自動転送装置」の開発	フジテレビジョン 技術開発局技術開発室開発推進部	井上 幸 氏
14:40	可搬型衛星伝送装置を利用した生中継セットの製作	関西テレビ放送 制作技術局報道技術部(兼)放送技術局技術推進部	栗山 和久 氏
15:05	関西テレビ放送 新リモートセンター	関西テレビ放送 放送技術局放送部	宇治澤 晋吾 氏
◆情報・ネットワーク部門			第2会場 [302]
10:30	新ANNEXネットワークの構築	テレビ朝日 技術局システム開発部	高柳 英晃 氏
10:55	ファイルサーバーシステムの災害対策について	テレビ朝日 技術局システム推進部	阪田 浩司 氏
11:20	ユーザの利便性を考慮したスマートフォン向け高校野球速報の配信	朝日放送 技術局放送運用センター	小南 英司 氏
11:45	関西テレビ放送 再放送同意書管理システム	関西テレビ放送 営業局CM部	関本 善和 氏
◆送信部門			第2会場 [302]
13:00	テレビ親局の局舎建て替え、放送切り替えの概要	北海道放送 技術局技術担当	森山 辰徳 氏
13:25	朝日放送テレビ親局新設送信アンテナ	朝日放送 技術局技術管理部	酒井 隆光 氏
13:50	エリア放送用チャンネルフィルタの開発	TBSテレビ 技術局送信設備計画部	深澤 友良 氏
14:15	可変利得機能付きSHFアンプの実証実験について	名古屋テレビ放送 経営戦略室経営戦略部	宇城 由登 氏
14:40	非常災害用可搬型簡易ミニサテの検討と開発	日本テレビ放送網 技術統括局回線運用部	遠藤 哲 氏
15:05	GPIB等を用いた中継局での電波計測の検討	秋田朝日放送 技術局放送技術部	平塚 広大 氏
15:30	地上デジタル放送用電波監視装置の開発と活用検討	日本テレビ放送網 技術統括局回線運用部	和泉田 智志 氏
◆制作技術部門			第3会場 [303]
10:30	スマートフォンを活用した遠隔取材支援システム「LocationSupporter・ロケサポ」の開発	フジテレビジョン 技術開発局技術開発室開発推進部	木村 好信 氏
10:55	SDカードスクランブラーの開発	フジテレビジョン 技術開発局技術開発室開発推進部	保谷 和宏 氏
11:20	LTOアーカイブシステムの開発～その1 開発の経緯と考え方～	日本テレビ放送網 技術統括局技術開発部	菊地 秀彦 氏
11:45	LTOアーカイブシステムの開発 ～その2 システム概要と効果～	日本テレビ放送網 技術統括局コンテンツ技術運用部	窪川 直毅 氏
13:00	多点式タッチパネルを用いた調光卓の開発	TBSテレビ 技術局制作技術部	近藤 明人 氏
13:25	ニューススタジオにおけるLED照明の活用	日本テレビ放送網 技術統括局技術戦略部(兼)技術開発部	小寺 勝馬 氏
13:50	テレビ朝日ARK Aスタジオ照明設備更新～回路制御卓およびスタジオ照明システム～	テレビ朝日 技術局制作技術センター	眞如 博之 氏
14:15	ARK放送センター Aスタジオカメラ・映像システム更新	テレビ朝日 技術局制作技術センター	小山 恭司 氏
14:40	報道中継と制作中継の両立を考えた小型SNG中継車	テレビ朝日 技術局技術統括部	小野田 晴康 氏
15:05	1台で何役もこなす万能車両！多目的車を開発	読売テレビ放送 技術局	高田 裕都 氏
15:30	TBC報道取材ヘリコプターHD化更新	東北放送 技術局制作技術部	小林 宏之 氏
15:55	安全性、軽量化、高機能を実現した新型HDヘリコプターシステム	毎日放送 制作技術局制作技術センター	柴山 武英 氏

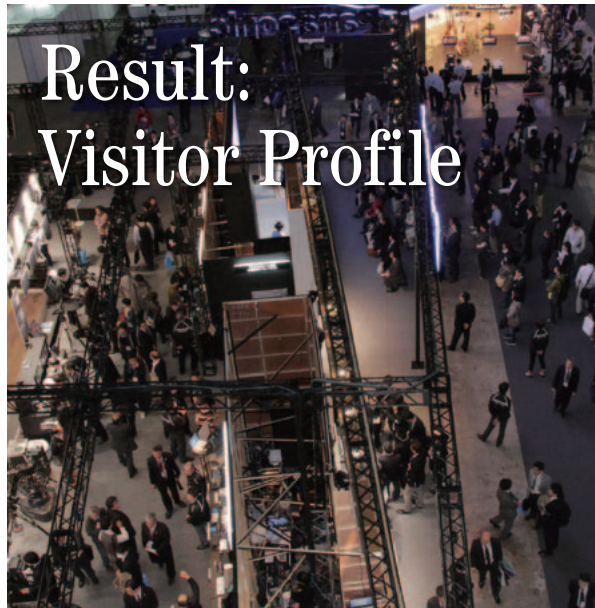
11.14 (水)

◆画像技術部門			第2会場 [302]
10:30	超解像技術を応用した画質向上の検討と導入	日本テレビ放送網 技術統括局コンテンツ技術運用部	鈴木 寿晃 氏
10:55	インカ帝国展「3Dスカイビューシアター」映像制作における「3Dプレビス」	技術戦略室JNN技術統括部(兼)技術局報道技術部(兼)報道局	TBSテレビ 柿沼 司 氏
11:20	XバンドMPレーダを利用した気象情報の提供	東日本放送 技術局技術部	工藤 浩幸 氏
11:45	テレビ東京 L字送出装置の更新	テレビ東京 技術局映像技術部	香月 翔 氏
◆制作技術部門			第3会場 [303]
10:30	ユニバーサルレコーダーの開発	テレビ東京 技術局技術開発部	杉原 賢治 氏
10:55	ワークフロー改善を目指したファイルベースシステムの構築	札幌テレビ放送 技術局制作技術部	長坂 清治 氏
11:20	スポーツイベント対応ファイルベース収録編集システム	テレビ朝日 技術局システム推進部	松本 英之 氏
11:45	高校野球中継における風向風速データ等の表現	朝日放送 技術局制作技術センター	勝間 敦 氏
放送と通信の連携は新風を巻き起こすか？～ポストデジタル 次の手～			第1会場 [301]
●コーディネータ	日本テレビ放送網 技術統括局長	一本 哉 氏	mmbi 取締役経営企画部長 石川 昌行 氏 エフエム東京 執行役員待遇マルチメディア放送事業本部副本部長 仁平 成彦 氏 (株)アスキー・メディアワークス アスキー総合研究所長 遠藤 諭 氏
●パネリスト	フリーランスジャーナリスト	本田 雅一 氏	
	毎日放送 経営戦略室マネージャー	齊藤 浩史 氏	
	フジテレビジョン 編成制作局編成担当局長兼編成センター室長	山口 真 氏	
	日本テレビ放送網 編成局メディアデザインセンター長兼メディアマネジメント部長	若井 真介 氏	
◆送出部門			第1会場 [301]
10:30	同録ユニットを使用したマスター用ラウドネスメータの開発	TBSテレビ 技術局送出部	松川 仁 氏
10:55	多チャンネル対応音声自動監視装置の開発	TBSテレビ 技術局送出部	中村 全希 氏
11:20	中継局エリア監視システム『エリアPRUS+』によるデジタル放送監視ソリューションの提案	テレビ静岡 技術局放送技術部	渡辺 博之 氏
11:45	マスター改修なしで番組単位の平均ラウドネス値測定が可能!!「ラウドマスター」の開発	読売テレビ放送 技術局技術推進担当	松田 慎一郎 氏
13:00	テレビ西日本でのデジタル放送監視の工夫 ～データ放送・EPG編～	テレビ西日本 技術局放送技術部	一ノ瀬 武 氏
13:25	簡易型番組送出サーバーの導入	テレビ岩手 編成技術局技術部	阿部 喬 氏
13:50	汎用TS送出機による緊急地震速報の高速化	東海テレビ放送 技術局放送技術部	橋本 新士 氏
14:15	ニュース原稿を用いたニュース字幕送出システムの開発	毎日放送 放送運営局送出部	星田 裕司 氏
14:40	マスター設備更新とHD・SD同時マルチチャンネル放送の実施について	テレビ大阪 技術局放送技術部	山口 孝 氏
15:05	IP回線を利用した放送運行データのリアルタイム配信	日本テレビ放送網 技術統括局放送実施部	細田 順一 氏
15:30	CMファイルメディアXDCAM搬入対応について	フジテレビジョン 技術局放送技術センター放送部	井村 紀彦 氏
◆データ放送・デジタルサービス部門			第2会場 [302]
10:30	局内CATVシステムデジタル化更新	TBSテレビ 技術局放送設備計画部	山口 彰 氏
10:55	ロンドン五輪：民放共同サイト「gorin.jp」でのライブ配信	テレビ朝日 コンテンツビジネス局コンテンツビジネスセンター	松下 剛 氏
11:20	放送と連携したデジタルサイネージの開発	日本テレビ放送網 技術統括局技術開発部	川上 皓平 氏
11:45	IPDC方式による放送通信連携の技術的検証	関西テレビ放送 放送技術局技術推進部	坂梨 裕基 氏
13:00	次世代EPGの開発～第二弾 生活空間分析～	日本テレビ放送網 技術統括局コンテンツ技術運用部(兼)技術開発部	石島 健一郎 氏
13:25	データ放送設備の更新	北日本放送 放送本部技術局技術部	山本 憲一郎 氏
13:50	データ放送スーパーによる市町村別天気予報	札幌テレビ放送 IT推進センター	島 昌弘 氏
14:15	データ放送を用いた安否確認サービス『見守りテレビ』の開発	読売テレビ放送 技術局	星野 高久 氏
14:40	セカンドスクリーン連携アプリ メディアトリガーの開発	フジテレビジョン 技術開発局技術開発室開発推進部	福田 直記 氏
◆ラジオ・音声部門			第3会場 [303]
10:30	ラウドネスレベルコントローラの開発	テレビ東京 技術局制作技術部(兼)技術開発部	田中英治 氏
10:55	制作スタジオ音声調整卓更新	関西テレビ放送 制作技術局制作技術部	井田 憲吾 氏
11:20	TBCラジオ 絆スタジオ(第9スタジオ)更新	東北放送 技術局制作技術部	長田 英之 氏
11:45	ミキシング支援装置の開発	仙台放送 技術局放送部	小峰 義央 氏
13:00	DSPモジュールを使用したラジオ工作	中国放送 技術局技術管理部	菅井 和広 氏
13:25	ラジオ放送所への音声プログラム伝送の再構築	中部日本放送 技術センター技術管理部	佐藤 龍二 氏
13:50	インターネットVPNを利用したIP伝送による生放送	ニッポン放送 技術局放送技術部	松井 敏之 氏
14:15	簡易で高効率な非常用予備空中線の製作	RKB毎日放送 技術局技術管理部	光永 直寛 氏
14:40	ミュージックサーバによる楽曲送出について	九州朝日放送 技術局システム技術部	水口 剛 氏

11.15 (木)

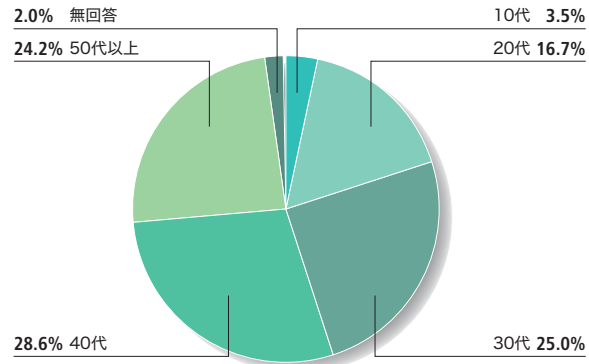
11.16 (金)

Result: Visitor Profile

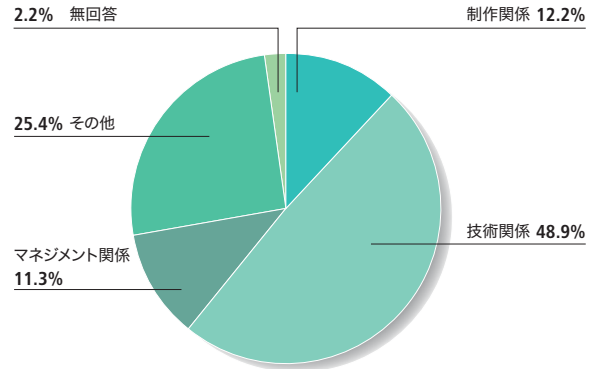


◆来場者の属性

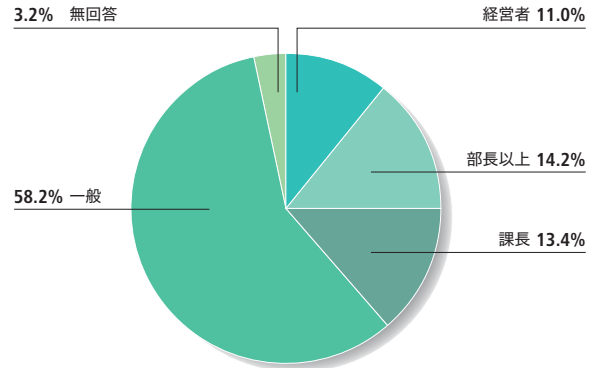
■年代



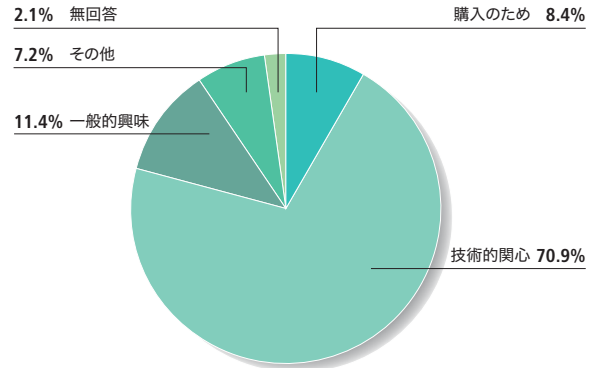
■職種



■職階



■目的



■日別来場者内訳

	11/14(水)	11/15(木)	11/16(金)	合計
国内登録来場者数	10,223	10,259	10,625	31,107
海外登録来場者数	457	208	85	750
合計	10,680	10,467	10,710	31,857

■登録来場者数の内訳

エリア	国・地域数/来場者数	国・地域別の来場者数
日本国内	1カ国/31,107名	日本 31,107名
アジア地域	11カ国・地域/618名	韓国 389名/中国 70名/台湾 41名/タイ 23名/香港 21名/シンガポール 21名/インドネシア 19名/マレーシア 14名/フィリピン 11名/スリランカ 5名/インド 4名
北中南米地域	7カ国・地域/64名	アメリカ合衆国 48名/ブラジル 8名/ペルー 3名/チリ 2名/ウルグアイ 1名/コスタリカ 1名/パラグアイ 1名
大洋州地域	2カ国・地域/2名	オーストラリア 1名/ニュージーランド 1名
中東・アフリカ地域	7カ国・地域/13名	ジンバブエ 3名/モザンビーク 3名/アンゴラ 2名/イスラエル 2名/コンゴ 1名/トルコ 1名/ボツワナ 1名
ヨーロッパ地域	8カ国・地域/42名	イギリス 17名/ドイツ 12名/フランス 4名/スウェーデン 3名/フィンランド 3名/オランダ 1名/デンマーク 1名/ポーランド 1名
不明		11名
	36ヶ国・地域	31,857名



■業種

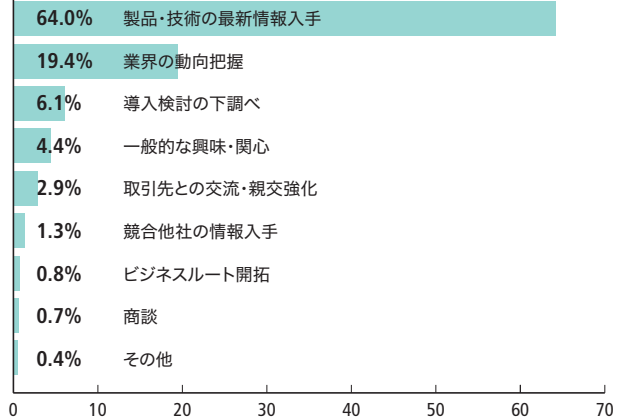
NHK	3.0%	インターネット関連	2.3%
民間放送テレビ局	8.8%	通信事業者	3.0%
民間放送ラジオ局	0.8%	コンテンツ配信事業者	0.9%
ポストプロダクション	7.5%	施設・店舗関係	1.5%
プロダクション	4.7%	官公庁・団体	1.7%
映画・映像制作会社	5.5%	商社	5.8%
ビデオソフト制作会社	1.5%	その他ユーザ	8.9%
レコード制作会社	0.7%	放送機器メーカー	13.0%
PA関係	4.1%	広告代理店	1.3%
CATV関係	2.8%	その他ゲスト	7.7%
舞台・演出・美術・照明関連	3.0%	学生	7.0%
コンテンツ制作関連	2.6%	無回答	1.9%

■関心(複数回答)

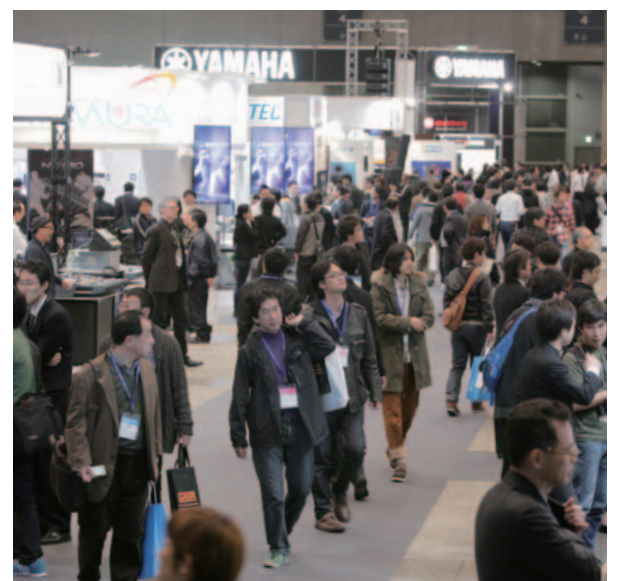
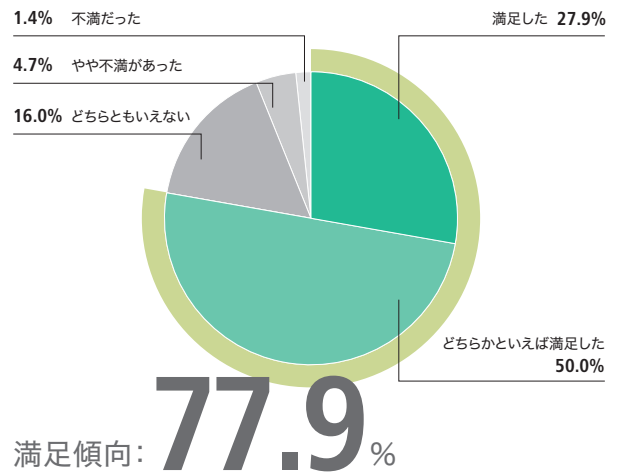
オーディオ機器全般	32.9%	送信システム	8.1%
映像機器全般	53.4%	電源装置	4.1%
マイクロホン	9.9%	測定機器	6.2%
ミキサ	11.5%	各種特機・周辺製品	8.0%
スピーカ	10.8%	ソフトウェア	11.2%
カメラ	26.5%	美術・舞台演出関連	3.8%
VTR・メモリーカード・光ディスク	11.6%	IPTV関連	7.4%
サーバ・ストレージ	10.6%	Mobile TV関連	6.6%
照明機器	9.3%	デジタルサイネージ	9.5%
映像モニタ	14.0%	デジタルシネマ	7.7%
編集・制作装置	20.5%	3D	8.7%
マルチメディアシステム	8.6%	デジタルコンテンツ	8.3%
製作管理システム	3.9%	その他	2.6%
送出システム	8.2%	無回答	2.3%
中継システム	9.7%		

2012年来場者アンケート

◆『Inter BEE 2012』にご来場された目的を教えてください。

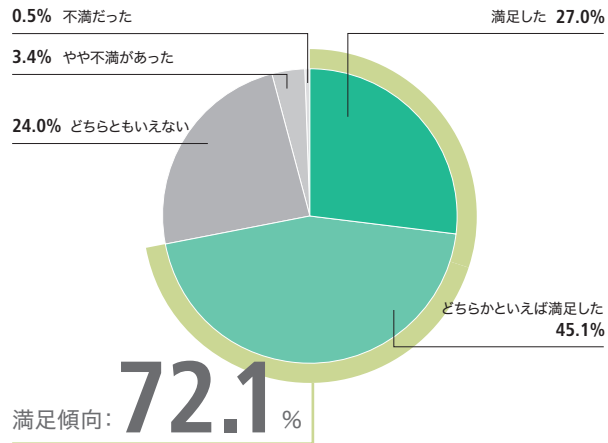


◆今回のご来場の目的はどの程度満足されましたか。

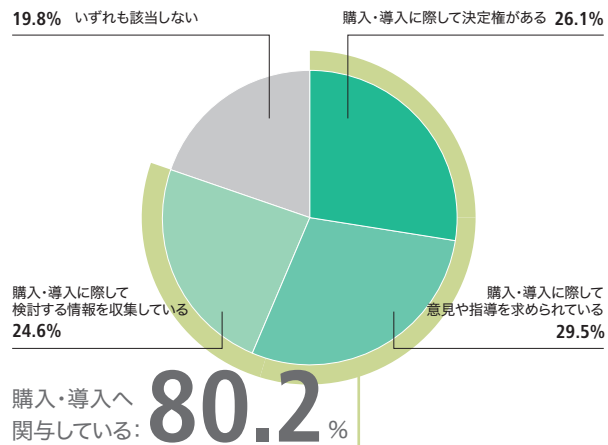


2012年来場者アンケート

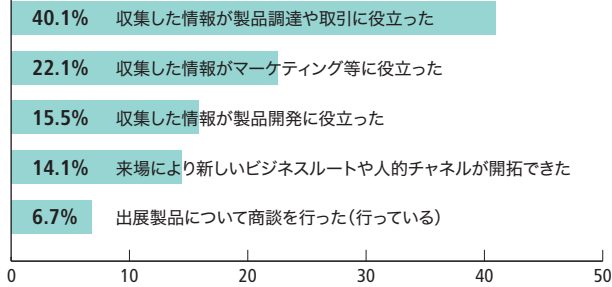
◆コンファレンス、同時開催イベントを聴講・参加されたの満足度を教えてください。



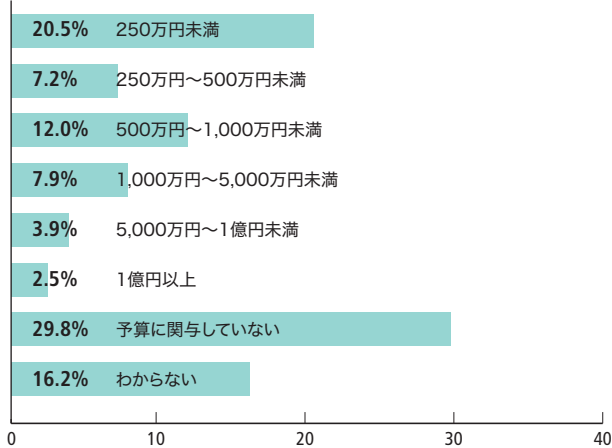
◆御社での製品・サービスの購入・導入にあたって、あなたはどの程度関与されていますか。



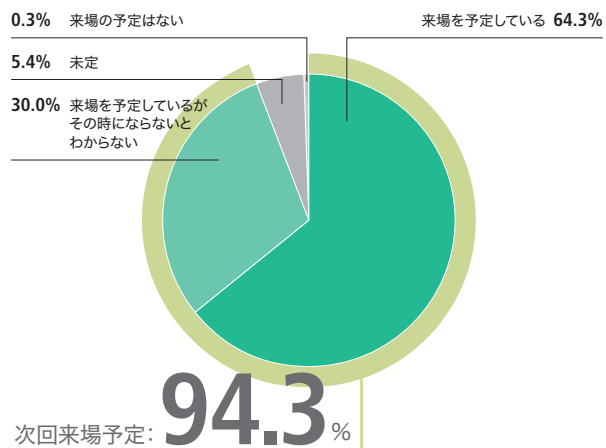
◆『Inter BEE 2012』を見学して、その後ビジネスに役立ちましたか。【複数回答】



◆あなたが関与する製品・サービスの購入・導入に対する予算は、おおよそ年間いくらくらいですか。



◆次回の『Inter BEE 2013』にご来場いただけますか。



■出展者数

展示部門	出展者数	小間数
プロオーディオ部門	289社	284小間
プロライティング部門	22社	25小間
映像・放送関連機材部門	533社	1,048小間
クロスメディア部門	27社	66小間
合計	871社	1,423小間

出展者数: **871**社(過去最多)

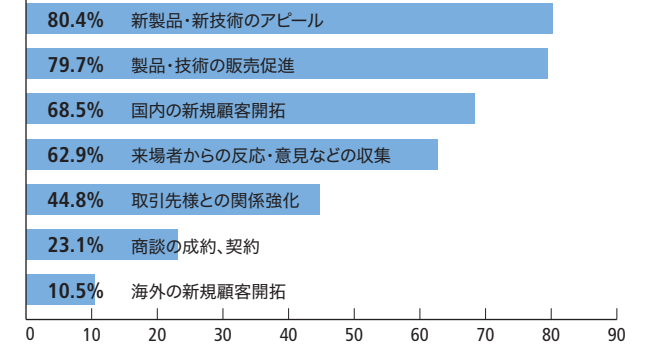
■出展者数の内訳

エリア	国・地域数/出展者数	国・地域別の来場者数
日本国内	1カ国/380社	日本380
アジア地域	6カ国・地域/53社	インド1/韓国11/シンガポール2/台湾19/中国19/香港1
北中南米地域	4カ国・地域/193社	アメリカ173/カナダ18/ブラジル1/メキシコ1
大洋州地域	2カ国・地域/14社	オーストラリア13/ニュージーランド1
中東地域	2カ国・地域/5社	イスラエル4/トルコ1
アフリカ地域	1カ国・地域/1社	南アフリカ1
ヨーロッパ地域	20カ国・地域/225社	イギリス60/イタリア13/ウクライナ1/オーストラリア3/オランダ8/クロアチア1/スイス8/スウェーデン9/スペイン4/スロバキア1/デンマーク5/ドイツ82/ルウェー4/ハンガリー4/フィンランド1/フランス13/ブルガリア1/ベルギー5/ポルトガル1/リヒテンシュタイン1
	36カ国・地域	871社

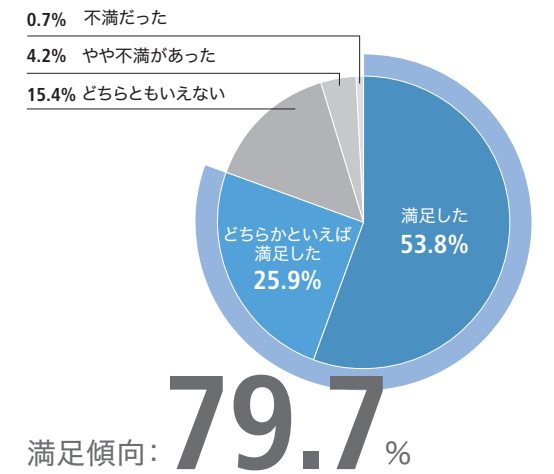
海外出展者数: **491**社(過去最多)

2012年出展者アンケート

◆出展した目的【複数回答】



◆今回の目的達成の満足度



◆今回ターゲットにした業種【複数回答】

民間放送テレビ局	85.3%	商社	25.2%
NHK	78.3%	コンテンツ配信事業者	24.5%
CATV関係	59.4%	その他ユーザ	23.1%
映画・映像制作会社	51.0%	施設・店舗関係	22.4%
ポストプロダクション	46.9%	舞台・演出・美術・照明関係	18.9%
プロダクション	43.4%	PA関係	16.8%
官公庁・団体	37.8%	インターネット関連	16.8%
民間放送ラジオ局	36.4%	レコード制作会社	11.9%
ビデオソフト制作会社	32.2%	学生	8.4%
放送機器メーカー	30.1%	広告代理店	5.6%
通信事業者	27.3%	その他ゲスト	4.2%
コンテンツ制作関連	26.6%		

◆今回ターゲットとした職種【複数回答】

技術関係	84.6%
制作関係	60.8%
マネジメント関係	25.9%
その他	4.9%

Result: Publication and Promotion



1. 広報活動(リリース配信実績)

1. 出展募集開始告知(2/29)
2. 入場事前登録開始告知(9/10)
3. 取材誘致案内(11/8)
4. 開幕告知(11/13)
5. プレスルーム設置(1/14~16)
6. 終了報告(11/16)

2. プレス登録者数

343名(うち海外21名)

4. 国内記事掲載(主な掲載実績)

掲載日	媒体名	内容
3月5日	家電流通新聞	JEITA 「インタービー」出展募集 幕張メッセで11月に開催
3月12日	映像新聞	Inter BEE 2012出展募集を開始 放送の最先端技術が集結
3月15日	ラジオ商業新聞	音・映像・通信のプロ展 11月14~16日 インタービー2012
8月27日	映像新聞	出展者記事(多彩な放送政策機器 フォトロンが展開)
9月21日	電波タイムズ	Inter BEE 2012入場登録の受付開始
9月24日	映像新聞	Inter BEE 2012入場事前登録を開始、関連記事
10月号	日本カメラ	Inter BEE 2012 11月に幕張メッセで開催
10月22日	電波タイムズ	出展者記事
10月29日	映像新聞	出展者記事
11月号	VIDEO JOURnAL	Inter BEE 2012開幕、出展者記事
	Full Digital Innovation(FDI)	特別記事
	放送技術	Inter BEE 2012プレビュー(出展各社)
11月5日	映像新聞	Inter BEE で新たな試み クリエイターの情報交流会実施
11月9日	電波タイムズ	出展者記事
	電波新聞	出展者記事
	鉄鋼新聞	出展者記事
	テレケープル	Inter BEE 2012特集(進化を続けるスマートテレビ)
11月12日	映像新聞	Inter BEE 2012ポスト地デジの本命登場に期待、特集、出展者記事
	建設通信新聞	出展者記事
12月号	OPTCOM	Inter BEE 2012 Preview ~映像伝送を支える技術~
	NEW MEDIA	Inter BEE 2012特集
11月14日	日経産業新聞(東京)(大阪)	国際放送機器展 開幕 先端技術・製品が一堂に集結
	電波新聞	国際放送機器展 きょう開幕 871社が最新技術を披露、超高精細時代が到来 特集、出展者記事
	電波タイムズ	Inter BEE 2012 4Kから8Kへ コンテンツ制作の新技術に注目、特集
	オートメレビュー	国際放送機器展 国内外の最先端技術・製品が一堂に
	PRONNEWS	特集(Inter BEE 2012の歩き方)
11月15日	アジアナビゲーション(東京)(大阪)	国際放送機器展 14日開幕 4Kカメラ普及 業務用に注力
	電波新聞	幕張で「国際放送機器展」 4K/8Kの最新技術披露
11月16日	日刊工業新聞(東京)(大阪)	国際放送機器展 イメージセンサで躍進 日本勢、競争力の源泉、出展者記事
	電波新聞	国際放送機器展 超高精細化取り組み披露
	電波タイムズ	Inter BEE 4K8Kの高精細映像に関する展示が見どころ、出展者記事

掲載日	媒体名	内容
11月19日	電波新聞	「国際放送機器展」から(上) 4K/8K技術に高い関心 「国際放送機器展」レポート(上) 実機アモで分かりやすく提案 Inter BEE 4K・8Kで映像産業活性化
	映像新聞	Inter BEE 2012 4K戦線が急拡大 映像制作領域をフルカバー、出展者記事
11月20日	電波新聞	「国際放送機器展」から(中) 超高精細映像関連技術など紹介
11月21日	電波新聞	「国際放送機器展」から(下) 超高速・超高度カメラなど出展 「国際放送機器展」レポート(中) 多彩な測定器など幅広く展示
	電波タイムズ	出展者記事
11月23日	電波新聞	「国際放送機器展」レポート(下) 4K対応製品群などアピール
11月26日	映像新聞	Inter BEE 2012で各社が公開 次世代符号化方式「HEVC」 Inter BEE 2012出展者記事 秋の展示会に見る高画質化の流れ 次世代DISPLAY最新動向
12月号	B-maga	Inter BEE 2012ポスト地デジ時代のトレンドが浮き彫り
12月3日	映像新聞	Inter BEE 2012レポート、出展者記事
12月10日	映像新聞	Inter BEE 2012レポート、出展者記事
12月14日	電波タイムズ	Inter BEE 2012レポート
12月17日	映像新聞	Inter BEE 2012レポート、出展者記事
	電波タイムズ	Inter BEE 2012レポート
12月19日	電波タイムズ	Inter BEE 2012レポート
12月24日	映像新聞	Inter BEE 2012レポート、出展者記事
12月号	VIDEO JOURnAL	Inter BEE 2012開幕、出展者記事、特集 After Inter BEE 2012、 軽量・コンパクトな4K撮影環境が出揃う ~Inter BEE 2012~
1月号	日本カメラ Sound & Recording Magazine	Inter BEE 2012レポート Inter BEE 2012レポート 特集Inter BEE 2012レポート ~第48回国際放送機器展概観~ Inter BEE 2012に見る映像技術動向、編集システム関連、 サウンド機器編、テレビ制作関連
1月1日	電波タイムズ	特集Inter BEE 2012フォトレポートPart1
1月7日	映像新聞	出展者記事
1月11日	電波新聞	出展者記事
2月号	放送技術 NEW MEDIA	世界4大放送機器展(NAB/BIRTV/IBC/Inter BEE) 特集Inter BEE 2012フォトレポート Part2 放送技術「次の映像」速報Inter BEEブースツアーガイド7人の視点、出展者記事

3. 印刷媒体掲載記事数

	記事数
開催前	80件
開催中	27件
開催後	68件
合計	175件

※2013.1.20現在

5. 国内テレビ放映

放送日	放送局	番組名
11月14日(水)	TBSテレビ(CS)	ニュースバード1600
11月15日(木)	TBSテレビ(CS)	ニュースバード1600
11月16日(金)	TBSテレビ(CS)	ニュースバード1600
11月17日(土)	フジテレビ	新・週刊フジテレビ批評

6. 海外テレビ放映

放送日	放送局	番組名
ヨーロッパ		
11月26日(月)	NTN24	Informativo NTN
12月19日(水)	NTN24	CTS Salud Ciencia et Tecnologia
12月20日(木)	NTN24	CTS Salud Ciencia et Tecnologia
北米・南米		
11月16日(金)	Wealth TV	Wealth International News
11月17日(土)	Wealth TV	Wealth International News
11月21日(水)	CAVE TV	Hard Drive
11月26日(月)	NTN24	Informativo NTN
12月1日(土)	MundoFox	Noticias
12月19日(水)	NTN24	CTS Salud Ciencia et Tecnologia
12月20日(木)	NTN24	CTS Salud Ciencia et Tecnologia
12月28日(金)	NBC Sports Network	Hard Drive
12月30日(日)	MAV TV	Hard Drive
1月2日(水)	TUFF TV	Hard Drive

7. 広告掲載(国内)

発行日	掲載紙誌
9月18日	PRO SOUND
9月20日	ビデオサロン
9月10日	CG World & Digital Video
9月28日	放送技術
8月末日	FDI
9月25日	テレコミュニケーション
9月15日	ビデオジャーナル
9月15日	サウンド&レコーディングマガジン
9月10日	MJ
10月末~	電波タイムズ
11月14日	電波新聞
11月15日	電波新聞
9月1日	月刊 ニューメディア
10月8日	映像新聞
11月5日	映像新聞
11月12日	映像新聞
10月号	放送ジャーナル
11月号	映画テレビ技術
秋号	照明業界総合季刊雑誌「JPL」
11月14日	日経産業新聞
9月号	ステージサウンドジャーナル

8. 広告掲載(海外)

発行日	掲載紙誌
9月号/10月号	Video Plus(韓国映像)
9月号/10月号	PA(Pro Audio韓国音響)
9月号	Broadcast&Production(中国放送・制作)
8月号	IBI(世界広播電視-International Broadcast Information)
9月号	韓国電子新聞
9月号	Asia Pacific Broadcasting(アジア放送)
9月号	ABU Technical Review(アジア)
10月号	Broadcast India(インド)
9月号	Broadcast Engineering (US/Canada edition) (米放送)
8月号	Panorama Audiovisual Brazil (ポルトガル語)
8月号	Panorama Audiovisual Latin America (スペイン語)
9月6日	IBC Daily
9月号	TV Technology(欧州放送-Europe edition)
9月号	JEI(世界版-放送技術)

9. Inter BEE Official Mail Magazine

過去の来場者データベースおよび、2012年の事前登録者にに向けて、「Inter BEE 2012 OFFICIAL MAIL MAGAZINE」を配信。

約 **64,000** 件 **18** 回配信

※情報配信可能なデータ件数

10. Inter BEE Online Magazine

年間を通じてInter BEEだけでなく、関連展示会や業界最新ニュースなど、話題性の高い情報をいち早く配信。

◆Inter BEE 2012出展者情報: **211** 本

うち Inter BEE TV: **160** 本

Online Magazine: **51** 本

◆関連展示会特集: **40** 本

◆業界最新ニュース: **133** 本



11. PRツール(印刷物)の作成

- ・ポスター
- ・招待券、案内状、封筒、レセプション招待状
- ・Exhibition Information
- ・Production & Creator's Night Ticket



12. メディアパートナー

関連業界紙誌がメディアパートナーとしてInter BEEをサポートし、多くの記事を掲載いただいています。



13. Inter BEE 公式 Website

◆公式Websiteページビュー:

5,431,980

◆ソーシャルネットワーク対応

Inter BEE公式FacebookページならびにTwitterの公式アカウントを運用し、2012年の公式Websiteの更新情報や写真による会場内の様子をリアルタイムに発信。

■Facebook

・会期終了直後の「いいね!」数: **1,269** 件(対前年比141%)

・最大リーチ数(Facebookページのコンテンツを見た人数): 約 **5,000** 人

・Facebookページから公式Websiteへのアクセス数: **4,083**

■Twitter

・Twitterフォロワー数(最大): **135**

・Inter BEE関連つぶやき件数: **4,326** 件

※検索条件: つぶやき内容に「interbee」「インタービー」が含まれているもの



音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト

Inter BEE online
www.inter-bee.com

Inter BEEをいつも手の中に！

Inter BEE Onlineで
最新業界ニュースや展示会情報を
チェックしよう！



Twitter でつぶやこう！



Facebookの「いいね！」で
情報をシェアしよう！
業界の仲間たちとも意見交換しよう！



YouTubeで
Inter BEE TVを登録しよう！



Inter BEE 2013

International Broadcast Equipment Exhibition

11.13水 》》15金 幕張メッセ

◆主催 JEITA 一般社団法人電子情報技術産業協会

音と映像と通信のプロフェッショナル展



■お問い合わせ：
一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)
〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル
電話：(03)6212-5231 FAX：(03)6212-5225
E-mail: contact2013@inter-bee.com